01

妖怪――それは人に仇をなす異形の総称。妖怪が引き起こす、窃盗、殺人、器物破損など、そうした被害は現代でも絶えることがなかった。

二〇二〇年、日本政府は妖怪対策局・祓刃（はらいや）を新設。六メートル級ヒト型装甲兵器――凱機（がいき）を用いて、全ての妖怪駆除にあたることを表明した。

二〇二五年　七月二十日　午前零時
東京都　柄沢（からさわし）市・呉ノ通り

誰かに護られるより、誰かを護れるような人間になる。――閉ざされたコックピットの中で、克堂鋼一郎（こくどうこういちろう）はそう決意を固めていた。

ビルの間を縫うように脚を進めるのは、人の形を模した巨大な鉄塊の群れである。

鉄塊は全部で四つ。どれもが操縦席とエンジンを内包したメインブロックから、シーリング材に覆われた関節部を介して、無骨な両手足が接合されている。

そのシルエットには、ところどころに鎧武者のデザインが参考にされているのだろう。腰部には日本刀状のブレードを備え、両肩には平板上の加速装置（ブースターユニット）も搭載されていた。分厚い装甲を着込んだ機械仕掛けの一個小隊。凱機の隊列である。

機体名は〈アカツキ〉。翡翠色をしたツインアイの双貌が夜闇の中に煌めいた。

正面のモニター画面には、ライトによって照らし出されたアスファルトと、先頭を行く機体の背面ばかりが映し出されている。

「俺もこの実戦訓練で結果さえ出せれば……」

操縦桿を握る鋼一郎の指先にはどうしても力が入っていた。踏板（キックペダル）に乗せた足がそわそわとして止まないのは、緊張感よりも高揚感が勝るからだ。

鋼一郎を乗せたアカツキは無意識のうちにその足取りを速めていた。

《こら！　鋼一郎訓練生。隊列を乱さない》

通信機から聞こえる声は凛としたものだった。

刺すような指摘と共に、鋭い目つきの隊員がモニターへ表示される。鋼一郎よりも少し歳上の少女だ。

だが、彼女の表情には十代らしいあどけなさが一切ない。それが美人であることにも相まって、纏う雰囲気は一層に大人びたものになっていた。

「げっ……桃教官……」
《蛙が潰れたときみたいな声も出さないの。それから、今は訓練場の敷地外。だから桃教官ではなく、百千一級と、階級の方で呼ぶように》
濡羽色の髪をかるく振り払い、彼女は鋼一郎をギロりと睨む。
百千桃。画面に映りこんだ彼女の襟元には祓刃隊員の証たる、ツバキを象った徽章が留められていた。
一方で、鋼一郎の襟元になんの徽章もない。代わりに着込んだ防護プロテクターには訓練校での学籍番号が刻まれていた。
隊の先頭を率いるのも彼女の凱機。通信能力を強化するための大型化されたツノ型アンテナと、通常は両肩に二基ずつしか備えないブースターユニットを、脚部にも二基ずつ増設したカスタムモデルだ。
その後ろに鋼一郎ら訓練生の操縦する三機が続いて列をなしている。
「はい、はい。すべては百千一級様の仰せのままに……って感じっすか？」
《茶化さないの。その不真面目な態度は減点対象よ？》
「フン、そんな減点、構いやしませんよ。今日の訓練でそれ以上の結果を出せばいいだけの話っすから」
外出禁止令の敷かれた街に一般人の姿はない。鉄柵同士を組み合わせたバリケードを器用に避けながら、〈アカツキ〉の隊列は街を巡回する。
《あのね……事前に説明したと思うけど、この実戦訓練の目的は、あくまでも前線の空気感を肌で感じてもらうだけのもので、君たち訓練生の役割は私の後方支援なんだから》
桃は敢えて「実戦訓練」と「後方支援」の二つのフレーズを強調する。出撃前に行われたブリーフィングの時だって彼女は同じように、特に鋼一郎へは強く釘を刺していた。
《で、返事は？》
「……了解であります」
けれども、釘を刺された本人が不満を抱いているのも、確かだった。
妖怪から武力をもって市民を守る祓刃隊員――その資格を得るには訓練校で学び、十六歳より実施される凱機での実戦訓練で経験を積まなければならない。
しかしながら、最初の実戦訓練の内容は、『危険度の低い妖怪を探し出し、現場監督を務める正規隊員の指示のもと駆除に当たる』という簡素なもの。
実戦訓練は訓練生の自分でも手柄を立てられるチャンスだというのに、それで終わりでは呆気がなさすぎる。それも桃機の後ろから支援をするだけなんて、これでは普段の戦闘シミュレーターを用いた模擬訓練の方がよほどハードに思えた。
祓夜に志願する若者の割合は、妖怪によって親を奪われた孤児や、大切なものを奪われた者がほとんどだ。そうした重いものを背負う若者ほど、早く正規の隊員になって結果を出したが

る。
　隊列を組むほか二名の訓練生だって、口にこそ出さないが思っている不満は鋼一郎と同じはずだ。
「お言葉ですけど、百千一級。俺たちのパイロット適正と戦闘シミュレーターの結果はどっちも九十点越えですよ。他の訓練のスコアだって、一級には及ばずとも、そこらの隊員と同じくらいは、」
《つまり後方支援は不満ってこと？　あんなゲームまがいのシミュレーターで出た結果なんて、実戦じゃ何の参考にもならないわよ。あれは所詮はお遊びみたいなものなんだから》
「んじゃ、日々の馬鹿みたいにキツい訓練にはなんの意味が？　グラウンド百周を三セットって、マジで正気の沙汰じゃないっすからね」
《……さぁ、無駄話はおわり！　妖怪は夜間にこそ活発になるの、そこの路地からいきなり飛び出してくるなんて可能性もあるんだから！》
「あっ！　今、誤魔化しましたよね！」
《これ以上の私語は減点だから。発言には注意せよ！》
　桃がそう話を区切ろうとした時だ。増設されたアンテナが何かの反応を捉えた。
　情報は桃機より他の三機にも共有され、鋼一郎のモニターにも怪しげな信号の赤が灯る。
《……ターゲット捕捉！　……総員、戦闘配備！》
　反応があったのは正面に聳えるビル同士の狭間。おそらく標的はその奥に潜んでいるのだろう。隊列は桃機を中心に、扇状の陣形を組んだ。
《ターゲットの姿がこちらから見えない以上、危険度も分からない……私が炙り出すから勝手なことはいないように》
　彼女は素早く、機体に懸架（ラック）された突撃機銃（アサルトライフル）を構えさせた。照準を合わせると同時にトリガーを引き絞れば、止めどなく対妖怪弾（AA）が蹴り出される。
　眩い発砲炎と二十ミリ口径の機銃は途切れることを知らない。降りかかる実弾の雨に、標的もたまらず飛び出てきた。
　異様に長い手足と、頭部からは曲がりくねった角を生やす、八メートル前後の異形の「鬼」である。
《なるほど。危険度はまずまずってとこだけど、訓練生にはちょーっとキツイ相手かもね》
　照準を修正。鬼の頭部へと銃口を向け直す。
　だが、その射線上に鋼一郎機が躍り出た。陣形を崩し、前に飛び出したのだ。
《こら、綱一郎訓練生ッ！　君は後方支援だと、》
「この程度の妖怪なら、俺でもやれますよ！」
　シミュレーターを用いた訓練ならば、もっと危険度な妖怪とも戦ったことがある。それに鬼の足元には桃の射撃が掠っていた。運よく弾は抜けているようだが、その動きは確実に鈍って

いる。
「手負いのターゲットに後れを取るほど、生ぬるい鍛え方はされてねぇんだよッ！」
鋼一郎機はライフルを手に、背を向けた標的を追いつめる。
貫った――そんな確信が確かにあった。しかし、鬼は突然にも足を止める。その身を百八十度捻り反転。鋼一郎の〈アカツキ〉へと組み着いたのだ！
不意を突かれた鋼一郎に防御の余裕なんてない。頭部と右腕を抑え込まれ、無防備な首元へと牙を立てられる。
《チッ。だーから、勝手すんなって言ったじゃん！》
呆れの混ざった指摘と共に、桃機が強引に割り込んだ。吸振機（ダンパー）は甲高い悲鳴を上げ、足元には粉塵が舞いがる。
《ちょーっち荒っぽくなるけどッ！》
脚部に増設されたブースターを起動。尾を引く噴射炎と共に、加速させた蹴りは無理やりにでも鋼一郎のアカツキにへばりついた鬼を引き剥がした。
《逃さないから》
彼女はそう冷ややかに言い放つ。すぐさま崩れた体制を立て直し、腰部に備えられた日本刀状のブレード・夜霧（よぎり）へと手を掛けた。
抜刀――ブレードを鞘から抜くが早いか、彼女は鬼との間合いを一気に詰める。剥き出しになった刃は、瞬きの間に鬼の胸元を真一文字に切り捨てた。

◇◇◇

一挙手一投足に全くの無駄がない。自分たち訓練生とは明らかに違う、才能と経験によって研ぎ澄まされた実力差にはおかしな笑いさえ、込み上げてきた。
「……はは、マジかよ」
《マジもマジよ。ところで、随分と実戦訓練を舐め切っていた訓練生がいたと思うんだけど？　どこのナニ一郎くんだったかしら？》
モニターを見れば、先ほどまでの気迫と権幕はどこへやら。桃がモニター越しにこちらを覗き込み、ニヤニヤと笑みを浮かべていた。
「そ……それは……まさか、いきなり振り返って襲ってくるなんて！　あんな行動パターン、シミュレーターには、」
《だから言ったでしょ？　あんなのはアテにならないって。こればっかりは場数を踏まなきゃ、どうにもならないの》
「……はい。仰る通りですね」
「わかったなら、訓練には真面目に打ち込むように！」と彼女が無難に話をまとめ上げようと

した。
その刹那、桃は自分の背後に言い知れぬ悪寒と、異様な気配を察知した。ゾワりとした感覚が背中をなでると同時に、再びレーダーが反応を捉える。
仕留めた鬼の中。――その中でもう一つ、ナニかが蠢いてるのだ。
《総員退避ッッ!》
頭部を潰され、確実に絶命しているであろう鬼の死骸が異様な大きさにまで膨れ上がる。
その原型さえ留めず、ドーム状になったそれを突き破ったのは二対の剛腕だった。
五指を携え、鋭利な外殻に覆われた攻撃的シルエットは、桃を目掛けてまっすぐに迫る。
「あっー……これはちょーっとマズいかも……」

02

二〇二八年　七月二十日　午後一時二十分
東京都　柄沢市・阿久津霊園

季節は夏真っ盛り。ジリジリと照り付ける炎天下を恨めしそうに睨みながら克堂鋼一郎は額に浮かんだ汗を手の甲で拭った。
暑い。それが生地の分厚い隊員服を着ていれば尚のこと。
「やっぱ夏場の隊服はキツイな……」
汗ばんだカーキ色の隊員服の襟には、二つの徽章が留められている。
一つは鋼一郎が訓練生である期間を満了し、正規の祓刃になったことを示すツバキの徽章。
だが、もう一つの徽章は何を象っていたのかもわからない。煤けて、溶け落ちたそれはサイズ感などから、元は徽章だったのだろうと辛うじて見当がつくような金属片だった。
「あれからもう三年ですか。時間が経つのは早いもんですね……桃教官」
苦笑交じりに呟いて、鋼一郎は目前の墓標へと頭を下げる。
なんの変哲のない墓には『百千家之墓』と彫られていた。ここは鋼一郎にとって訓練校からの恩師、百千桃の眠る場所である。
鋼一郎は盆や何かの節目以外にも、毎年この時期になると足しげくここへ通っていた。やや季節外れの花と線香を備えたのなら、その場へしゃがみ込み、手を合わせる。
「引き続き、現状を報告致します。この一年でまた祓刃という組織は大きくなりました。先月

で俺もようやっと、貴方と同じ一級戦闘員にまで昇進できましたし。他に報告しそうな事例と言えば――」

鋼一郎は胸ポケットからメモ帳を取り出し、それを開いた。その中には最近起こった出来事が事細かにまとめられている。

そう――あの実戦訓練の夜から三年がたったのだ。

凱機（がいき）という六メートル級ヒト型装甲兵器の運用、並びに妖怪駆除のために組織された特務機関こそが妖怪対策局・祓刃である。

祓刃はこの三年でさらに大きな組織へと成長した。それに伴い、凱機を用いた駆除活動以外の妖怪対策に力を注ぐことが可能とした。

妖怪は夜間ほど活発になる。これは全ての妖怪に共通する習性であり、そのために多くの都市では夜間の外出禁止令とバリケードを敷き、凱機を用いた巡回警備を行うのが三年前までの主な対策手段だった。

だが現在では、増設された監視カメラや警備ドローンの配備が進み、妖怪の早期発見・早期駆除を可能となったのだ。

わざわざ巡回すまでもなく、ビル同士の狭間、下水道、人気のない路地といった妖怪が潜むのに最適なポイントにも常に監視の目が行き届く。設備が整った都市であればあるほどに、妖怪被害の件数は低下していた。

専門家曰く。このまま監視カメラやドローンの配備が進み、祓刃の規模が拡大していけば、数年後にはすべての妖怪を駆逐するのも不可能ではないそうだ。

「――今日までの殲滅作戦では、大蛇（おろち）、蝦蟇（がま）、海坊主（うみぼうず）などの高危険度妖怪たちの駆除にも成功しました。近い将来。妖怪による殺人や傷害、放火に強盗。そうした妖怪被害が祓刃によって根絶される日もそう遠くないのかもしれませんね」

そこまでの報告を終え、鋼一郎はメモ帳を閉じる。

「最後に、あの夜の妖怪の件ですが。あの腕の本体は未だに駆除どころか、正体さえ掴めず」

明らかに口調が重苦しものへと変わった。それでも鋼一郎は絞り出すように言葉を続ける。

「……ですが、奴は必ず俺が」

なるべく平静を保とうともした。しかし、鋼一郎の感情は鋭い犬歯とともに剥き出しになる。

目を閉じれば、いつだって思い出せた。

妖怪の死骸をいきなり突き破って現れたあの腕も。金属がつんざかれる音に、オイルと血が混ざり合ったむせ返る臭いも。

「貴方の仇は必ず、この俺がッ！」

そう吠えて、立ち上がろうとした時だ。ぴしゃり！　と顔面に冷水を浴びせられる。

「冷たっ！　な、なんだよ⁉」

振り返れば、後ろでは花束と柄杓（ひしゃく）を握りしめた少女がムスッとした顔でこちらを睨んでいた。
日傘の柄を細い首と小さな肩で器用に挟み込んだ彼女の足元には、水の入ったバケツもある。どうやら水をぶかっけてくれたのは彼女で間違えないらしい。
「何してくれんだよ……」
「ここは故人が静かに眠るための場所じゃ。なのに、バカみたいな大声で怒鳴りおって。どうやらお前さんは〝まなー〟という言葉を知らぬようじゃの」
少女の言葉遣いはすこし……いや、かなり年寄り臭い。
こういうのは、なんといえば良いのか。拗らせている？　中二さん？　いや、仮にそうだとしても。初対面の人間に水を浴びせる理由がわからない。
「増して、それが自分にとって大切な者の墓前ともなれば尚のこと」
しかしながら、その指摘に反論できないのも事実だ。
「うっ……たしかにデカい声を出したのは悪かったよ。……けど、見ず知らずの他人にいきなり水をかける奴がいるか？　うへぇ、パンツまでびっしょりじゃねーか」
「そうかの？　少なくとも、いきなり自身の下着事情をワシのような乙女にするあたり、お前さんの煩悩に火照った頭を冷やしてやるべきじゃと思ったが、」
「いや、それはお前が水をぶかっけてくれたからだろうがッ！」
十五か、十六歳くらいか。目の前の少女は口数を減らそうとしなかった。
「ぎゃー、ぎゃーと喚くな。それにワシはな、お前さんがいつまで経ってもそこを退いてくれないから、この身も焼け落ちてしまいそうな日差しの下。ずっーと待っておったのじゃぞ。いくら呼んでも聞こえてないようじゃったし」
そう言われ鋼一郎は自分の腕に巻かれた時計を見る。どうやら本当に彼女にも気づかず、二十分近くもここに居座っていたらしい。挙げた線香もいつにまにか半分近くがすっかり白くなっていた。
玉のような汗を浮かべ、待ちぼうけを食らっていた彼女。その細雪のように白く、肩のあたりまで伸ばした長髪が一番に目を引かれる。
そして、右の手に握られた花束は鋼一郎が墓前に手向けたものと同様、恐らくは造花であろう桜の花束であった。
季節の花を手向けるというのは、そう珍しい話ではない。だが、今は七月の中旬。照り返す日差しが、季節外れということを嫌でも教えてくれる。
それでも鋼一郎がこの花を選んだのは、故人である彼女が好きな花だったからだ。
彼女は春先には決まって訓練生を引き連れては盛大な花見を催すような人だった。……と言っても、本人は花より団子派。もしかしたら、花見より、ごちそうを好きに飲み食いできる口実が欲しかっただけかもしれないが。
どちらにせよ。目の前の白髪少女がこの花束を選んだということは、彼女も何かしらの縁を持っていた人物に違えないはず。

ただ、故人からはこの歳の妹や従妹がいるなんて話を聞かされてもいない。それにこれだけ目立つ白髪とおかしな話口調だ。葬儀で見かけていれば嫌でも記憶に残っているはず。
「もしかしなくても、お前も桃教官に会いに来たんだよな？」
「だから、そう言っておるじゃろ。……と、いってもワシは彼女に一言言っておきたいことがあるだけじゃ。お前さんのように何十分も座り込んだり、喚き散らしたりはしないがの」
「はい、はい、それは悪うございましたね。けど、お前はどこの誰なんだよ？　俺の記憶が正しければ、あの人の知り合いにお前みたいなチンチクリンはいなかったはずだぞ」
「ふむ。下着事情の報告の次は、ワシの名前を問うか。そうか、お前さんは巷でよく耳にする、〝ろりこん〟とやらじゃの！」
「……は？」
渾身のキメ顔を作った彼女に、鋼一郎は困惑するしかない。
「ごほんっ！　単なる冗談じゃよ。ワシは幸村白江（ゆきむらしろえ）。お前さんは揶揄いようがあるからの。少し、悪ふざけが過ぎてしまったわい」
白髪少女、改め白江。
彼女は花と柄杓を置き、自由になった手で日傘を持ち直す。墓前にかがみこみ長々と話していた鋼一郎とは対照的に、本当に短く手を合わせるだけで彼女は立ち上がった。
「なぁ。ほんとにそれだけでいいのか？　……このクソ暑い中、日傘をさしてまできたんだろ」
「言いたいことは言ってやったからの、要は済んだ。ところで。ワシも毎年、この時期になると彼女の墓参りに来てるのじゃが、いつも決まってこの造花と線香が上げられていた。もしや、これはお前さんの仕業か？」
「まぁ……この時期って言うんなら多分、俺だろうけどよ」
「そうか。ならばお前さんに少し訊ねたいのじゃが」
白江は小さくうなずくと、その端正で小さな顔をぐっと近づけた。
「ここに眠る百千桃とはどのような人物だったのか？」
「……は？」
あまりに突拍子のない質問に思わず、そう声が出た。
普通、よく知らない相手の墓に来るのか？　しかし、詰め寄ってきた表情は真剣そのものだ。
「彼女はワシにとって恩人じゃ。けど一緒にいれた時間なんて、数か月程度。じゃから、ワシは彼女のことをほとんど知らぬのじゃよ」
「待て、待て！　わかんねぇって！　そんなに顔されたって、いきなり畳みかけられた俺も整理がつかねぇよ！」
一区切りを置いて。鋼一郎は改めて、桃教官という恩師の顔を思い浮かべた。
「えっと……まず俺らと大して歳も変わんないクセに色々と達観した人だったよな、そのわりにはちょっと抜けてたりもして。……それから、スゲー人ってのも間違いはない。操縦技術が卓越してたからこそ、十八歳でも一級になったうえに、特例で俺らの教官をやってたわけだし

……あとは、」
ふと、鋼一郎の頭の中にある言葉が浮かんだ。
『『誰かに護られるより、誰かを護れるようにならないか？』孤児院で荒れに荒れて、中学では喧嘩に明け暮れていた俺に、初対面だった桃教官が掛けてくれた言葉だよ」
「なるほど、そうじゃったか」
気恥ずかしそうに語る鋼一郎に反して、白江はそう短く呟くだけだった。自分から聞いてきたわりに、随分と淡白な感想だ。
「……んだよ、聞かれたから話してやったんだぞ。変な奴だな」
「いいや。お前さんは彼女のことを十分に教えてくれたさ」
日傘を手に幸村はくるりと、その身を翻す。
それによく考えてみれば、白江は一から十まで全部が変だった。だから今更何を言っても無駄なのではなかろうか。
「実に有意義な時間じゃったよ。ここに来たのも、無駄足ではなかったようじゃ」
「……なんじゃそりゃ」
去り際の彼女は、その口元をいたずらのように釣り上げてて、鋼一郎に背を向けた。

◇◇◇

墓参りで偶然出くわした年寄り口調のおかしな少女――ここまでならば、幸村白江という少女はそれ以上でも、それ以下でもなかったのだろう。
だが、彼女の去り際に鋼一郎の特異な動体視力は、それを見逃せなかった。
笑顔を浮かべた彼女の表情が日傘によって遮られ、見えなくなる直前に。彼女は表情を変えていた。
能面をそのまま張り付けたような無表情。白い髪とは対照的に、夜闇をそのまま映した氷塊のように、真っ黒な瞳をしていたのだ。

03

二〇二八年　七月二一日　午前二時十八分
東京都　柄沢市・山中へと続く道路

祓刃（はらいや）のガレージで待機をしていた鋼一郎（こういちろう）にお呼びがかかったのは、今から一時間前のことだ。
昼間とは打って変わった曇天の下。分厚い雨雲は月明りさえも覆い隠す。
「……」

パラパラと夜雨の粒が天井を叩く音は、荷台に積まれた凱機のコックピット中でもはっきりと聞こえていた。

凱機（がいき）運搬用のトレーラーは舗装された本道からルートを大きく外れて、山中へ続く脇道へと逸れる。そんな荷台で鋼一郎はタブレット端末を片手に、与えられた任務の概要について確認していた。

「廃トンネルの妖怪生活圏（コロニー）か」

この三年で都市部の妖怪対策は十分に整ったといえる。

しかし、その弊害として都市部から居場所を奪われた妖怪が山中や廃屋といった、まだ人の手が入り切っていない場所に密集するようになってしまったのもまた事実。

以前までは単独行動が主だった妖怪たちが、追われた先で集い一つのコロニーを築くようになってしまったのだ。

この先をしばらく進めば、ぽっかりと大穴を開けた廃トンネルが見えてくる。その廃トンネルにも数十体の妖怪がひとつのコロニーを形成していた。

『本日、深夜零時。祓刃は廃トンネルの周辺を包囲。コロニーの解体、並びに潜伏している妖怪の駆除を目的とした殲滅作戦を展開した。だが、作戦開始から間もなくして廃トンネルへ突入した凱機小隊との連絡が途絶えた』……か」

今回の任務の概要を一言で言うのなら、救援要請だ。

祓刃隊員はそれぞれが担当する地域、任務などが明確に割り当てられている。

廃トンネルのある地域は本来、鋼一郎の管轄外であった。しかし緊急事態となれば、話は別だ。ガレージで待機、さらに線用の凱機もすぐに出せる状態で整備を終えていた鋼一郎に救援の要請がかかるのは必然だった。

ざっくりと任務の概要を洗い出した鋼一郎はもう一度、乾いた瞳を閉ざす。

瞼の裏に浮かんだのは、昼間に遭遇した少女――幸村白江（ゆきむらしろえ）が去り際に見せた瞳だった。おかしな奴だったが、なぜあんな空虚な顔をしていたのか？

墓参りで偶然にも鉢合わせただけの自分にわかるわけもないのだが、それでも何処かに引っ掛かりが残る。

なぜあの場で、彼女を呼び止めなかったのか。今更ながらに後悔がこみ上げてきた。

……いや。後悔なんて今回に限ったことじゃない。少なくとも、三年前のあの夜。

「今更すぎるか」

自嘲気味な笑みが漏れると同時に、トラックのスピードが緩やかになってきた。

どうやら、目的地に到着したようだ。頬を強く叩いて、思考をリセットする。

「いけねぇ、今はまず任務に集中なんだ」

◇◇◇

廃トンネルの入り口には厳重にバリケードが敷かれ、その脇には簡易的な仮説テントが建てられていた。鋼一郎はトラックから降りると、現場指揮官の元へと歩み寄る。

「来てくれたのは君だったか」

「克堂鋼一郎・一級戦闘員、現着しました。大蛇の殲滅作戦以来ですね、仙道指揮」

レインコートを羽織った男がゆっくりと振り返る。堀の深い顔立ちをした壮年の男だ。

仙道和樹・特級指揮官。彼とは今回のような救援任務や大規模な殲滅作戦で何度か顔を合わせる機会があった。だから面識もそれなりにある人物だ。

「救援は君ひとりか？」

「えぇ。下手に人員を割いては犠牲者を増えますし。それに俺の目なら」

「そうだったな、ただ用心は怠るなよ。真っ先に連絡が途絶えたのは隊長機だ。このコロニーに潜む個体の中には、敵の頭を潰すという判断を真っ先に下せる者がいるのかもしれない。それに賢い個体であれば、妖術にも精通しているはずだ」

仙道は顎に手を当てると、押し黙るようにしてトンネルの穴の向こうを睨んだ。歳の衰えから凱機を降りることになろうと、その眼光は顕在と言ったところか。

縦幅、横幅、と十分スペースのある廃トンネルは何十年も昔に貨物列車などを通すために掘られたのだろう。電飾の一つもないトンネル内の状況を外から伺い知ることは難しかった。

凱機小隊が帰ってこなかったのだから、探査用ドローンを突入させたところで壊されるのが関の山であろう。

妖怪の持つ知能や体の大きさにも個体差というものが存在する。

人の言葉を操るものから、何十メートルにも及ぶ巨体を誇るものまで。そういった危険度の高い個体は祓刃が設立される以前、時を遡れば陰陽道を対抗手段用いていた時代から、優先的な駆除対象となってきた。

しかしながら駆除の手を逃れ、現代にまで巧妙に生き抜いた個体も一定数が確認されているのも、また事実だ。

「妖怪のコロニーは知能が高い個体を中心に形成される場合がほとんどだ。まとめ役がいなければ、コミュニティが運営できないのは奴らも私たち人間と同じらしい。現在でも野放しになっている九尾のコロニーがその典型例だな」

「けど、それを駆除するのが俺たち祓刃隊員ですから」

鋼一郎はキッパリ言い切った。

そんな彼へと称賛の拍手を贈る男が一人。

「すばらしいッ！　うん、うん！　それでこそ、一人の立派な祓刃隊員ですよ！」

今度は見知らぬ男がややオーバーなリアクションを織り交ぜて、二人の会話に割り込んできた。
白の高そうなスーツを纏った男はどう見たって隊員には見えない。線の細い見てくれと、その顔に張り付けた営業スマイルも同様にだ。
部外者は立ち入り禁止のはず。彼について若干引きながらも尋ねた。
「えっと、仙道指揮……この方は？」
「この方はな、」
間を取り持とうとする仙道に被せるよう、男はまたもオーバーな様子で名刺を差し出す。
「あぁ、大変申し遅れてしまいました！　僕はこういうものですので、是非お見知りおきを！」
「……奈切（なきり）コーポレーション代表取締役……奈切総一（なきりそういち）」
差し出された名刺にはそうあった。
奈切コーポレーションと言えば、凱機を筆頭に様々な備品を祓刃に提供してくれる大企業。祓刃設立から、今日まで多額の資金援助で組織を支えてくれた影の立役者でもある。
いうなれば、祓刃にとってのスポンサー。奈切総一はそのトップともいえる人物だった。
「そうです。僕こそが奈切総一なのです！」
「し、失礼しました！　自分は祓刃の、」
「全然、お構いなく」
無礼を詫びようとする鋼一郎またも奈切は言葉を被せた。
「貴方は克堂鋼一郎・一級戦闘員でしたね。ふふ。まだお若いのに有望な隊員がいると、我が社でも噂になっていましたので。あっ！　サインとか貰ってもいいですか？」
「へ……？」
「デスクに飾りますので。今度の役員会でも、自慢できそうですし」
奈切はイメージしていた人物像よりもずっと若く、飄々としている。代表取締役らしい威厳や雰囲気というものも薄い。
ふざけているのか、それとも素でこれなのか。初対面で困惑が勝ってしまうのだけは、確かだ。
「……あの代表取締役……あまり、ウチの隊員にちょっかいをかけないでください」
「ん？　僕は本気ですよ、仙道和樹・特級指揮官殿」
「そ、そうでしたか……」
仙道の表情も引きつっていた。それでも笑顔を保てているのは、長いあいだ中間管理職をこなしている賜物か。鋼一郎にも「こういう人だから」と耳打ちで教えてくれた。
「えっと……一つ、お伺いしたいのですが、代表取締役はどうして現場まで？」
奈切ならば「部外者だから」という理由でここから追い出されることもないだろう。
ただ、それは奈切がこの場にいる理由にもなっていない。
ここは包囲網と言えど、バリケードを跨げば妖怪の巣食うコロニーだ。そんな危険も伴う場

所に、なぜ彼が訪れるのか？
「僕がこんなところにいる理由ですか……まぁ、視察と言ったところですよ。我が社の製品たちがどのような使われ方をしているのか？　凱機が妖怪駆除を担うヒト型装甲兵器としていかに有用なのか？　ちょうどスケジュールにも空きができたので、それらを現場で確認したくって、」
彼はそこで言葉を区切ると、口の端を釣り上げた。
「あとはやっぱり間近で見たいじゃないですか。凱機が妖怪を駆除するとこなんて」
「その……さすがに奈切社長はトンネルの中に入れませんよ。安全の都合上」
「えっ……ダメなんですか？」
奈切は本気で驚いていた。
仙道に言われたばかりの「こういう人」だからという言葉が頭をよぎってしまう。
「はは……」
戸惑う鋼一郎に、今度は奈切の方から質問を投げかけられた。
彼の視線が向く先は、開放されたトレーラーの荷台で雨晒しになっていた凱機へと向けられている。
「ところで。僕からも質問なのですが、貴方の機体には少々珍しいカスタマイズが施されているようで。旧日本刀型ブレード夜霧（よぎり）とは、また懐かしいですよね」
駐機状態で鎮座する鋼一郎の凱機には、加速装置（ブースターユニット）が脚部にも増設されたほか、基本装備である突撃機銃（アサルトライフル）が外され、その代わりに両腰に一本ずつ、計二本のブレードが懸架（ラック）されていた。
百鬼は眉間をつまみながらに、思考を巡らせる。
「貴方は近距離での戦闘を好まれているのでしょうか？　いや、しかし、夜霧は三年前の旧モデルのはず。今の主流は刀身にチェーンソーの機構を仕込んだ斬月（ざんげつ）なんかですし、もっと高性能な近接武器だって我が社が製造しています。それに、二刀流を使うならば機体にもそれなり調整がいるはず。メカニックの負担にもなるんじゃ」
そう言われて鋼一郎の頭には、あるメカニックの顔が浮かんだ。不本意そうな態度をして機体の関節部をバラす訓練校からの同期の顔だ。
「鋼一郎くんにはなにか、この武器に思い入れでも？」
「そうですね……強いて言うのなら形見といったところですよ。この刀も、この襟元の徽章も」
鋼一郎は淡白な口調で答える。襟に留めた、焼け落ちた方の徽章を強く握りしめて。
「探している妖怪がいるんです。この刀で駆除しなきゃならない妖怪が」

鋼一郎（こういちろう）は機体のシートに全体重を預けた。二対の操縦桿を握りしめ、踏板（キックペダル）を強く蹴る。
「電圧ヨシ。油圧ヨシ。エンジン回転数・正常。関節機構ロック解除。ＯＳ（オペレーティングシステム）プログラム並びに戦術補佐ＡＩ起動。万事オールグリーン――アクティベート・スタンバイ」
荷台でびしょ濡れになった凱機（がいき）が、ゆっくりと起き上がる。回転数を高ぶらせるエンジンも、
「待くたびれたぞ」と言わんばかりに唸りをあげた。
翡翠色をした頭部のツインアイがとらえた情景は、正面のモニターへと映し出される。
そこには鋼一郎の突入を見送る仙道（せんどう）らの姿もあった。
「克堂（こくどう）隊員。現状でわかる範囲の情報は君の端末へと転送したが、やはりこちらからはトンネル内の状況を伺えない。私が外からあれこれ指図を出すより、現場に突入した君の判断の方が正確だろう」
「了解しました。これより、コロニーと思われるポイントへ突入。作戦行動を開始します」

◇◇◇

トンネルの中は、ひたひたと染み出してきた雫が耳障りな音を立てていた。
足元の路線にまで繁茂したコケと、ぬかるんだ足元はスリップの原因にもなりえるだろう。ライトの明かりを頼りに、慎重な足取りで機体を進める。
鋼一郎の操縦する凱機は今年ロールアウトされたばかりの第三世代モデルに分類される『ムラクモ』という、最新鋭の機種だった。
鎧武者然とした機体の見てくれは、三年前に稼働していた第二世代モデルのアカツキとそう変わっていない。しかし高性能化を重視し、強化・改良された第三世代モデルの内部フレームは、過去のモデルを十二分に上回る完成度を誇っている。
第二世代と同じ工場の製造ラインを用いることも可能であり、最新鋭の機体ながらに生産数や予備パーツも潤沢なのも有用な点だ。だからと言って、壊していい理由にならないというのが専属メカニックの口癖なのだが……
ムラクモはトンネルの中腹にまで踏み込んだ。レーダーには点々と妖怪の反応が灯っていく。
「目標確認」
ブレードの握手（グリップ）へと手をかけ、呼吸を浅く整える。
「駆除開始ッ！」

鞘から引き抜かれたブレードはその蒼白に輝く刀身を剥き出しにした。鋼の巨人は、自分へと迫る異形を目視と同時に切り捨てる。
「抜刀――！」
どうやら、切り捨てたのは低危険度の二メートル弱しかない小型だった。だが、その一振りが皮切りになる。
レーダーに映り込むのは鋼一郎を飲み込もうとする妖怪の雪崩だ。トンネルの暗がりに潜んでいた有象無象の人外の群れが波のように押し寄せる。
鋼一郎ももう一本のブレードを抜き放ち、構えた。
躍動するモーターが生み出す馬力は両腕の刀を振りまわすのにも十分だ。降り掛かる火の粉を払うがごとく、コロニーの妖怪を切り裂いていく。
「十……二十……思ったよりも数は多いが、一体、一体の危険度はそう高くない小型ばかり。ということは、」
鋼一郎はもう一度、妖怪の反応を示すレーダーへと目をやった。消し去った小さな反応に対して、トンネルのさらに奥深く。動こうとしない巨大な反応が一つある。
恐らくは、この反応がコロニーの主を示したものだろう。
「出て来いよ。先に突入した仲間をやってくれたのはお前だろッ！」
吠える鋼一郎の声に応えたのは、しゃがれた声の主だった。
「よくも我が同胞を殺めてくれたな、カラクリ乗りめ……」
暗闇の向こうから這いずり出してきたのは、何十本もの細長い脚だ。
トンネルの壁面から天井にかけてを這いずる異形の全長は図りかねる。それでも巨大であることだけは十分に伺えた。
突き出した二本の触角と毒腺を潜ませた牙を震わせながらに、人語を介する妖怪の姿がライトによって照らし出される。節足動物・多足類に分類されるそれを、そのままスケールアップした巨大な百足（むかで）の妖怪である。
「お前、見たことあるぞ。殺人十二件、器物破損三十四件で高危険度妖怪としてデータベースに登録されていた個体だな」
「くくっ……そこまで知っておきながら、単身で儂の隠れ家に乗り込んでくるとは、勇敢な小童もいたようじゃ。お主の仲間はこうなったにも関わらずな」
百足は物陰から何かを、その牙で器用に摘まみ上げる。巨大な鉄の塊。大破した凱機だ。
先に突入した隊員の乗っていたであろう凱機は右腕部が引き千切られていた。コックピットを覆う装甲版には溶かされたような痕跡も見られ、そこから覗く隊員の首はおかしな角度に捻じれている。
その顔に鋼一郎は見覚えがあった。彼もまた仙道と同様に、現場で幾度か顔を合わせたことのある隊員だ。先に昇進した自分に面倒な絡み方をしてくる二つ上の先輩だったが、任務を共にしたあとには必ず一杯の缶コーヒーをおごってくれた。

彼の口癖は「俺はすぐにお前を追い越してやるぜ！」というもの。あと二階級上がれば、お前を追い越せると息巻いていた。

「祓刃（はらいや）隊員の名誉ある殉職には、二階級特進の賞与が与えられるか……ふざけんじゃねぇぞッ」

くつくつと笑い声を零す百足の態度が、鋼一郎の琴線に触れたのは言わずもがなだ。

「その反応、もしやお主はコイツの顔見知りだったか？」

「だったら、どうだって言うんだよッ！」

その鋼鉄の両脚でブレードの間合いへと一気に踏み込む。百足の首を両方向から挟みこむよう、二振りの刃を走らせた。

描く軌道は確実にその首を着実に捉えていた。だが、響いたのは鼓膜の奥を刺すような金属音だ。小さな火花の花弁が散りゆくと同時に、百足を覆う外殻はブレードを弾く。

固い。

鋼一郎はすぐに二本の刃を鞘へ戻した。ならば、打撃ではどうだろうか？

すぐさまムラクモに腰を入れさせ、マニピュレータの五指をきつく結び合わせる。

「無駄じゃよ！」

またしても百足の外殻は鋼一郎の一撃を弾く。結んだ拳は崩れ、それどころかコクピットを中心としたコアブロックと腕部を接合する関節部から、嫌な音が響いた。

崩れたバランスに、湿った足元が相まって機体も転倒しかけた。

「ぐっ……」

日本政府が定めた妖怪の定義は以下の二つだ。

一つ――人から外れた姿や、既存の生物とは明らかに異なるサイズ、部位を持つ個体、或いは部位を欠損させた個体。

一つ――その身に妖気エネルギーを宿し、超常的な現象を引き起こすことが可能な個体。

この定義を満たした妖怪は一切の例外もなく、祓刃の駆除対象に指定される。

そして妖術とは、内包された妖気エネルギーを用いての攻撃や、何らかの効果を発揮する現象を指す。

自由に言語を操り、挑発の術も覚えたこの百足にも知性が備わっていることは確かだ。ならば仙道の想定通り、この妖怪にも妖術を使いこなせるだけの十分な知性も備わっているのだろう。

「硬化の妖術……妖気エネルギーをその甲殻に浸透させ、硬度や密度を底上げしてやがるのか」

「ご名答じゃよ。貴様らのカラクリで儂の身体に傷をつけるのは不可能じゃ！」

今度は百足の方が迫ってきた。単純な体当たりでも強化された外殻に、これだけ巨体を持っていれば凱機を圧し潰すことは難しくない。

紙一重で飛び退いたムラクモの足元を、突進してきた百足がえぐり抜く。震えるトンネル内と出来上がったクレーターは突進の威力を十分なほど教えてくれた。

百足の頭部から延びる二本の触角はこちらの動きを鋭敏に感知する。この狭いトンネル内で、

何度も突進を回避するのは現実的じゃないだろう。
『『ちょーっと、不味いかも』……貴方ならそう言いますかね、百千教官？」
鋼一郎はもう一度、鞘に戻した二振りのブレード・夜霧（よぎり）を引き抜く。蒼白に煌めく刃をただ静かに構えさせた。
「いいぜ、ムカデ野郎。少し、本気でやってやんよ」
操縦桿を通して、ムラクモの握る二振りのブレードの感触を確かめた。程よい重量だ。次世代の近接武装である斬月（ざんげつ）はチェーンソーの刃を回すためのモーターとバッテリーを積んでいるせいで、どうしたって振り抜きが遅くなる。
軽い。それだけが、あの夜に大破した桃機から回収されたこの刀剣の利点であった。
「ふぅ……」
短い呼吸で動機を鎮めると同時に、集中力のギアを一段跳ね上げた。
「標的、高危険度妖怪・大百足……これより駆除を開始するッ！」
「何度やろうと、そのナマクラで儂の身体は切れんよ！」
先に仕掛けたのは百足の方だ。今度は毒腺のある牙を構え、暴走特急のようにこちらへと突っ込んでくる。
ムカデの毒は神経毒の類がほとんど。だが相手にしているのは巨大な百足の妖怪だ。
大破した先輩の凱機には装甲を溶かされたような痕跡があることも覚えている。恐らくは毒自体も妖術で性質を変化、或いは強化することができるのだろう。
「……もっとだ……もっと集中を研ぎ澄ませ」
鋼一郎もまた、飛び出した。不要な装甲を脱ぎ捨（パージ）て、軽くなった機体はさらに速度を増す。牙は鋼の身体を擦過、垂れた毒液は白煙と共にその装甲を溶かすのだろう。
だが、鋼一郎はそれを意にも介さない。集中を研ぎ澄ませた果てに――鋼一郎の目には百足の動きは限りなく遅く、そして鈍重に見えた。
「そこだっ！」
強化された外殻と、甲殻のその隙間。剥き出しになった百足の筋線維へと刃を深くにねじ込んだ。
勢いを余らせた突きは、百足を食い破るだけでは足らず、トンネルの天井にまで達する。
「かはぁッ！！」
流れた赤黒い体液が、凱機の装甲にべっとりと垂れる。装甲を脱ぎ捨て、血をかぶったその様は鎧武者というよりも落ち武者のようでもあった。
「こっ……この程度の傷、妖術を用いれば……すぐにでも塞ぐことが」
「無駄だ」

凱機のブレードや銃火器に装填される対妖怪弾（AA）には、特殊金属・白聖鋼（はくせいこう）が用いられる。
「俵フジ太の大百足退治だったか……昔話の大百足は人間の唾液を嫌い、最後は唾を吐きかけられた矢に貫かれたそうじゃねぇか」
もちろん、それは単なる昔話。実際の大百足に唾を吐きかけたところで、どうということはない。
それに、この白聖鋼は唾なんかよりもよほどタチの悪い代物だ。
どれだけ危険度の高い妖怪でも、一度この白い金属が食い込めば呼吸中枢が麻痺し、血圧低下やチアノーゼ引き起こした果てに死に至る。白清鋼は妖怪にとって紛れもない猛毒であった。
「がっ……！　がっ……！！」
大百足は誰の目にも明らかに弱り始めた。
「まだ、くたばるな。最後に一つ聞きたいことがあるんだよ、クソムカデ」
「くっ……くくっ、奇遇だな小童。……儂もお主に聞きたいことができた」
「ダメだ、俺が先だ。もし、くだらない嘘や言い逃れをしようものなら、このまま首を切り落とす」
そう、ブレードの刀身をさらに奥まで押し込んだ。
「俺は巨大な腕の妖怪を探してる。大きさは腕だけでも、八メートル。言葉は話さないがお前と同様に外殻の強度を増すような妖術も使っていた。知らないか？」
「……腕の妖怪じゃと？　ふん、もはやこの世は人の世じゃ……お主らカラクリ乗りの見つけられん妖怪を、儂が知るわけなかろう」
息も絶え絶えに。嘘をついているようにも、それほどの余裕があるようにも思えない。
今日まで生き延びた高危険度の妖怪ならば、と期待していたが、どうやらコイツも外れなようだ。
「……そうか。なら、冥途の土産だ。お前の質問にも答えてやるよ」
「くくっ……お主の最後の一撃、見事じゃったよ。……儂の動きを完全に見切っていた。……だが、お主は声からして若すぎる」
「もう十八だ。法律上じゃ、俺は成人なんだ。ガキ扱いしてんじゃねぇ」
「……だとしても若すぎる。……なぁ、お主。……お主はどうやってそれだけの見分を身に着けた？」
鋼一郎は少し答えに迷う。この妖怪にどう言えば、うまく伝わるだろうか。
「なんつーか、そういう体質なんだよ。……幼少期のトラウマつーかさ、とにかく動体視力がちょっと異常なんだ」
百足の首がぐったりと垂れ下がる。鋼一郎は腕時計へと視線を落とし、仙道に通信を繋げた。
「……こちら、克堂。高危険度妖怪・大百足の駆除。並びに廃トンネルの妖怪コロニーの解体が完了しました」

05

二〇二八年　七月二十四日　午後二時十分
東京都　柄沢市・祓刃基地六番ガレージ

「祓刃隊員には任務終了後、メカニックに機体の破損理由を報告する義務が発生します。――さて、君をバラバラにする前に言い訳を聞かせて貰いましょうか、克堂鋼一郎くん」

「あはは……いやぁ、なんて言えばいいのでしょうか。」

眼前に突き付けられるのは、鋭く尖った電動ドリルの切っ先だ。言わずもがな、この工具は人間ではなく凱機を解体するためのものである。

青い顔をした鋼一郎にそれを突き付けるは、オレンジ色のツナギ姿に銀フレームの眼鏡をかけた少女。首から下げたネームプレートには「夏樹由依・整備員」とある。

だだっ広いガレージには、凱機を筆頭とした兵器群がずらり一列に陳列されている。夏樹以外にも、同様のツナギを着たメカニックが忙しなく働いていた。

ここは妖怪対策局・祓刃の基地内に設けられた整備区画。追いつめられた鋼一郎の背後には、内部フレームをむき出しにしたムラクモが、ぐったりとした様子でハンガーに凭れていた。

「相手が悪かったんだよ！　高危険度妖怪としてデータベースに登録されている大百足だぜ！」

「ふーん、そうでしたか。しかし、それが機体を壊していい理由になるのでしょうか？」

「そっ……それは……」

「いやはや。最年少の一級戦闘員サマはやることが派手でうらやましい限りですわね」

彼女は茶化すようにおどけて見せたが、顔を見ればわかる。

目が笑っていない。メガネの奥の丸っこい瞳には「許サン、殺スゾ」と書いてある。

それもそのはず。由依はメカニック。鋼一郎が出撃の度、ぶっ壊してくる凱機を修繕することが彼女の仕事なのだから。

「この際です。機体を血まみれにしたことは許しましょう。妖怪だって血を流すんですから、不可抗力でしょうしね。ただ一部のパーツは中に血が入り込んだせいで交換ですが。それから君の操縦が荒っぽいせいで足フレームに多大な負荷がかかっていたのも、いつものことなので許します。現場で戦っているのは君で、それを修理するのが私の仕事ですから。しかし、これはなんでしょうね？　右腕部接合部にバカでかい亀裂が入っていたんですが？」

ハンガーに掛かっているムラクモからは右腕が丸ごと取り外されている。壊れて使いものにならなくなってしまったのだろう。

百足を力いっぱい殴りつけただなんて、口が裂けてもいえるわけが……
「マニピュレータを破損する恐れがあるから、殴ったりするのはやめてくださいって注意したばかりですよね？」
バレていた。機体内のログデータにも目を通されているのだから、当然である。
「し、仕方ねぇだろ！」
「そうですか、けど、中でも一番酷いのはムラクモのエンジンです。もう焼き切れる寸前でしたよ。ただでさえ、君の要望通り限界までリミッターを外しているのに、それでも尚負荷をかけるから」
「あっーもう！　分かったから、まずはその物騒なのを下ろせ！」
「いやです。私の怒りは君をバラバラにしなければ、収まりそうにありませんから」
由依は握り締めたドリルを下ろそうとしない。それどころ電源を入れ、高速回転する先端で鋼一郎を突き刺そうとする始末である。
「ちょっ……マジでやばいって！」
「問答無用です」
幸いにもコードの長さが足りず、ドリルは停止。スプラッタな結末こそ避けられたものの彼女は不満気であった。
「ちっ！」
「あっ、いま舌打ちした」
「しましたが、それがなにか？」
ギロリとこちらを睨む彼女は、下手な上官たちよりも恐ろしい。どおりで基地の隊員たちから「整備班の鬼姫」や「全身チタンの鋼鉄女」なんて物騒なアダ名がつけられる訳だ。
祓刃は男性比率九割を誇るむさ苦しさの詰め合わせだというのに、紅一点である彼女にそんなあだ名がついている時点でお察しである。
彼女は訓練校時代からの同期でもあった。凱機の操縦適性やシミュレーターでの結果が芳しくなかったためにメカニックへと進路を変更した彼女だが、それでも鋼一郎のお説教係であるのは訓練校で席が隣同士だった頃から変わっていない。
「あのさ、由依。俺からも一ついいか」
彼女がドリルを下ろし、両手に何の凶器も持っていないことを確認しつつ、ボソりと呟く。
「はい、なんでしょう？」
「いや、なんつーか。前の方こそ、その恰好っていうかさ」
由依の恰好はツナギの正面のファスナー部分を開けっぴろげ。胸元から、絞られた腰にかけてを露にしていた。そこから覗く黒のスポーツブラと白い肌のコントラストは何というか……本当に目の毒だ。
鋼一郎は彼女のツナギ姿から眼を逸らしつつ、さりげなしに指摘したつもりだった。
実際にはどうにもぎこちないわけだが。
「それ閉じろよ。俺だっていつも言ってるよな、せめてもう少し周りの目を気にしたらどうだ

って」
「いやです。ここは夏場のガレージですよ。ムシ暑くて死んじゃいます」
だとしても、すこしは恥ずかしいという感覚がないのだろうか？
自分の恰好に興味がないところも、学生時代から変わらないらしい。そのせいで身だしなみを整えた彼女が隠れ美人であるという事実に気づける同期はなかなかに少ない。
いつも眼鏡にムスッとした表情をしているのも惜しい。あとは、クールな堅物に見せかけて暴力的なところも。笑えば、年頃の女の子らしくて可愛いのに。実にもったいないと思ってしまう。
「……なんつーかさ……目のやり場に困るんだよ」
「このムッツリめ」
由依が目を細めて、こちらを睨む。それもこちらを軽蔑しきった瞳で。
「い、いや！　べ、別にお前の胸なんて、なんの興味もなくてだな！　ただ、だらしないんじゃないかと……」
「ふーん、私には興味がないんですか。そういえば君は学生時代から、巨乳派でしたよね。いつも、桃教官の胸を見ていたの、バレバレでしたから」
「……は！？　……はぁ！？　見てませんけどぉ！　これぽっちも見てはいませんがぁ！！」
さっきよりも大きなリアクションで必死に抗議する鋼一郎。由依はそんな彼に、ぐっと詰め寄る。
「克堂くん」
「なっ……なんだよ」
「ぱちん！」と額の真ん中をデコピンで弾かれた。額の真ん中には焼けるような痛みが残る。
「目つきがやらしかったので、つい」
「痛っ……！　つい、じゃねぇ！　あと、俺はやらしくもねぇ！」
「どうでしょうか。まぁ、それもいいでしょう。……本来、私が言いたいのは」
由依が一度改まる。
「貴方は無茶をしすぎなんです。いつも注意していると思いますが、」
「……こっちだって探し出さなきゃいけない妖怪がいるんだ。多少の無茶をしてでも」
「君について、私もある程度は理解しているつもりです。ですがね、修理や代用の効く凱機と違って、操縦者である君自身はそれができないんですよ。ただでさえ、貴方は今の階級に上り詰めるために、かなりの無茶もしたというのに」
祓刃の戦闘員には新兵から特級かけて七段階の階級が存在していた。
一定数の危険度を誇る妖怪の討伐件数や組織への貢献度を参照に、新兵から五級戦闘員、四級戦闘員と昇進していくシステムであり、仙道のように前線から退いた場合もこの時の階級が引き継がれることとされている。
鋼一郎の階級は一級戦闘員。最上位である特級戦闘員からは一つ下の階級に位置する。だが

十八歳という若さで、一級にまで上るのは極めて異例なケースでもあった。
この若さで一級になるには大規模な殲滅作戦で戦況を作用するほどの貢献を示すか、年間で百体以上の妖怪を駆除を成し遂げるほどの功績が必須であり、その前例もかつては百千桃（ももち）たった一人であった。
「二人目の最年少一級戦闘員。奇才・百千桃の再来。そう言えば聞こえはいいかもしれません。それに私の場合、克堂くんがあの日から努力を重ねていたことも、その才能を持っていたことも知っています」
「それなら、口うるさいお説教は勘弁願いたいのですが、」
「そうですね。ですが君の場合、その才能さえも諸刃の剣でしょう？」
「うっ……それに限っちゃ、耳の痛い話だよ……」
「君の異様なまでに研ぎ澄まされた動体視力は、たしか拳銃の弾も避けれるほどでしたよね？」
「えーと……それができるのは俺じゃなくて、桃教官。あの人が俺の教官についてたのも、限りなく同じに近い体質の持ち主だったからな。けど俺の場合は避けたくても身体の方が付いてこねぇ」
「それでも秒速三百メートル近くの物体の軌道を目で捉えているんです、十分に異常ですよ。……たしか、なんと言いましたか」
「B・U障害――脳機能解放障害（BRAIN・UNLEASH）の略だ。ほら、よく言うだろ？　人間の脳のほんの数パーセントしか機能を解放されていないって。けど、幼少期に強いストレスを受けると、ごく稀にその脳機能にセーブをかけるリミッターが壊れちまうことがあるらしいんだ。解離性障害とは、また少し違うらしいんだが。とにかくB・Uってのは、人より脳機能が解放された状態。解放された結果にも個人差が出るが、俺の場合はその結果として、眼球周りの神経と筋肉が異様に発達。んで、すこぶる動体視力がよくなったわけだ」
「けれど、リミッターとはソレに制限をかける必要性があるからこそ備わっているんです。その脳は、君の凱機のエンジンと同じでリミッターを外した状態。そんな状態でさらに負荷をかければ、壊れるのも必然でしょう」
「俺の目と俺の脳みそのことだ。俺の身体は俺が一番分かってるつーの！」
「なら、気づいていますよね。貴方の無茶には失明や更なる障害誘発のリスクを孕んでいることも」
「それは……」
鋼一郎はバツが悪そうに顔を伏せた。垂れ下がってきた前髪を後ろへ戻そうと、髪をわしゃわしゃと掻きむしる。
「分かってる。……俺の目と脳みそのことだ。リスクだって承知の上さ」
「……克堂くん」
「俺はこれでも一応、お前に感謝してるつもりだ。訓練校時代から桃教官くらいしか話せる相

手のいなかった俺を心配してくれたことも。いつも壊した凱機を直してくれることもな」
「それなら、無茶を控えて、」
「けど、悪い。俺は今のやり方を変えるつもりもないんだ。祓刃のデータベースに登録された妖怪の中には、特級にならなきゃ情報を見れない奴もいる。特級にならなきゃ参加できない作戦だってある――――なにより今のやり方を変えちまったら、俺はあの妖怪を、桃教官を殺したあの妖怪をぶっ殺せないんだよ」
感情に制限をかけるの苦手だ。これは脳がどうこうという話ではなく、本来の性格ゆえだろう。特にマイナスな感情になるほど、抑え込めない。
剥き出しにした犬歯とともに、鋼一郎のなかのドス黒い感情が表へと現れる。
「……そうですか」
由依は小さくうなずいてくれた。だが、その表情は悲しみと哀れみが混ざり合ったような、そんな顔をしていた。
どうして、彼女がそんな顔をするのか。その心情も察せられるからこそ、鋼一郎は尚更に、バツが悪かった。

06

二〇二八年　七月二十四日　午後六時四十七分
東京都　柄沢市・祓刃基地「まんぷく食堂」

「はぁ。昼間はやっちまったな……」
鋼一郎は基地内に設けられた食堂で大きなため息を吐き出した。
食券で購入した唐揚げ定食はすっかり冷めきって、なかなか手を付ける気にもなれない。
へこたれた雰囲気が滲み出ているのだろう。周りの隊員たちはあからさまに自分との相席を避けていた。
まぁ、ボッチ飯はいつものこと。それを気にしたってしょうがない。
「……」
こんな自分を気にかけてくれるのなんて、由依くらいだ。
両親を妖怪に殺され、孤児院で育った鋼一郎の中学時代は荒れに荒れていた。連日、憂さ晴らしのように喧嘩を繰り返しては、擦り傷まみれで施設に帰る。
この期間で染み付いてしまった喧嘩癖は、訓練校でそう簡単に治るわけもない。よく問題を起こしてばかりの腫物扱いをされていた。そんな自分にも隔てなく接してくれたのが同期の由依だったのだ。

今のような無茶を辞めるつもりはない。それでももう少し、角の立たない誤魔化し方はあったのかもしれない。
「あー……多分ダメだ。……まず誤魔化そうとしてる時点で、アイツは納得しねぇだろうし」
悩めば悩むほどに、重たくなった頭を抱えてしまう。
揉め事の原因にもなったB・U以上に脳に負担がかかっているのではなかろうか。
「随分な様子だな、克堂(こくどう)隊員」
聞き覚えのある声に顔を上げたなら、そこには意外な人物が立っていた。
壮年ながらも、いまだ現役時代と変わらぬ迫力の眼光を備えた祓刃隊員。定食メニューのプレートを抱えた仙道(せんどう)特級指揮官である。
「珍しいっすね、仙道指揮ってあんまり食堂使わないんじゃ」
「そんなことはないと思うが、今日は早めに職務が片付いたからな。それで君とも顔を合わせることになったのだろう。あっ、向かいの席は空いているかな?」
「いや、まぁ、構わないですけど」
「それじゃあ、お言葉に甘えて」
先導は注文した天ぷら定食に手を付けながら、話を切り出した。
「君には廃トンネルの件でお礼を言おうと思っていたが、なにやら悩んでいるようだな」
「ちょっと訓練校時代からの同期と揉めてしまって」
「君の同期というと、あの眼鏡をかけたメカニックの……なるほど、色恋沙汰というわけか」
真顔でそう言われた。
説教ついでに工具で脅される彼女との関係のどこを見れば、そんな浮ついたものを想像できるのか? いや、さすがにそうは見えないはずだ。
「冗談は勘弁して下さいよ。ただの喧嘩で、非は俺にありますから。……それに廃トンネルの件だって、俺は先に突入していた先輩たちを助けられなかったんです。だから感謝されるようなことは」
鋼一郎の口調には、自身への苛立ちが滲んでいた。だが、仙道はそれをきっぱりと否定する。
「いいや、君が現着する以前に彼らは殉職していただろう。君が早期に大百足を駆除してくれたからこそ、彼らの遺体は綺麗なままで回収できたんだ。それに彼らの死で責任を問われるべきは、君ではなく現場指揮を務めた私の方だよ」
箸を止め、彼はその瞼を静かに伏せる。
祓刃ほど同僚の葬儀に参列しなければならない職種も稀だろう。
仙道は預かった現場での死傷者を最低減に抑えるよう努めている。だが、近年問題視されている妖怪生活圏(コロニー)内での作戦は、あちら側の領域に踏み入る都合上、どうしたって後手に回ることが多い。

狡猾な個体であれば、コロニー内に罠を仕掛けることだってある。また今回の廃トンネルの一件のように先遣隊が、高危険度の妖怪に鉢合わせ全滅するケースだってザラだ。
いつだったか。葬儀の最中に、亡くなった隊員の婚約者らしき女性から仙道が激しく責められている現場に鉢合わせたことがあった。
「――――お前は戦わずに、彼を見殺しにしたんだ！」そんな罵倒を浴びせられて尚、表情を崩さぬまま指揮官としての責務に向き合える仙道の意志が堅牢であることに間違えはない。
「ところで」
そう話題を切り出されて、ハッとする。
ただ仙道は自ら話題を切り出しながらも、周囲の隊員たちを伺うような素振りを見せた。
「仙道指揮？」
「いや、すまない。人に聞かれるような場所ではできない話でね。できれば、聞き耳のない場所で頼みたい要件があるんだ」
「……要件ですか？　それに人に聞かれちゃいけないっていうのは」
怪訝な表情を浮かべる鋼一郎だが、仙道は続けた。
「そうだな、第八資料庫がいいだろう。ここに時間をメモしておくから、訪ねてほしい」
「えっ……ちょっ！　仙道さん、待ってくれよ！」
そう言ったが遅かった。仙道は最後の楽しみに残していた海老天をヒョイと放り込んで、席を立ってしまう。
向かいのテーブルには紙ナプキンの上に即席で書かれたメモだけが残されていた。

◇◇◇

メモには「深夜零時・第一資料庫」とあった。恐らく、食堂で第八資料庫と口にしたのはワザとなのだろう。
彼が頼みたい要件とはそれほど機密性が高いのだろうか？
それほどまでに機密性が高いのなら、なぜ他の隊員でなく自分に声がかかるのか？
肝心な要件とやらを聞かなければ、いくらでも邪推ができてしまう。鋼一郎は疑念を抱えたまま、資料室の前に立つ。
第一資料庫に保管されている妖怪の資料ファイルは、低危険度かつ駆除が完了した古いものばかり。すべての妖怪の情報を記録したデータベースも導入された今、わざわざ紙の資料を確認し直そうとする隊員も減多にいない。基地内で密談をするのに、これほど適した場所もないだろう。
ドアを開けたれば、ひんやりとした冷気が鋼一郎の頬を撫でた。
冷房をつけているのか。そうだとしても冷やしすぎだ。
「寒っ……これじゃあ、風邪を引いてもおかしくねぇぞ……」
資料庫の広さ自体はそれほどでもない。ただ室内の電球は最近交換をしていないようで、い

くつかが切れたままになっていた。おまけに資料ファイルがぎっしりと詰まった棚が所狭しと並べられているせいで、部屋の全容を伺うことも難しい。
「ふふっ、またしてもお前さんに待たされるとはな」
棚の影から声がした。
だが、声の高さも口調も明らかに仙道のものではない。ヒョイと現れたシルエットは小さく、そして鋼一郎の予想だにしていない人物だった。
「お前……確か、墓参りで会った！」
「なんじゃ？　お前さんは、もうワシのことを忘れてしまったのか？」
いや、そういうわけではない。年寄り口調で話す変人白髪少女、幸村白江（ゆきむらしろえ）。自分の顔に冷水をぶっかけてくれたヤツを、なによりあんな顔をした少女をそう簡単に忘れるわけもない。
「……いや、さすがにお前みたいな変なヤツ、簡単に忘れられねぇよ」
聞きたいのはそうじゃない。
ここは祓刃基地内の倉庫。一般人の立ち入りは当然禁止なわけだ。そもそもこんな時間に基地の敷地内で、部外者である白江がいること自体もおかしい。
「なんで、お前がこんなところに居るんだ。基地内は関係者以外立ち入り禁止だぞ」
「そんなのワシが関係者だからに決まっておるじゃないか」
「嘘つけ。お前みたいなチビが関係者なわけないだろ」
「むぅ、失礼な！　ワシはアレじゃ、えっーと、なんて言ったか……そう！　〝すれんだー〟体系という奴じゃ！」
スレンダーというには身長が足りないのではないだろうか。彼女のそれは類稀なるツルペタボディだ。
「というか、お前はこんなところで何をしてるんだよ？　ことと場合によっては不法侵入じゃ済まされねぇぞ」
「もう、よい。それについては、お前さんの上に聞け」
そう言って彼女が差し示した背後では、仙道が扉を閉めていた。
「あぁ。彼女は私が招いたのさ」
これで部屋の中にいるのは三人だけ。妙な空気にはむず痒さのような緊張を覚えてしまう。
「部外者を基地内に入れるなんて、ちょっと勝手が過ぎません？　それともまさか、この間の代表取締役みたいに、コイツも祓刃のお偉い様でしたなんて言いませんよね？」
鋼一郎の発言は深い意図のない、単なるたられば話の類だった。
しかし仙道はそれとなく気まずそうに鋼一郎から目を逸らす。
「……実はその、まさかなんだ。……彼女は奈切社長に次いで、祓刃への資金的な援助を施してくれる幸村財閥の一人娘。つまり私たちから見た彼女はスポンサーの親族ということになる」
「……は？」
「お前さんや。ワシにあんまり舐め腐った態度をとっていると後が怖いぞ。ワシの機嫌一つで、

お前さんのクビの一つや二つ」
「はぁ！？　んな理不尽があってたまるかよ！？」
あんぐりと大口を開けて驚愕の表情を浮かべる鋼一郎。その顔がよほど面白かったのか、白江はケラケラと笑いを零す。
「クビというのは冗談じゃ。やはりお前さんは揶揄い甲斐があるわい」
こっちは全然笑えない冗談だ。
鋼一郎は先日に知り合った奈切（なきり）コーポレーション代表取締役のことを思い出す。自ら現場視察に訪れる精神性は尊敬するが、彼もなかなかの変人であった記憶している。
祓刃のスポンサーは変人でなければならない規則でもあるのだろうか？
「ごほん！」
仙道が咳払いで、場の空気を改める。
「克堂隊員は幸村令嬢に対する言葉遣いを改めるように努めろ。なんたって君に頼みたい要件は数日間に渡る彼女の護衛なんだからな」
護衛？　鋼一郎の頭にはクエスチョンマークが浮かんだ。確かに、どこかのお金持ちのお嬢様ならば、誰かに狙われる可能性というのも十分にあるのだろう。
しかし、その護衛を妖怪駆除を専門とする祓刃に持ち込むのはお門違いではないだろうか。
「えーっと……そういう案件って専属のSPだとか、警察に持ち込むべきなんじゃ」
「無論、そんなことワシとて承知の上じゃ。その〝えすぴー〟だったか？　それで済むならワシだってそうしてるさ」
その口振りだと、まるで祓刃でなければ手に負えないような案件にも聞こえる。
ますます困惑する鋼一郎を見かねて、仙道が口を開いた。
「君も知っての通り、妖怪の個体の中には妖気エネルギーを用いて『妖術』を操ることのできるものがいる」
「……そうですが、それがなにか？」
「幸村令嬢は少々厄介な妖怪に付きまとわれていてね。自らの妖気エネルギーを付与し、マーキングすることで標的の位置を捕捉し続ける妖術が使えるんだ」
「ほれ、この通り……いつのまにやら、こんな趣味の悪い刺青モドキが入っていたわい」
彼女が襟元を緩め、首元から鎖骨辺りを晒しだす。
その肌に刻み込まれたのは、赤黒い文様だ。一見したそれは、爛れたケロイドのようにも見える。入れ墨モドキというのも頷けた。
「発動した妖術を長期にわたって維持し続けられる妖怪というのは、さらに珍しい。攻撃系の妖術にしろ状態系の妖術にしろ、並みの妖怪ではその継続時間に制限がある。それらを踏まえ、彼女を付け狙っている妖怪の想定される危険度は、大百足以上。無論、そんなヤツを野放しにはできない」
「そこでワシから提案させてもらったんじゃ。仙道とはちょっとした顔なじみだからの。敢え

てワシを餌にして、その妖怪をおびき出してやろうと。そこで腕の立つ隊員として、お前さんを紹介してもらったんじゃよ。〝びーゆー〟じゃったか？　お主は相当に目が良いんじゃろ？」
つまり、自分の役割は囮作戦における保険というわけか。
つきまといやストーカーといった類の悪趣味な事件というのは、総じて後味の悪い結末が多い。しかも犯人は人間でなく、話の通じない妖怪ときた。
たしかに、これならば最低限の筋は通ってくる。だが、それでも結局のところ、最低限に過ぎない。
「やっぱり、分からない点の方が多いな。囮役のリスクだって大きいし、こうやってコソコソと作戦会議をする理由もわからない。そこまで危険な妖怪に付きまとわれてるのなら祓刃の総力を挙げて、お前の護衛と妖怪の駆除に当たった方が、」
「だから、それができたらそうしてるんじゃよ。ワシにも事情があると察せんか？　それに、事を内密に進めれば、お前にも恩恵があるぞ」
「恩恵？　そんなもんがどこに、」
「その点に関しては私から捕捉させてもらおう。克堂隊員。君は高危険度の妖怪と遭遇する度、百千隊員を殺した妖怪を知らないか、問いかけているそうだな？」
仙道の指摘に鋼一郎は口籠る。
「えっと……今はそれも関係ないでしょう」
「あぁ、直接は関係していない。だが幸村令嬢を狙う妖怪が情報を握っていたと仮定してだ。祓刃が総力を挙げた殲滅作戦を展開すれば、その妖怪に手がかりを訊ねている余裕もないだろう」
「要はコイツの護衛を請け負えば、俺の探してるクソ野郎の手がかりが得られるかもしれないと？」
眦を細めた鋼一郎へ、仙道は静かに頷きで答えた。
「必要な手配と、責任はすべて私が負おう」
「ワシはお前さんに護ってもらいたい。お前さんにとっても悪い話ではない。それを踏まえて問おう。この幸村白江の護衛役を受けてはくれぬか？」

07

二〇二八年　七月二十五日　午後八時七分
東京都　柄沢市（からさわし）・ホテル・グランドからさわ

昨今、巷ではちょっとした宿泊や小旅行のブームが起こっているらしい。都内での妖怪出現率が低下し、外出禁止令（ロックダウン）が緩和され、ここぞとばかりに観光業界が客寄せを行った結果である。

多くの宿泊施設には、奈切（なきり）コーポレーションの監修した対妖怪仕様の地下シェルターが設置されている。これによって安全面が確立しているのも、ブームの要因の一つだろう。
そんなブームについて「休暇のほとんどを基地内の訓練場か隊員寮で過ごす俺には関係ない」と、鋼一郎（こういちろう）は割り切っていた。だから、こんな形で高級ホテルに訪れることになるとは。
ここ、『ホテル・グランドからさわ』は自分の知る限り、この辺りで最も豪勢な二十階建ての宿泊施設だ。
吹き抜けになったエントランスの中央には、抽象的な何かを象ったオブジェクトが設置されており、脇にはお洒落なカフェスペースまで充実している。ホテルマンの対応も丁寧かつ迅速で、チェックインにもさほど時間を取られなかった。
さすが、高級ホテル。不満の声なんて一つも出ないのだろう。
だが当の鋼一郎は眉間に皺を寄せ、仏頂面のままエレベーターが下りてくるのを待っていた。
その隣には白江（しろえ）も一緒に並んでいる。
「このホテルに滞在し、囮役である幸村令嬢を護衛しつつ、現れた妖怪の駆除にあたる」それが持ち掛けられた要望の具体的な概要だった。
「……のう、今更じゃが」
白江が鋼一郎の袖を引く。二人の姿は傍から見れば、年の離れた兄妹にでも見えるのだろう。しかし、当の二人の間を流れる空気は妙にピリついていた。
「……んだよ？」
「いや、今更ながらに、無茶ばかりを言ったワシの護衛役なんかをお前さんはよく受ける気になってくれたものだと思ってな」
「いや、ほんとに今更だな」
昨日の一件。鋼一郎には、まだいくつか納得しきれない点がある。
白江が言う「事情」とは何なのか？　そもそもマーキングまで施した妖怪は、なぜ執拗に彼女を狙うのか？
当人である白江はそれを自覚しているだろうし、仙道もそれを知っているような様子だが、自分にだけ故意に情報を伏せているのだ。片や自分の上官、片やどこかのお嬢様。二人が自分より強い立場であること明白だが、頼みごとを持ち掛けたにしては、あまりにフェアでないようにも感じた。
それでも不満を敢えて声に出さず、護衛役を請け負ったのにも、当然ながら理由がある。
「半分は仙道指揮も言ってたように、桃（もも）教官を殺した妖怪の手がかりを探すためだ。もし、お前を付け狙う妖怪が何か情報を持っているのなら、駆除する前に喋ってもらわなきゃならねぇんだよ」

祓刃（はらいや）の駆除活動によって、危険度の高い妖怪は数を減らしつつある。それは無論喜ばしいことだが、百千桃を殺した妖怪への手がかりが消されていくのともと同じだ。大きなリスクを背負ってでも、高危険度の妖怪と接触できるチャンスが欲しい。

それが鋼一郎の本音でもあった。

「打算的じゃの」

「悪いかよ？　俺だって必死なんだ」

「それで？　半分と言ったからには、もう半分の理由も当然あるのじゃろう？」

もう半分の理由。それもまたシンプルなものだ。

「俺が祓刃隊員だから。妖怪に狙われている奴がいれば助ける。それ以上でも、それ以下でもねぇよ……というか、お前の方こそ怖くないのかよ？　囮役なんて役回り」

マーキングの妖術について。鋼一郎の見解は以下の通りである。

確かに発動した妖術を長期間にわたって維持できる妖怪は珍しい。しかし、『妖術』である以上は源になる妖気エネルギーを消費するはず。その妖怪は内包する妖気エネルギーの総量がすこぶる多いからこそ、出来る芸当なのだろう。

ならば理論上、白江に付与されたマーキングにも期限がある。妖気エネルギーが切れて、マーキングを解除されるまで、立て籠もってしまえば安全が確証されてしまうのだ。

「どんな妖怪でも、流石に正面から祓刃の基地には突っ込んでこないと思うんだ。だから、やっぱり今からでも厳重に警備してもらった方が」

「同じことを二度も言わすな。ワシにはワシの事情があるんじゃよ。それにワシが自ら囮役を買って出なければ、その妖怪も野放しのままじゃろう？」

「それはそうなんだけどよ……」

あまりに毅然と返されるせいで、鋼一郎の方が答えに迷ってしまった。

白江の言う通り、立て籠もってしまえば彼女の身の安全は保障される代わりに、彼女を付け狙う妖怪は最後まで姿を現さないかもしれない。その後に改めてマーキングを施し彼女を狙う可能性や、他の第三者が標的に移り変わる可能性だって拭いきれない。

原因を根っこから潰せるのなら。それが最善であることもまた事実だ。

マーキングにも期限があるのなら、襲撃しやすい状況を作り出すことで故意的に誘い出すこともできるはず。

囮作戦である以上、白江を人通りのない路地にほっぽり出せばいい話にも思えるかもしれない。しかし夜道で白江を襲わせては、近隣の住宅街にも被害が出る。

逆に事前から近隣住民の避難を行っては囮作戦を気取られるかもしれない。近隣に祓刃の関連施設がある場合も同様に警戒を強め、山中など露骨に襲いやすい場所ではかえって罠だと気取られる可能性も考慮しなければならない。

重要なのは塩梅だ。「妖怪対策の専門家ではない白江が個人的に不適切な対策とった」と見せかける必要がある。

その観点から護衛を一人連れてホテルに閉じ籠るというのは妙案だと思う。囮作戦であることを気取られないのはもちろんのこと、ホテル内に対妖怪シェルターが設置されているおかげで、人的被害も最小限に抑えることが出来る。
懸念点はホテルのスタッフや宿泊客が囮作戦のことを知らないことだ。結果的に一般人を巻き込んでしまうことに関して、鋼一郎は納得できたわけじゃない。
だが、万事都合よく進む作戦という方が稀なもの。妖怪を確認次第、自分がなるべくホテルから引き離すような立ち回りが求められた。
「そうなると、あとでルートを確認。それから、近隣の監視カメラの映像も何とか手持ちの端末で確認できるように仙道司令に掛け合って、」
ブツブツと、思考を巡らす鋼一郎。
その横でエレベーターが下りてくるまでの暇を持て余したのか、また白江がその袖を強く引っ張った。
「ところで、お前さんよ」
「今考え中なんだが」
そんなことは知らんと言わんばかりに、白江は話を切り出した。
「それにしても、ここはワシの想像以上に華やかな場所じゃのう」
「そうか？　こんくらいのホテル、金持ちのお嬢様ならいくらでも来る機会がありそうだけど」
「いや。少々、華々しすぎるのではないか？〝ほてる〟とやらはまぐわいの場なのだろう？」
「ブッッ！」
鋼一郎は思わず噴き出した。このガキは、一体何を言っているんだ。
白江は心底不思議そうな顔で首を捻る。以前より変人だとは思っていたが、どうやら持っている知識にも誤りというか、偏りのようなものがあるらしい。
鋼一郎は彼女の頭を軽く小突いた。
「痛っ……！　な、何をするのじゃ！」
「ばーか。それはラブでエッチなホテルのことだ。んでもって、ここは普通の宿泊ホテルだっつーの！」
「む？　そうなのか。……ということは、ここはまぐわいの場ではないわけだ。それなら安心だな！　ワシの艶やかさに充てられればお前さんもタダではすまいないだろうし！」
「お前のどこにそんな艶やかさがあるかよ。……つか、まぐわいとか、そういう言い方をするな。……お前、ほんとにお嬢様なんだろうな？」
綱一郎は若干、顔を赤らめながらに指摘する。
「ほほう？　しかし、この気品に溢れたオーラを見ても尚、ワシがお前さんのような公僕ろりこん野郎と同等に見えるか？　立場をわきまえろ、この下郎の性犯罪者め！」
「誰が公僕ロリコン野郎だ！　誰が下郎の性犯罪者だ！　誰がっ！」
コイツはなぜ、頑なに自分をソッチ側の人間に仕立て上げようとするのか。
ふと辺りを見渡せば、刺すようなな視線が鋼一郎に集まっていた。傍から見ればホテルのエ

ントランスで歳の離れた兄妹二人が大声で「まぐわい」だの「ロリコン」などと連呼しているようにみえるのだ。
当然、疑いの視線を浴びせられる。夏休みシーズンで親子連れの宿泊客なんて、両親が子供の目と耳を塞ぎ「見ちゃいけません」と言い聞かせていた。
「あー……これはその……そ、そう！　コイツはただの妹で！　そういう関係とかは一切ありませんから！」
「それ、逆に怪しまれんか？」
「……誰のせいだと思ってんだ」
必死の弁解も虚しく。疑いの視線に耐えきれなくなった鋼一郎は、白江を抱えてホテルの階段を上がることにした。
事前に手配してもらったのは、十七階の角部屋だ。いくら鍛えている足腰と言っても、これを走って登り切るのはなかなかにキツイ。
息も絶え絶えになりながら渡されたカギでドアを開ければ、白江が我一番にベットに飛び込んだ。両の手を広げて、プールにでも飛び込むような勢いである。
「おぉーすごい！　すごくふかふかじゃよ！　見ろ！　飛び跳ねたりもできるぞ！」
「はぁ……はぁ……ちょっと、待て！　……部屋に妙なものがないかとか、色々調べなきゃ、なんねーんだぞ！　あと、飛び跳ねるな！」
というか、別にさっきの話を蒸し返すようないとはない訳だが、いくら護衛とは言え男女が個室に二人っきりというのはどうなんだろうか？
それも相手は、祓刃のスポンサーともいえるような財閥の一つ。愛娘というくらいなのだから、それ相応に大事にされているようなものだが。
「お前さん、難しい顔をして……さてはいやらしいことを！」
「まだ、そのネタで引っ張るか！　ほら降りろ、んでもって、じっとしてろ！」
白江の襟首をヒョイと掴み上げ、ベッドから降ろす。コイツには、自分が狙われている危機感がちゃんとあるのだろうか。
「……つか、この部屋も少し寒くねぇか」
「そうか？　ワシにはこのぐらいが心地よいのじゃが」
「いや、絶対寒いだろ。お前に風邪なんて引かれたら、護衛にも支障が出る」
今更ながらに、室内がやけに肌寒いことに気づいた。ホテル側からのサービスで冷房を事前に入れてくれるのはありがたいが、ちょっと温度設定が低すぎる。
「抱きしめて、温めてくれてもいいんじゃよ」
「馬鹿いえ。ったく、リモコンはどこだよ？」
四つん這いになってエアコンのリモコンを探す鋼一郎。
頬を膨らませた白江はその脇の小洒落た椅子に腰を下ろした。足を組み交わし、テレビまでつけ始める始末である。

ただ、やはり彼女について一番気になるのは、以前に見せたあの顔だ。
能面をそのまま張り付けたような無表情。白い髪とは対照的に、瞳はどこまでも暗く沈む。夜闇をそのまま映した氷塊のように、真っ黒な瞳――やはり、普段の彼女とかけ離れたあの表情は鋼一郎の頭から離れない。
はじめは妖怪に付きまとわれていたからこそ、あんな顔をしたんだとも仮説を立てた。
しかし彼女はこの囮作戦に積極的かつ協力的だ。そこから恐怖のような後ろ向きな感情は感じられない。
だからこそ、彼女がどうしてあんな顔を見せたのか。
「その〝りもこん〟とやらはそれじゃないか？」
「あ……あぁ、そうだな」
リモコンは定位置の壁に掛かったままになっていた。無駄な手間を取ってしまったようだ。
鋼一郎が手を伸ばした時、示し合わせたようなタイミングで部屋に備え付けのインターフォンが鳴る。
「ルームサービスです」
「ルームサービス？　そんなの、頼んでねーぞ」
警戒心を抱きつつ、モニター画面をのぞき込めばホテルマンの男が映し出されていた。
「ご予約にあった夕食をお持ちしました」
「夕食？　仙道指揮が気を利かせて部屋と一緒に予約でもしてたのか……」
半信半疑ながらに鋼一郎はドアを開ける。だが、それが不味かった。モニター画面に映ったのが人間だったからこそ、油断してしまったのだ。
開いたドアの向こうで鋼一郎を待っていたのは、ぽっかりと口を開けた銃口である。
「――――は？」

08

ほとんどゼロ距離で蹴り出された銃弾が届くまでの、コンマ数秒。その目には、弾丸の軌道がはっきりと見えていた。
動体視力が優れているとは、具体的にどういうことか。それを説明するのにちょうどいい経歴があった。
克堂鋼一郎（こくどうこういちろう）は今日まで、野球でホームランしか打ったことがない――――
孤児院の球技大会や中学の助っ人試合と、野球には何かと縁のある方だったのだ。
B・Uによって獲得した動体視力をもってすれば、子供の投げた玉なんて止まって見える。
あとはバットの振り方と、力加減を覚えればさよなら逆転ホームランを飛ばすのも容易い。
同世代の中には鋼一郎より優れた体格や筋力を持つ人間なんていくらでもいる。その中でも

鋼一郎だけが特筆して目立ったのは、「見てから、動ける」というアドバンテージが大きかったからだ。
そんな鋼一郎でも拳銃の弾は避けられないと、本人が自覚している。
一口に動体視力と言っても、上下左右に動くものを捉えるＤＶＡ動体視力と、遠くから近づいてくるものを捉えるＫＶＡ動体視力に二分される。
拳銃の弾を避けるのに用いるのは後者。そして、鋼一郎は集中力を高めることで、後者の特性をさらにワンランク上のステージまで引き出すことができた。
ざっくりと言えば、鋼一郎の目には拳銃の弾がスローモーションに見えるのだ。
しかし、それはスローモーションに見えるだけ。見えていたとしても、体が動きに追い付けない……いや。きっと、恩師である百千桃（ももちもも）ならば出来るのだろう。
彼女は、鋼一郎と極めて同じに近い目をしていただけでなく、身体能力までもが異常だったのだ。彼女の場合、Ｂ・Ｕによって身体能力のリミッターも外れていたのだろう。

◇◇◇

「――――は？」
避けはできずとも、見えるのだから着弾点をズラす程度のことはできる。内臓へのダメージを少しでも減らすために脇腹で受けた。
「がっ……！！」
焼けるような痛みで後ろへと仰け反る鋼一郎へ、ホテルマンの男は再び照準を合わせる。今度は頭だ。眉間ど真ん中をフロントサイトがばっちりと捉えている。
……野郎、人を撃つことに慣れていやがる。
だが、それは同時にチャンスでもあった。男もまさか、こっちが一発目をズラして受けているとは思わないはず。
「――ッ！」
乾いた破裂音を合図に鋼一郎は弾丸を頭蓋で受けた。頭蓋のカーブに弾の先端を滑らせるように。凱機（がいき）の装甲を斜に構え衝撃をいなす技術と容量自体は同じだ。額の肉が数十センチえぐり取られるも、腹筋を頼りに仰け反った体制を立て直す。
「なんだと！？」
まさか、頭を撃った相手が立ち上がるとは思っていなかったのだろう。鋼一郎は驚愕の間抜け面にきつく結んだ裏拳をねじ込む。
「現役の祓刃隊（はらいや）員を相手にしたのが悪かったなッ！」
膝から崩れながらもホテルマンは両腕を前に構えを取る。キックボクシングか、その派生か。

ただ自分の目を相手にその動きでは遅すぎる。ガードの間を掻い潜るよう、ダメ押しの中段蹴りで意識を完全に刈り取った。
「どうした、お前さん！」
くつろいでいた白江（しろえ）も部屋の奥からが慌てて飛び出してきた。二発も銃声が響いたんだ。飛び出してきてもおかしくはない。
「その傷……まさか、撃たれたのか！？」
「っ……油断しただけだ。見かけは痛々しいかもしれねぇが、急所は外してある。それより、すぐに準備しろ！　囮作戦は中止、すぐにここから逃げるぞ！」
鋼一郎は血が目に入らぬよう、上着の袖を破って傷口を縛った。すぐに血で滲んだが、ないよりはマシだ。
「寧ろ、弾が抜けてない分、脇腹の方がキツイな……」
これもないよりはマシ、寧ろ護身用には必須だと判断し、ノックアウトした男の拳銃を取り上げる。グリップにあるのは星マーク。中国から大量のコピー品が流れた背景をもつ、５４式（トカレフ）か。
銃自体はヤクザといった連中の御用達で、大して珍しいものでもない。珍しいのは、そこに装填された真っ白の弾だ。明らかに見慣れない色の銃弾だが、鋼一郎はこれに極めて近いものを知っていた。
「……凱機の突撃機銃（アサルトライフル）に装填される対妖怪弾（ＡＡ）」
トカレフに装填されたそれは、凱機用の弾丸をスケールダウンしたようなものだった。弾の原料となる白聖鋼（はくせいこう）は特殊な製法でしか加工することが出来ない。そして、その製法を知るのは祓刃のメカニックと、凱機の制作に携わる奈切（なきり）コーポレーションの二つだけだ。
「……ダメだ。痛みのせいで思考をまとめてるだけの余裕がねぇ」
そもそもだ。白江は高危険度の妖怪に狙われているのではなかったのか。それなのに襲ってきたのは、明らかに自分たちを標的にした「人間」の刺客だ。
鋼一郎の思考はそこで行き詰まってしまうだろう。
「準備できたぞ。……それより、これは一体どういうことじゃ」
「俺が知るかよ。妖怪に恨まれる覚えならいくらでもあるが、流石に同じ人間にまで恨まれることはしてねーよ！」
このホテルに入り込んでいる刺客が一人とも限らない。正直分からないことだらけで、頭の中がぐちゃぐちゃだ。元より頭を使うのだって、苦手の方なのに。
ただ一つ、ハッキリとわかることもある。

「今から、俺たちはこのホテルを出る。……敵の正体、人数、配置も分からねぇ以上、隣室の野郎がいきなり襲ってきてもおかしくない。なにより一番マズいのは、ここに俺たちがいるってことがコイツらがバレてることだよ」
「それは不味いのか？」
「ここは仙道（せんどう）指揮が秘密裏に滞在先として選んだ場所だぞ。それがバレてるってことは、まだまだ襲われる可能性があるってことだ」
騒ぎを聞きつけ、周辺の部屋からも宿泊客がゾロゾロと溢れてきた。誰が刺客かもわからない。増して、彼らが民間人ならば祓刃隊員として危険に巻き込むわけにもいかなかった。
「仕方ねぇ！　来い、白江ッ！」
問答無用で彼女の小さな体を肩に担ぐ。
「えっ、ちょっ……ワ、ワシになんて恰好をさせるんじゃ！」
「うるせぇ！　これが鋼一郎流お姫様抱っこだ！　我慢しろ！」
彼女を米俵のように担いだまま、鋼一郎は走り出す。
「ワシをなんじゃと思っている！」
ホテルから脱出するには、まず一階まで降りなければならない。
だが、エレベーターを使うのは論外だ。スピードが遅い上に、刺客と鉢合わせた才の逃げ場がない。階段を使うのも当然ナシ。どうしたって待ち伏せられる可能性がある。
だからこそ、鋼一郎はエントランスの吹き抜けにアタリをつけた。
「まさか、お前さん……まさかじゃよな？」
「あぁ、そのまさかだよ」
深くひざを折り、落下防止用の柵を軽々と飛び越えた。下まではざっと五十メートルはあるんじゃないだろうか。一瞬の浮遊感から、すぐに二人の足元を重力が捕まえる。
「この馬鹿者がぁぁぁぁぁぁァァァァァ！！」
大丈夫だ。この目はしっかりと見えている。
十八階からエントランスに叩きつけられるまでの間に、設置されたオブジェクトの真横を素通りする。そのタイミングをこの目で見定め、掴まることが出来れば――――
「今ッだぁ！」
風切り音ががなる中、白江を抱えたのとは逆の手でオブジェクトの出っ張りを掴んだ！
途端にその腕一本に二人分の体重がのしかかる。
「ぐっ……！　桃教官仕込みの根性を舐めんじゃねぇぇぇぇ！！」
筋繊が一本ずつ千切られていくような痛みを根性で抑え込む。落下の勢いを押し殺し、彼女と腹の傷を庇うよう着地した。
「ッ……！　セーフ！　セ――――フッ！！」
「〝あうと〟じゃろうが、大馬鹿者め！　無茶苦茶しよってからに！！」
勢いよく、後頭部を白江にぶん殴られた。その細腕のどこにそんな力があったのか、脳みそ

がゴンゴンと揺らされる。
「痛ってぇな！　今のは必要な無茶だ！　殴ることはねーだろ！　殴ることは！」
確かに、彼女にしてみては自分を抱えていきなりの飛び降り自殺だ。怒るのだって無理はないが……
「ワシは己を壊すような無茶をするなと言っておるのじゃ！　護衛役が自分の身すら守れぬなど、論外極まりない！」
白江がジッと、鋼一郎を睨みつけた。つい最近も、同じようなことを言われたばかりだ。勢いに捲し立てられるまま、バツが悪そうに顔を逸らす。
「……わ、悪かったよ」
鋼一郎は一度、頭の中でこれからの順序を整理した。
抱えていた白江を下ろし、裏手に隠した凱機を回収。そのまま少しでも、ここから離れて仙道と合流し形成を立て直す。
ここまでを確認し裏口にまで走ろうとする。だが、ガラス張りにされたホテルの正面玄関から、その向こう。一面に広がる闇の中で、鋼一郎は目を合わせてしまった。
「……なんだ、あれ」
赤く輝くソレに生気は感じられない。妖怪の持つ瞳ともまた違う異質さだった。
ホテルから漏れる明かりが徐々にそれのシルエットを照らし出す。
全長にして、六メートル以上。夜間明細の施された装甲は分厚く、そして重圧の印象を与えた。恐らくはエンジンとコクピットの詰まったコアブロックから無骨な四肢を生やしたそれは紛れもなく凱機であった。

09

「……なんだ、あれ」
鋼一郎（こういちろう）が見開いた瞳の先で、凱機がゆっくりこちらへと足を進める。
特務仕様のカスタム機だろうか？　見たことのない凱機（がいき）だ。
祓刃隊員の乗機であるムラクモが装甲版を着込んだ鎧武者を模しているのだとしたら、あの凱機は真逆。必要最低限の装甲だけを身に纏い、機動性に特化させたであろう姿は黒装束を纏う忍者のような印象を与えた。
その頭部に据えられた単眼のカメラアイだけが、闇の中で不気味にギラついている。
仙道（せんどう）が救援に送ってくれた凱機ではないかとも一瞬期待した。だが、そんな期待も容易く裏切られてしまうだろう。
「ふっ……ふ、伏せろォぉぉ！！」

エントランス中に響き渡るよう、腹の底から声を絞り出した。
鋼一郎の目には見えていた。――謎の凱機が腰に懸架（ラック）した突撃機銃（アサルトライフル）に手をかけるまでの挙動が、酷くスローモーションで。
次の瞬間には鳴り止まぬ轟音が鋼一郎の声をかき消していた。ガラス張りの正面玄関は容易く破られ、破片が飛び交う。銃弾はエントランスを食い破るような勢いで被弾し、鋼一郎が捕まったオブジェクトも倒壊する。
むせ返るような硝煙の匂いに呼吸が詰まった。それでも頭上に降り積もった瓦礫をはらいつつ、頭を上げたなら、そこには度し難い光景が広がっていた。
鋼一郎は思わず、そこから眼を逸らす。ついさっきまで豪勢なホテルのエントランスが、まるで撃ち合いの繰り広げられた戦地の一画のようになり果てたのだ。
「……野郎ッ……何してくれてんだよ」
フツフツとした怒りで頭に血が上っているのがわかる。この惨状を作り出した凱機はゆっくりとした動作で、荒れ果てたエントランスへ踏み込んできた。単眼のカメラアイをギョロギョロと動かし、何かを探っているようなしぐさを見せる。
「……なんじゃというのだ」
白江（しろえ）もゆっくりと体を起こす。彼女もこの光景に息を呑んだ。言葉が出ないといった顔だ。
「白江、作戦変更だ」
鋼一郎がボソリと呟く。
「お前は今から、このホテルの地下シェルターに逃げこめ。お前を狙う刺客が誰かわからない以上、なるべく人の多いところで固まっておくんだ。絶対に一人にはなるな。それから、仙道指揮や救急隊にも連絡を取れ」
「……わ、わかったが、お前さんはどうするのじゃ」
「決まってるだろ。俺はあの一つ目野郎を止めるんだ」
あの凱機が何なのか？　操縦者に目的があるのか？　そんなことは、この際どうだっていい。エントランスに居合わせたのは、鋼一郎たちだけではない。何の関係もない民間人にも、野郎はためらいなく撃ちやがったのだ。
「……許せるかよ、こんなふざけた真似をされてッ！」
白江を狙う妖怪や第三勢力に咥えて、謎の凱機まで現れた。この「混沌」と称するのが相応しい状況で鋼一郎を突き動かすのは己のポリシーか。
――誰かに護られるより、誰かを護れるようになれ。
その言葉が、かつての恩師の凛とした声で脳内に反芻する。
「無茶だ！　いくらお前さんの目が特別だろうと、人の身体じゃ、」

「無茶じゃねぇ！　策はある！」
白江の静止も聞かず、鋼一郎は弾かれた弾丸ように駆けだした。
弾痕だらけになった大理石の足場はとても走りやすいとはとても言えなかった。舞い上がった粉塵のせいで視界も悪い。それでも鋼一郎は忙しなく、瞳を動かしあるものを探す。
それはホテル内の景観を乱さぬよう、エントランスの端の方へひっそりと設置されていた。先ほどの銃撃のせいで置き場から転がり落ちていたが、機能性に問題はない。
鋼一郎は転がり落ちた、消火器を拾い上げる。
「おい、一つ目野郎ッ！　こっちを向けよッ！」
めいいっぱいの怒号を挙げて、鋼一郎は消火器を放り投げた。
ハンマー投げの要領で背骨を軸に。ありったけの遠心力と加速をつけた消火器は、カメラアイに直撃。噴き出した霧状の消火剤が凱機の視界を白く塗り潰す！
だが、これであの凱機のパイロットから視界を奪えたとは限らない。メカニックの由依（ゆい）曰く、凱機にはカメラアイのみならず、集音センサーや熱センサーなど、全身に散りばめた情報収集機関が人間でいう五感のように外部の情報を観測し続けるそうだ。
カメラアイを覆う消火剤だって、拭ってしまえばいいだけのこと。
ライフルを手に凱機が、鋼一郎へと狙いを定めた。その単眼の奥で、レンズを絞りピントを合わせているような挙動が見える。さっきのようにでたらめにぶっ放してくるわけじゃない。確実に脳天をロックオンされたのだろう。
「……はっ、十分さ」
鋼一郎は額から血を流したままの顔に不敵な笑みが浮かべる。ニッと口の端を釣り上げ、鋭く尖った犬歯を剝き出しにした。
一瞬。そう、一瞬が欲しかったのだ。凱機の注意が僅か数秒でも自分だけに注がれれば、それで十分だった。
「来やがれ、ムラクモッ！」
掌に忍ばせたスイッチを弾いたのならば、謎の凱機の背後で粉塵に紛れて翡翠色をしたツインアイが煌めく。

10

背後から現れた鋼一郎（こういちろう）のムラクモは、謎の凱機（がいき）を捕捉すると同時に加速装置（ブースターユニット）を吹かせ、その場へと組み伏せた。
第三世代以降の凱機には操縦補佐用のＡＩが積まれている。
どうしたって凱機の複雑な挙動を二本の操縦桿と踏板（キックペダル）で制御するには限界があった。それ

を解消するために導入されたのがＡＩであり、操縦者の癖や傾向を学習、そのデータを各部のバランス調整や姿勢制御などのアシストを行うのだ。
「そのまま抑え込めッ！」
鋼一郎は端末のスイッチを弾く。
十分なデータを蓄積したＡＩならば、手にした端末を介して単純な命令を与えることもできた。簡単に言ってしまえば遠隔操作のラジコンのようなものだ。
抜け出そうともがく凱機を傍目に、鋼一郎はムラクモの背へとよじ登る。振り落とされそうになるのを、必死にこらえながらのコックピットへと繋がるハッチに手をかけた。
組み伏せるだけなら簡単でも、やはり暴れ続ける凱機を遠隔操縦だけで長期間抑え込むには限界があった。鋼一郎がその体をコックピットに滑りこませるとほぼ同じタイミングで、凱機は強引にムラクモの巨体を押しのける。
「ぐっ……！」
体勢を立てないしながらも、ムラクモは腰部のブレードへと手をかけた。そのまま一歩、また一歩と後方へ下がり、凱機の注意を引いく。
まずは被害の少ない場所まで、敵を引きつけなければ。
「目標、所属不明の凱機……これより目標をアンノウンと仮定。鎮圧するッ！」
エントランスから離れたホテルの駐車場で、その真っ白な刀身を抜き放った。そのまま間合いへと踏み込み、ブレードを振るう。
「――抜刀」
アンノウンも機銃を捨て、新たに抜き放ったブレードで鋼一郎の刃を受けた。サバイバルナイフのように短かなブレードもまた、鋼一郎の見たことのない代物だ。恐らくは狭い場所で取り回し性能を重視した、この凱機だけのオリジナル武装か。
二機がぶつけ合った刀身は互いに「ヂヂヂ……」と耳障りな音を立て、火花を散らした。
さっき押し返された手ごたえで、大まかなアンノウンの馬力は掴めている。
あの機体も恐らくはムラクモと同じ、第三世代の凱機に相当する。差異は装甲を何枚も重ね防御性能を強化したムラクモか、敢えて装甲を捨て機動性を強化したアンノウンか。二機の馬力はほとんど同じに思われたが、
「負けるかよッ！」
鋼一郎はキックペダルを強く踏みにじる。
確かに同じ第三世代同士の凱機なら、馬力はほとんど同じ。刃物同士で打ち合ったなら拮抗状態が続くだろう。しかし、あらかじめ機体のリミッターを外してある鋼一郎のムラクモは違う。
エンジンの鼓動もそこから生み出される馬力も、アンノウンを一回り上回る。
ムラクモの握った夜霧（よぎり）の刀身がナイフへと食い込み、その刀身を力任せに砕く。そこですかさず鞘から鋼一郎は二本目の刃を引き抜いた。

二振り抜刀――崩したガードをさらに、済し崩す。
「無力化してパイロットを引きずり出してやる！」
野郎が何を考えて、こんな真似をしたのか？　鋼一郎はそれを問いたださなければならなかった。
防御を取ろうとするアンノウンの予備動作も鋼一郎の目にははっきりと見えている。
「エンジンを潰せば、テメェも止まるだろッ！」
この距離ならば、その動きが見えるだけで十分だ。大きく夜霧を振り上げ、アンノウンのコアブロックに刃を打ち下ろす。
薄っぺら一枚の装甲にこれを防ぐ術はない。その場に崩れるアンノウンをモニター越しに確認した鋼一郎は肺に溜った空気を絞り出す。
「うっ……」
腹に銃弾が入ったまま操縦するのにも無理があった。下腹部から足元にかけて血でべっとりと染まり、危うく貧血症状を起こしかけた。
部屋の襲撃からここまで、B・Uによってもたらされる動体視力に頼りすぎたのもマズかった。その負荷が畳みかけ、頭も重ければ、目元の筋繊維がジクジクと痛む。
なんにせよ、無茶を重ねたのは事実だ。一瞬でも、その目を休めようとシートに深く持たれたときだった。
アンノウンの単眼に再び、赤い光が灯る。コアブロックの装甲がひしゃげるような一撃を受けながらも、地べたを這いずるような動きで再起動したのだ。
「なっ……！？」
とどめが浅かったか。最悪なタイミングで虚を突かれた。アンノウンは機体内部に格納された予備のナイフを手に、ムラクモへと刺突する。
刀身こそ短いが、その切れ味に何ら遜色はない。刀身が爆音を鳴らすのは、近年主流となった近接武装である斬月（ざんげつ）と同様に、この刀身にもチェーンソーの機構が仕込まれているからだ。
近接において要ともいえる脇腹から腰に掛けてを、高速回転するナイフの切っ先に抉られた。どす黒く噴き出したオイルは鮮血のようにあたりへと飛散する。
「野郎ッ……やってくれるじゃねぇーか」
アンノウンの単眼が膝を付いたムラクモを見下ろす。それは無機質で機械的なカメラアイのくせをして嘲笑のようなものが含まれていた。
野郎のパイロットも、腹の中で嗤ってやがるのか。それが鋼一郎の闘争心をさらに焚きつけた。
「今度こそ止めてやるよッ！」
立ち上がるムラクモ。しかし、アンノウンは夜霧の間合いよりさらに深く。両肩をすぼめながらにナイフの間合いにまで踏み込んだ。互いの装甲同士が掠れあうようなゼロ距離では、ムラクモもその双刃を振るえない。

再起動したアンノウンの挙動は格段に洗練されていた。あきらかにムラクモの二刀流へ対処した立ち回りに変化している。
鋼一郎がそれに気づくと同時に、今度はナイフの銀閃が足と胴をつなぎ合わせる関節へと食い込んだ。関節同士を覆うシーリング材を引き裂き、電送系を断つ。
「……しまった！？」
アンノウンの装甲に阻まれ、顔も見せないパイロット。
鋼一郎には、「野郎も自分と同じだ」と今の挙動で確信できた。途端に動きがよくなったのも、それが原因だ。脳の一部から制限が取り払らわれたＢＵの発症者。自分のように動体視力が並外れているのとも、また少し違う。
――こちらの戦い方に順応するようなものか？
ムラクモは腰と片足が使い物にならず、鋼一郎も貧血とＢＵの負荷で倒れる寸前。このままさらに動きが洗練されたアンノウンとやりあっては、勝ちの目もない。ならばいっそ、
「イチかバチかってやつだな」
双肩のブースターを百八十度反転し逆噴射。動かなくなった足の代わりに強引な推力で再度間合いを取ろうとすれば、当然アンノウンだって追ってくる。自分にとって有利なこの間合いを譲りたくないのだろう。
「逃がさない」そう言いたげにアンノウンもまたブースターを鋭く吹かした。
「……あぁ、それでいいぜ」
ムラクモが左手に握りしめた夜霧をその場へと捨てた。フッと力が抜くように、マニピュレータから、なんの躊躇もなく武器の片方を手放したのだ。
操縦桿から指を離せば、機体は気だるげに排熱口からは真っ白な蒸気を溢れさせる。
想定外の挙動にアンノウンも足を止めた。鋼一郎の見立てが正しいのなら、これが一番効果的なはずだ。
アンノウンのパイロットが鋼一郎の二刀流に順応したというのなら、その眼前で堂々と立ち振る舞いを変えてやれればいい。これなら順応もクソもないはずだ。
ムラクモは残した刃の握り手（グリップ）を両腕でしっかりと握りしめ、地面を蹴り出す。
二刀流から一刀流へ。順応されるよりも早く、そして鋭く――その蒼白に輝く刃を、足を止めたアンノウンへと振り下ろした。

11

「……ッ」
きつく瞳を閉ざし、指で抑えながらにジクジクとした痛みを誤魔化した。
アンノウンには、脳天から胸元辺りまで刃が食い込んでいた。コックピットを圧し潰す寸前、ギリギリまで。今度こそエンジンは停止し、その特徴ともいえる単眼のカメラアイも見るも無

残に真二つになっていた。
さすがの鋼一郎(こういちろう)でも、荒れていた頃の喧嘩独学だけで長物を振り回すのにはどうしたって限界がある。警察や自衛隊と同じように、祓刃(はらいや)にも年に一度剣道大会が催されることを感謝した。
増して鋼一郎に凱機(がいき)におけるブレードの扱いを叩き込んだのは、桃(もも)教官なのだ。訓練の度、何度しごかれてきたか。半ばトラウマのようでもある経験は昨日のことのように思い出せた。
だが今はのんびりと思い出に浸っている場合でもない。
アンノウンも第三世代の凱機ならば、コックピットの位置も同じなはず。
大まかなアタリをつけたならムラクモはその背面へと回り込み、装甲とフレームの間に刀身を食い込ませた。
「お前がどこの誰で、何を考えてこんなふざけた真似をしたのかは知らねぇし、それを取り調べるのも俺の仕事じゃねぇ。けど、そのツラくらいは拝んでおかなきゃ割にあわないよな？」
テコの原理を応用し、コックピットを覆う装甲板を簡単に引き剥がす。
これでパイロットとご対面。そう思われた。
しかし、そこにあるのは密集した機械部品だけ。人の姿なんてありはしないのだ。
「おい、おい……これは何の冗談だよ」
六メートル代の凱機にコックピットを設置できる空間など限られている。他にコックピットを覆う装甲版らしいものも見当たらない。
代わりに見つかったのはフレームの背面に刻印された「百鬼」の文字。これがアンノウンの正式な機体名なのだろう。
ふと、鋼一郎の頭にある仮説が浮かぶ。
「……まさか、遠隔操作」
それは鋼一郎も暴走する百鬼を取り押さえるために使った凱機の機能の一つだ。
だが、そんなことは不可能なはず。ムラクモに積まれたＡＩは端末を介して操縦こそできても、その挙動は大雑把なものに限定される。凱機の運動性はパイロットが乗り込むことで最大限に発揮されるものであり、今回のような状況下でなければほとんど使われない機能でもあった。
現にムラクモのＡＩは百鬼の隙をついて捕えることが出来たが、長時間にわたって抑え込むことはできなかった。
それに百鬼のあの挙動。とくに再起動してからの洗練されたナイフ裁きには目を見張るものがあった。あれが操縦補佐用のＡＩを用いた遠隔操縦でできる挙動なのだろうか？
「流石にありえねぇだろ……」
だが事実として、パイロットは百鬼の中にいなかった。
本来、コックピットが収まる筈のスペースに詰まっている機械類。メカニックでもない自分

に詳細がわかるわけもないが、これがムラクモに搭載されたＡＩより数段上を行く高性能なＡＩと、その膨大な情報を処理するための機材だとしたら、どうだろうか？
そうならば、遠隔操縦というよりも完全な自律起動型といった方が適切なのかもしれない。
鋼一郎がＢ・Ｕによってもたらされる恩恵の一つであろうと誤認した順応能力の高さも、ＡＩがムラクモの二刀流を学習したのであれば、説明がついてしまう。寧ろ、そちらの方がしっくりと来るくらいだ。
ＡＩによる自律起動を可能とした「無人機」。だとしても、こんなもの誰が、何の目的で作ったのか？
鋼一郎の頭の中にまた一つ疑問が増えてしまった。この短かなスパンで増えすぎた疑問は脳を焦がすのに十分だろう。
形自体が押しつぶされ真っ二つになった単眼のカメラアイが、瞳を細めて嗤っているようにも見えた。嫌な悪寒が鋼一郎の背筋を撫でる。
「っ……」
由依（ゆい）なら何か分かるのではないだろうか。そんな淡い期待を抱いて、ムラクモに記録されたデータを彼女へと転送する。
「……わかんないことを何時までも考えてる暇はないよな……白江（しろえ）の奴を回収してここを離れねぇと」
鋼一郎はムラクモを降りると、ホテル内の地下シェルターを目指す。
脇腹の傷を庇いつつ、長い階段を下りれば分厚い白聖鋼（はくせいこう）に全面を覆われたシェルターへと辿りつく。
シェルター内は異様に肌寒い。シェルターを覆う白聖鋼の白が余計に寒々しい印象を与えているのか、それとも自分が思っていた以上に血を流しすぎたのか。
「……ははっ、この程度でへばってたら桃教官にドヤされるんだろうな」
自嘲を漏らしながら、鋼一郎は白江を探す。幾つかある人だかりの中、彼女は鋼一郎の言いつけ通り一番人数の多いグループに紛れていた。
ただ、やはり彼女の真っ白な髪は異様に目立つ。その頭を目印にすれば、彼女を見つけることもそう難しいことではなかった。
もっと用心するなら、自分の上着でも何でもを彼女の頭に被せるべきだったと後悔する。
「お前さん！」
白江もこちらへ気づいたようだ。その表情には安堵の色が浮かびあがる。
鋼一郎も彼女が駆け寄ろうとした途端に「パン」と乾いた破裂音が響く。
「……は？」
白江の小さな体はその場で一回転。糸が切れた人形のように、その場へ倒れこむ。

シェルター内の誰かが悲鳴を上げた。
彼女の背後に視線を投げれば、鼻血を垂れ流した男が立っていた。ホテルマンに扮したあの男だ。
その手に握ったのは十センチ程度の自動小銃、デリンジャー。恐らくは裾に内に隠していたのだろう。
白聖鋼の弾は妖怪にとって猛毒でも、人体には何の影響を及ぼさない。それでも鋼一郎が脇腹と額に傷を負ったように、十分の殺傷能力はある。
「どけっ！」
鋼一郎が人込みをかき分け、男を取り押さえようと走る。
「テメェ！　何してんだよッ！」
男は白江に向けていた銃口を鋼一郎に向けてくるかと思われた。だが、男は銃口をそのまま自らの口内へと咥え込んだ。素早く引き金を引けば、男は簡単にそのまま後ろ倒しになる。
何ら躊躇のない自殺だ。男は最後、虚ろな目で機械的に引き金を引いた。
「……なんだよ、何してんだよ」
白江が胸元を撃たれるのを鋼一郎の動体視力は確かに捉えていた。
「クッソッ！」
鋼一郎は頭の中に浮かんだ最悪の考えを自ら振り切り、彼女へと駆け寄る。人命救助の訓練ならば受けている。傷口を塞ぎ、止まった呼吸を正常な者へ戻せば。
まだ、助けられる！　そう自分へ言い聞かせ、彼女へと触れた。
「……冷たい」
鋼一郎に伝わる熱はほとんどない。それどころか、自分の身体から熱を奪われているような錯覚を覚えるほどだった。
いや……冷たすぎる。
鋼一郎は再び、彼女へと触れる。やはり、ゾッとする程に冷たい。資料庫での再開に、ホテルの個室。そして、このシェルター内。思えば、彼女と一緒にいる夜間だけはずっと「寒い」と感じていた。
「……妖怪は夜間にこそ、活発になる」
それは忘れもしない、桃が教えてくれたことだ。活性化するのは行動のみならず、妖術やその妖怪が持ち得る性質も例外ではない。
「なぁ……白江、お前は」
鋼一郎は彼女の冷たい体を抱き起し、胸元を開く。
そこは分厚い氷に覆われていた。弾丸は氷に阻まれ、彼女を傷つけることなく止まっている。
この肌寒さの正体は、氷を生成・操作できる妖術が夜間で活性化し、余分な冷気が体外に漏れ出ていた結果だった。
「――――バレてしまったようじゃの」
倒れていた白江の口の端がゆっくりと釣り上げられていく。

12

二〇二八年　七月二十八日　午前八時〇七分
東京都　柄沢市

『――妖怪対策局・祓刃所属の克堂鋼一郎・一級戦闘員は妖怪を連れて、現在も逃走を続けています』

『克堂容疑者は事件当日の昼頃より凱機を無断で借り出し、以降の行方がわからなくなっていました。妖怪の秘蔵や隠匿並び援助とみられる行為は妖怪対策法によって厳しく禁じられており、鋼一郎容疑者の緊急指名手配が決定されることに、』

立ち寄った中華料理店に備えつけられたテレビの向こうで、アナウンサーは淡々と語る。

テレビ画面には無愛想な表情の鋼一郎の顔写真が映し出された。いつ取られたものかはわからないが、我ながら笑ってしまうような写真写りの悪さだ。普段の二割増しで、悪人面に見えてくる。

アナウンサーはご丁寧なことに、容疑者には現在頭部と脇腹に負傷があるとも付け加えてくれた。

「……あの、お客様」

レバニラセットを運んできた店員が恐る恐るに訊ねる。その視線は額に張られた大きなガーゼを凝視していた。マスクとサングラスで顔を隠していても、この傷はどうしたって目立ってしまう。

「テレビに映ってるのって……」

店員の目は凶悪犯を見る目、そのものだ。鋼一郎はなるべく自然な愛想笑いを目指す。

「ははっ、偶然ってやつですよ。俺が指名手配犯なら呑気に外で飯なんか食わずに大人しくしてますからね」

無理のある言い訳か。鋼一郎は店員から強引にお盆を受け取り、皿の中身を素早く掻き込む。

「ごちそうさん。釣りはいらねぇからよ」

「あっ！　ちょっと⁉」

足早に店を飛び出し、朝の通勤ラッシュの人集りへと紛れる。裏路地から下水道まで対妖怪用の監視カメラやドローンが忙しなく飛び回るこの街で、完全に姿を眩ますのは不可能だ。ならいっそ人込みに紛れた方が、幾分かマシだった。

妖怪のなかにはごく稀に、人間に極めて近い姿形を持つ個体がいる。代表的な例を挙げるなら三年前に風俗店で客を喰っていた、ろくろ首あたりか。そういった個体ならば人間社会に紛

れることも可能だろう。
こうやって監視カメラを気にしていると、まるで自身がその妖怪になった気分だ。いや、それも少し違うか。
その極めて人間に近い姿で人間社会に紛れていたのは彼女の方だ。
これまで、鋼一郎が疑問に思っていたことのほとんどが、「幸村白江（ゆきむらしろえ）の正体が妖怪である」という前提で考えれば、紐解けてしまう。
白江が祓刃での護衛を拒否したのも。ホテルマンに扮した男や、謎の無人機の目的も。
連中が祓刃の関係者だとは思えない。それでも自分のやっていたことは、妖怪を駆除しようとした連中への妨害であり、事実だけを見ていけばニュースの言っていた内容とそう変わらなかった。
「クソっ……」
鋼一郎は知らず知らずのうちに妖怪を守っていたのだ。苛立ちを堪えられずに、唇を噛み締める。

◇◇◇

その足で鋼一郎が辿り着いたのは、湾岸地域に放棄された廃工場だ。
ここは以前の殲滅作戦で駆除された高危険度妖怪・海坊主（うみぼうず）の食糧庫として、塩漬けにされた漁師の遺体が大量に放置された場所でもある。そんな経緯ゆえに現在は閉鎖されており、ぽつんとされた魚肉の加工工場だけがすっかり寂びれていた。
凱機を隠すのにもそれなりのスペースがいる。この廃工場は鋼一郎の潜伏先としては、これ以上ないほどの好条件だったのだ。
大股でトラテープを跨いで、鋼一郎は工場へと戻る。中には簡易的な補修を終えブルーシートを掛けられたムラクモ。
そして、奥の柱に何重にも鎖で縛られた妖怪の少女の姿があった。雪のように白い肌と白い髪。氷の妖術に極めて長けた人外のバケモノ――――雪女だ。
「……ほぉ。ようやっと帰ったか、お前さん」
鋼一郎に気づいた白江は縛られたままでも、その表情に薄い笑みを浮かべた。
妖怪を定義する要素の一つが、その個体の外見である。人から外れた姿や、既存の生物とは明らかに異なるサイズ、部位を持つ個体、或いは部位を欠損させた個体。
彼女の場合、極めて人間に近い姿をしている。だからこそ彼女は人間社会に容易に紛れることが出来たのだろうが、それでも明確な差異があった。
元から色の白いほうだと思われた彼女の肌。それさえもメイクで塗り固められた白に過ぎず、本当の彼女の肌は完全なる真っ白。その肌から、あらゆる色素を欠損させた個体として彼女は

妖怪の定義に当て嵌まる。
「いい加減喋る気になったか、雪女」
「寂しいのう。もう白江とは呼んでくれぬのか？」
なぜ、鋼一郎は白江をここまで連れ出したのか。
ホテルで彼女を庇ってしまった時点で、鋼一郎は妖怪対策法を破ったことになる。そのうえ彼女に逃げられでもしたら、いよいよ自分に掛けられた容疑を晴らす証人さえ失ってしまう。
自分が指名手配されていることを知ったとき、彼女を連れて自首をしようとも考えた。そうすれば、自分も妖怪に騙された被害者であることが証明できるはずだ。
だが、ひとつの違和感があった――仙道（せんどう）指揮の存在だ。どう考えたって彼は白江の正体を知っていた。そうでなければ、おかしな点が幾つもある。
潜伏期間内に祓刃の支援団体を調べてみて分かったが、「幸村財閥」なんて財閥は存在すらしていない。
妖怪にマーキングされているというのも真っ赤なウソ。その身体に刻まれた悪趣味な刺青モドキさえ、その肌の白を隠すのと同じ特殊メイクの類だった。
面白いくらい見事に騙されていたのだ。掌の上で踊り続ける鋼一郎の姿はさぞ笑えたことに違えない。
「なぁ、雪女。誤魔化さずに答えろよ。お前と仙道指揮は協力関係にあるんだな？」
仙道ならば、組織内でも十分な地位と発言力がある。
こんなこと考えたくはないが、一連の筋書きを彼が仕込んだというのが一番自然である。
「さぁ？　それよりも鎖がキツイぞ。三日間、縛りっぱなし。お前さんの趣味が幼気な少女をなぶるのことなら諦めるしかないが、それにしたってキツ過ぎる」
もし白江が人間の少女だったならば、鋼一郎もいつものような態度で「んなわけあるか！　どんな趣味をだよ、俺は！？」とでも言い返していただろう。
だが、目の前にいるのは憎むべき妖怪だ。
「もう一度聞く。お前と仙道指揮は何を企んでやがる？」
それを確かめるまえに自首をしたところで、彼女の本当の協力者である仙道に証言を握りつぶされる可能性だってある。
「これだけ大事になったんだ。言い逃れができると思うなよ」
「ふん！　今はそれを明かす時ではない。それにこのままダンマリを決め込んだところでワシに困ることなんて一つも、」
「そうだな、たしかに質問の仕方が悪かった」
鋼一郎は胸元に仕込んだ拳銃を取り出した。ホテルマンから奪い取ったままになっていた、グロックだ。
「もう一度聞く」
その銃口を彼女の額へぴったりと押し付けた。これなら以前のように妖術の氷でも弾は防げ

ない。
「お前は何を企んでやがる？」
「言えぬ」
「言えぬじゃねーよ。状況がわからないわけじゃないよな？」
鋼一郎は語彙を強めた。それでも彼女は笑みを浮かべたままだ。
「ところで、お前さん。傷の方はどうなったんだ？　こんな場所じゃ、ロクな治療もできぬだろう？　じゃが、ワシの妖術ならば治癒ができる。氷を作るようにうまくはいかぬが、痛みくらいは和らぐはずだ。だから、この鎖を」
「ご生憎だったな。俺の訓練校の同期には、どうしようもないお節介がいてな。俺の凱機にいつも医療キットを一色を詰めてくれる奴なんだ」
銃弾こそ腹に残ったままになっているが、医療キットのおかげでだいぶマシな処置ができた。一緒に詰められていた鎮痛剤のおかげで、痛みもだいぶ和らいでいる。
由依（ゆい）はムラクモの整備を終えるたび、コックピットに医療キットを詰めてくれた。その度に「こんなもの必要ない」と邪険にしてもだ。
それだけ、心配してくれたのだろう。もし疑いが晴れて自由の身になったなら、真っ先に彼女の元へ会いに行かなければ。
気の利いた言葉は浮かばないが、それでも謝罪と感謝くらいは伝えられるはずだ。
「……そうだったか。お前さんは良き仲間を持っておるようじゃの」
「話を逸らすな。もう一度聞くぞ、お前と仙道さんは何を企んでやがる？」
次に誤魔化されたのなら引き金を引く。そう決めた。表情から白江もそれを読み解く。
「はぁ……わかった。語ろうじゃないか、ワシの全てを賭けた企みを」
「嘘はなしだからな。少しでもおかしいと感じたら、その時点で引き金を引く」
「ただ、その前にワシからも質問をさせてくれぬか？」
「なんだよ？」
「お前さんはワシの知る誰よりも妖怪を憎み、嫌悪しているようじゃ。だからこそ聞きたい。お前さんにとって妖怪とは何なのじゃ？」
鋼一郎にとって妖怪とは何か？　わざわざ問われずとも、その確固たる答えは決まっていた。
「駆除対象だ。俺にとって妖怪はぶっ殺すべき敵なんだ
鋼一郎の中に負の感情だけが蓄積される汚泥があるとして。
「俺は幼少期に両親を妖怪に喰われている。おかげで頭の大事なリミッターはぶっ壊れてB・Uを発症しちまうし、荒れていた頃に俺を諭してくれた恩師さえ、目の前で妖怪に殺されたんだ」
今、その汚泥がふつふつと煮えたぎっているのがわかる。そして干上がった汚泥に残った感情こそが紛れもない、本心なのだろう。
「ぶっ殺してやるよ、桃教官を殺した妖怪も、全部が片付いたならお前もな」

白江は短く頷いた。そしてほんの一瞬、彼女は表情を変える。
能面をそのまま張り付けたようなあの無表情。白い髪や肌とは対照的に、瞳はどこまでも暗く沈む。夜闇をそのまま映した氷塊のように、真っ黒な瞳をしたのだ。
「……なんで、そんな顔をするんだよ」
どうして今、彼女が今そんな顔をしたのかは分からない。それでも彼女の瞳からは、なぜか深い哀しみを感じることに気づいた。
「質問が変わっておるぞ、お前さんが聞きたかったのはワシの企みじゃろう」
白江が口を開こうとした時だ。
廃工場のシャッターがべりべりと破られる。
「おいおい、まさか、こんなところで人間に捕まってたとはな」
紙切れのように容易くこじ開けられたシャッターの向こうには人影が見えた。人影はヒョイと軽く手を挙げる。
「よっ！　確か五十年ぶりだったね、白江。アンタのその計画ってやつ、アタシにも教えてよ」
そこに立っていたのは黄金色の髪をした、鋼一郎と同い歳程度の少女。その瞳もギラギラと眩しげな金色をしている。
だが、彼女の最大の特徴はその尻尾だ。彼女からは分厚い毛並みに覆われた九本のしっぽが蠢いていた。

13

特別指定・高危険度妖怪『九尾』――――以下は鋼一郎の脳内に刻まれた、祓刃のデータベースの情報である。
九尾はその名の通り九本の尾を持つ妖怪であり、昼間は推定で十八歳前後の少女の姿を、夜間は巨大な狐の姿をそれぞれ切り替えることが確認されている。
そして、一級以上の指揮官が立ち合いのもと殲滅作戦を実施しても尚、逃げ延びた個体は「特別指定・高危険度妖怪」として登録される。
九尾は記録上、三回にわたり実施された殲滅作戦から逃げ延びてきた。それも単に逃げ延びただけではない。居合わせた隊員を全員惨殺することで逃げ延びたのだ。
その挙句につけられた異名は「隊員殺シ」。他の妖怪とは明らかに違う畏怖を集めるのが、鋼一郎たちの前に立つ妖怪だった。
「……そんなビックネームの妖怪が、朝っぱらから出てくるんじゃんねぇーよ」
「人間なんかに指図される言われはないね。それにアタシの場合、日が出てる方が何分、動きやすいんだよ」
彼女は屈託のない様子で答えた。確かにその尻尾さえ生えていなければ、彼女の姿はただの少女だ。

だが鋼一郎は忘れていない。九尾はその人間に酷似した容姿を利用し、幾つもの祓刃の関連施設へ早朝から堂々と侵入。内部から襲撃を繰り返しては多大な被害を出してきたのだ。
「最悪だ……」
三日前の夜には人間の手に作られたであろう無人機と戦い、今朝は確認されている妖怪の中でもかなりの上澄みであろう九尾と対峙するとは。
「活動時間が逆だろ……」と内心で愚痴を漏らす。負傷し疲労もたまった自分にとって、九尾は明らかに分が悪い相手だ。
「……おい、雪女。……お前はアイツが助けに来てくれることが分かっていたから、ここまで余裕でいられたんだな」
九尾の傘下には多くの妖怪が集っている。雪女も九尾を長とするコロニーに属した下っ端の一体といったところか……
今はそんな風に思案を巡らせたところで仕方がなかった。どのみち、証人である白江（しろえ）は渡せない。彼女の額に突き付けていたグロックを、九尾へと向け直す。
「動くな！」そう、牽制しようとした時だった。
「逃げろ、お前さん！　今すぐにでも犬飼梨乃（いぬかいりの）から逃げるのじゃ！」
鎖に縛られたままの白江が叫ぶ。焦燥に駆られた様は、明らかに味方が現れた時の反応ではなかった。
梨乃と呼ばれた九尾も、その眦を狂暴に細めた。金色の瞳で白江をじっと睨む。
「なんで縛られてるのかは知らないけど、まだ人間なんかと一緒にいるなんて、懲りてないんだろうね。この恥知らずの裏切り者ッ！」
「違う！　ワシは裏切り者なんかじゃ、」
「じゃあ、隣にいるソイツはなんだよ？　よりにもよって妖怪を殺すことしか能がないカラクリ乗りなんかと組んでまで、何をしようとしてるんだよ？」
梨乃は反論を許さない。
「『三柱の玉』の所在とその企みも全部吐いて貰うから」
裏切り者？　三柱の玉？　次々、梨乃の口から飛び出す言葉はどれもわけのわからないものだった。
感情と鋭い犬歯を剥きだす梨乃に対し、白江は押し黙ることが出来ない。
そして困惑に駆られた鋼一郎の揺らぎを、梨乃もまた見逃そうとはしなかった。
「それから、そっちの人間。アンタはなんで油断してるのさ？」
その健脚に身体強化の妖術を使ったのだろう。梨乃は数メートル離れた距離をものともせず、鋼一郎の懐へ飛び込んだ。
鋼一郎の瞳もまた彼女の挙動とたなびく金髪をスローモーションで捉えた。それでもガードまでは間に合わない。

「がッッッはぁ！？」
拳にも妖術による強化が働いていた。恐らくは筋力強化と硬化。そこに跳躍の加速が加わり、鋼一郎の腹部へと突き刺さる。
内臓全部がプレス機でいっぺんに押しつぶされたような錯覚を覚えた。何故、腹に穴が開いていないのかの方がわからない。
「ぐっ……！　げっほ！　けっほ！」
「へぇ……対応こそ間に合わなかったけど、アタシの動きを目で追えるなんて。人間にしてはなかなかやるじゃん。それともアンタも例の〝びーゆー〟ってやつ？」
血の混ざった吐しゃ物を吐き出す鋼一郎に、彼女は感心したように呟く。
「まぁ、目で追えるだけじゃ、何の役に立たないみたいだけど」
這いつくばる鋼一郎の髪をワシ掴みに、無理やりその体を立たせた。
「アンタもカラクリ乗りなんだよな？　なら階級、教えてくれよ」
「……あ？　……なんでお前なんかに……」
「決まってるだろ。カラクリ乗りの階級はアタシの仲間を殺せば殺すほど、高くなる。だからアタシはこう決めたの。階級の高いやつほど楽には殺さない。めい一杯苦しませて殺さなきゃ、死んでいった仲間にも顔向けができないんだろ」
梨乃は屈託もない笑みを浮かべて、そう語る。これが「隊員殺シ」と呼ばれた妖怪の片鱗だと感じた。
浮かべた表情こそ笑っている。それでも背後に潜む明確な敵意と、祓刃に対する憎悪は隠しきれていなかった。
「まぁ、けど、アンタはまだガキだからね。それじゃあ階級は四か、三。……よかったな。その程度ならアタシも、アンタを楽に殺すことにするよ」
「なっ！？　俺はガキなんかじゃ、」
鋼一郎はそれ否定しようとした。だが凄まじい衝撃と共に、視界が暗転。そのまま意識までもが途切れた。

14

何秒、何分。どれだけの間、気絶していた？
「うっ……」
鋼一郎（こういちろう）が意識を取り戻したのは、自分が身を潜めていた廃工場だ。
こびりついた鉄臭いにおいの正体が、ボタボタと滴る自分の鼻血だと気づくまでにそう時間はかからなかった。きっと顔を殴られたのだろう。その反動で工場の壁際にまで、飛ばされたらしい。

放棄されたままになっている機材にもたれながら立ち上がる。
白江(しろえ)は？　あの梨乃(りの)とかいう九尾(きゅうび)は？　最悪なのは二人を逃がしてしまうことだ。
取り落としたグロックを拾い上げながらに、機材の裏へと身を隠す。そして、息を殺したのなら、物陰から倉庫全体を見渡した。
二人は倉庫に留まっていた。だが、何故だか白江の髪がべっとりと「黒」で濡れていた。
はじめは彼女が頭から黒いペンキを被ったのだろうと認識した。しかし、それが赤黒い血であるということに改めて気づくのにそう時間はかからない。
「なっ……何やってんだよ、アイツら」
彼女が妖怪だとしても、おびただしい量の出血に変わりはなかった。
額を割られたであろう彼女の白い肌を血液が伝ってゆく。
「なぁ、いい加減喋る気にはなってくれないかな。……アタシだって同じ妖怪は殺したくないだよ」
両の拳から血を滴らせながらに、梨乃は吐き捨てる。
それでも白江は、鋼一郎に突き詰められた時と同様に、何も語ろうとしなかった。
「もう、この際だ！　アンタが三柱の玉をどこに隠したか教えるだけでもいい。それでアンタの裏切りの件も水に流してやる！」
「ほう……あの件を本当に水に流してくれるのか？　なら、そうだな……ずっと昔にワシがお前さんの尻尾を布団代わりにした挙句、涎を垂らしたことなんかも許して」
「こんな状況でふざけんなよ！　分かってんのか！　――アンタが持ち去ったあの玉があれば、アタシたち妖怪は、もうこれ以上殺されずに済むんだぞ」
「だとしても、言えぬものは言えぬのじゃ」
「そうかよ。……ならッ！」
鈍い打撃音が工場内に響く。梨乃が白江を殴りつけたのだ。コンクリートがむき出しになった床へ、彼女の血痕が飛び散る。
「なぁ、白江！　アンタは本当に何を企んでるのさッ！　アタシを、いや妖怪(アタシ)たちを裏切ってまで何をしたいッ！」
白江は何も答えない。痛みを堪え、弱々しい呼吸を繰り返す。
（いまなら……）
鋼一郎は梨乃の背後の物陰へと回り込み、静かにグロックを構えた。
殴り飛ばされた鋼一郎は、いまなら完全に梨乃の意識の外にいるはずだ。それに彼女の意識のほとんどは目の前で鎖に縛られた白江へと注がれている。
両者がどんな関係かはわからない。それでも今は、これ以上ない不意打ちのチャンスだ。
白聖鋼(はくせいこう)の致死性があれば、いくら九尾であろうと殺すことが出来る。

チャンスは一発。慎重に狙いを絞ろう、と瞳を細める。
だが梨乃の背後に回るということは、それまで梨乃と向き合っていた白江の正面に立つということでもある。
顔を上げた白江と完全に目が合ってしまった。
しまった……！　そう思うと同時に心臓が大きく跳ね上がる。彼女が梨乃に自分のことを伝えてしまえば、それですべてが台無しだ。
『――――』
白江は小さく口を開いた。声を発さず、唇の動きだけで何かを伝えようとしている。小さく口元をすぼめ、横、縦の順で唇を動かす。
『う・つ・な』
彼女は鋼一郎をまっすぐと見つめ、さらに口を動かす。これは何の見間違えでもない。
『た・す・け・て・く・れ』
――ふざけるなッ！　思わず、そう怒鳴りかけそうになった口を鋼一郎は何とか閉ざす。
（……俺が……祓刃（はらいや）隊員が妖怪を助けるわけがねぇだろ）
白江もまた妖怪なのだ。それが鋼一郎にとっての絶対的な線引きであり、自分の無罪が証明された後ならば、彼女がどうなろうとも知ったことではない。
いまは梨乃が立っている位置についさっきまで立っていたのだって、他の誰でもない鋼一郎自身だ。必要であれば、自分だって同じように白江へ拳を振り下ろしたであろう。
白江はそのことを本当に理解しているのか？　だとしたら、なぜこの状況で助けてもらえると思うのか？
もはや、疑問さえ通り越して呆れが湧いてきた。
「はぁ……やっぱり、バカみたい殴るだけじゃダメね。なら、アタシも聞き方を変えることにする」
梨乃がおもむろに白江の顔へと、指を添える。
「氷を作る妖術に関して、雪女の右に出る妖怪なんていない。けど、アンタみたいに一芸に特化した妖怪は、ほかの術がどうしようもなく苦手なんだ。妖怪同士、妖気が身体を巡るのは同じでも、その波長や性質には一族ごとに差異がある故にね」
「……なんじゃ、今更？　……そんなことくらい、ワシだって知っておるわ」
「まぁ、聞けって。アンタは他の妖怪が出来て当たり前の、妖気による自他の治療がとことん下手だ。出来ても痛みを和らげる程度のその場しのぎ。なら、目ん玉の一つでも潰してやれば、少しは素直になると思ってね――」
梨乃の鋭い爪が、白江の真っ黒な瞳に食い込もうとする瞬間。
鋼一郎もまた、走り出していた。手にしたグロックを梨乃の後頭部に目掛け、投げつける。
「おまえこそ、油断してるんじゃねーよ！　九尾ッ！」
「いまは取り込み中なんだけど」

九本あるうちの尻尾一本で、放り投げたグロックは器用に弾かれる。恐ろしく勘が良いのだ。
「うぉぉぉぉッ！」
走り出しりながらに、鋼一郎は後悔に駆られていた。
どうして俺はアイツを助けようと走っている？
自分にとって妖怪とは何かを白江に問われ、「殺すべき敵」であると、その意志を再確認したばかりなのに。「妖怪を助けるわけがない」と、そう思っていたのに。それでも身体は、まるで弾丸のようにまっすぐと走り出す。
これはきっと、一時的な気の迷いなのだろう。
白江の容姿が限りなく人に近いせいで。或いは彼女と行動を共にする時間が長かったせいで。そのせいで、抱かなくてもいい情を抱いてしまった程度のことだ。
ホテルで無人機の前に飛び出したときのように、はっきりと言葉にできる理由なんて見つからない。走っているただ中でさえ、自問自答を繰り返してしまった。
それでも足は緩めない。
「人間の癖にアタシに殴られても立ち上がるなんて……アンタ、相当に頑丈だね」
白江に向かって走っているのだ。その前には当然、梨乃が阻み立つ。
「――来い、ムラクモッ！」
遠隔操縦でムラクモのエンジンを呼び起こす。簡易的な修繕を施されたムラクモは損傷した右足を引きずりながらも、起き上がった。
「九尾を捕えろッ！」
ムラクモは犬飼に向けて、その剛腕を伸ばした。
だが、彼女も指と指の間をスルりと抜けて、避わしてみせる。
「ハッ、それで十分だよ九尾、お前がそこを退いてくれればなァ！」
「チッ……ミスったな」
梨乃が直線状から離れた。その隙に白江へと駆け寄り、鎖を解く。
「ざまぁねぇな、雪女」
「お前さん……それが助けた少女へ投げかける第一声か……？」
薄い笑みを浮かべた彼女へ、鋼一郎は冷淡な言葉を投げ返す。
「黙ってろよ、妖怪。九尾の邪魔が入ったせいで、お前には聞くべきことを聞けてないんだ。全部を話し終えるまで、楽に死ねると思うなよ」

15

コックピットハッチがゆっくりと閉じる。ただでさえ狭いコックピットに二人がゆったりとくつろげるスペースなんてない。そうなれば鋼一郎（こういちろう）は、負傷した白江（しろえ）の小さな体を抱き込むようにして、シートに腰を下ろすしかなかった。

妖怪を殺すための凱機(がいき)に、その妖怪を乗せるなんて。こんな状況でさえなければ、すぐにでも彼女をコックピットから蹴り出してやりたかった。
「お前さん。どうやら今日のワシらは運が良いらしい」
それが凱機に乗せられた白江の第一声だった。
「お前に騙されたせいで指名手配されて、今度は九尾に殺されかけたんだぞ。これのどこが運がいいんだよ？」
「ワシが隠れていることに最初の気付いたのが、梨乃(りの)の方だったからじゃよ。不幸中の幸いじゃ。それにアイツは昔から話を人の話を聞かぬからの。もし、お前さんが階級を訊ねられた時、正直に答えてしまっていたら」
「答えていたら……なんだよ？」
白江は親指を立て、自らの首を掻っ切るようなジェスチャーをした。
「お前さんは若いからの。とても一級には見えなかったのじゃろう」
「……それはただ舐められただけじゃねーか。不愉快でしかねぇよ」
エンジンの振動がやけに傷口へと響いた。計器へと表示される電圧や油圧、エンジンの回転数はどれも正常な数値を大きく下回っている。
「クソッ……せめて、ここから逃げ切るまでもいいんだ。最後までもってくれよ」
今の自分とムラクモの状態で九尾とやりあうのは、どう考えたって不利だ。
妖怪を前に、逃げ出すのは鋼一郎のポリシーに反する。それでも、梨乃の狙いが白江である以上は速やかにこの場を離れるのが最良の選択だった。
「逃がすわけねーだろ」
ムラクモの前。ビリビリに破られたシャッターの前には、九本の尻尾をゆらゆらと揺らす梨乃が立ちはだかる。
「さぁ、仕切り直しと行こうじゃねーか！」
梨乃が尻尾の二本を、ムラクモへと向けた。
「紅蓮操術(ぐれんそうじゅつ)・幕(まく)！」
その先端から噴き出すは赫灼の業火。妖気エネルギーを燃料に炎を操る妖術がムラクモを包み隠した。
炎は装甲に阻まれ、コックピットまでは届かない。だが、百戦錬磨の九尾がそれを見誤るとも思えなかった。
「……目隠しか」
ムラクモのツインアイは完全に炎によって包み隠される。すぐに炎を振り払うも彼女の姿は、既にそこから消えていた。
すかさず鋼一郎はモニター画面からセンサーへと視線をずらす。それでも。鋼一郎の異常な

動体視力をもってしても――
「遅いってのッ！」
彼女が不敵に笑ったならば、次の瞬間にコックピットを衝撃が殴りつける。
「ぐっ……！」
画面の端がほくそ笑む梨乃を一瞬捉えるも、彼女はすぐに画面外へと飛び退いた。
「ここだと、アタシが見えねぇんだろ？」
ツインアイで捉えることのできる画角にも限界がある。炎の妖術のせいで今は熱センサーの精度も当てにならない。
「残ったセンサー類であの素早い挙動を捉えるにも限界がある……まさか、凱機の死角を把握してやがるのかッ！」
間髪も入れず。ムラクモの背後へと回り込んだ梨乃は、振り抜いた拳を叩き込む。
再び衝撃がコックピットを襲い、フレームがぎちぎちと嫌な軋み声をあげた。
「なぁ、ガキ。アタシは、これでも考えたんだよ。分厚い鉄の塊に護られた人間をどうやったら殺せるか。中途半端な妖術じゃ、装甲に阻まれて終わりだ。――だからな、アタシはカラクリを一つ、盗むことにしたんだ」
焦燥に駆られ忙しなく瞳を動かすも、梨乃はカメラの死角から現れようとしない。ムラクモの背後から脇腹の装甲に器用にぶら下がり、そのまま腹部へと飛び移った。
ここも胸部とエンジンを覆う装甲によって影の出来上がる死角だ。
「盗んだ後はバラバラにした。アタシだって無駄に長生きをしてるわけじゃないからな。部品を見れば、それとなく役割は理解できる。そうしたら、あとは弱点がどうなってるかを調べるだけなんだよッ！」
獰猛な笑みを浮かべた梨乃の拳が、ムラクモの腹部へと鋭く食い込んだ。
「ここが、脆いんだよなッ！」
装甲板は彼女の拳型に凹み、警告の甲高いアラートは悲痛を訴えているようだ。
その気迫と勢いには気圧され、まるで自分の腹をえぐり抜かれたような錯覚を覚えてしまう。
「大丈夫か、お前さん!?」
「ッ……まだ、だァ！」
妖怪の心配なんていらない。歯の奥を食いしばり、膝から崩れるのを辛うじて堪えた。
加速装置（ブースターユニット）を吹かせて、転倒しかけた体制をダメ押しにでも起き上がらせる。
その言葉通り、梨乃の立ち回りは凱機を知り尽くしているからこそのものだと伺わせた。祓刃隊員と交戦になるたび、彼女はさらなる試行錯誤も繰り返してきたのだろう。
無数の隊員と凱機の残骸の上に立つ「隊員殺シ」は、弱点や機体特性に至るまで。ムラクモのすべてを知っている。
一方でこちらは彼女のことをデータベース上の断片的な情報でしか知りえない。両者の持つ情報のアドバンテージ差は明確であろう。

「それなら、」
ムラクモは足元の機材を薙ぎ払いながら、素早く後退。その背をピタリと工場の壁に沿わせ、張り付いた。
「これなら、後ろの死角には回り込めないだろ」
「へぇ……無茶だけど、バカってわけじゃないんだな」
背水の陣。腰から夜霧（よぎり）のブレードを二振り、ゆっくりと抜き放つ。
これで梨乃の攻撃方向は前面だけに絞れたはず。鋼一郎の動体視力は相手を視界で捉えていなければ、その本領を発揮できない。だから、自ら逃げ場を捨ててまで壁際に追いつめられてやったのだ。
呼吸は乱れながらも、瞳を鋭く細めモニター越しの梨乃を睨む。今度は絶対に彼女の姿を外さない。見えてさえいれば、少なくと一方的に嬲られることはないはずだ。
「おい、雪女」
鋼一郎は瞳で梨乃を捉えながらも、白江へ質問を投げる。
「九尾は随分とは親しげだったよな。なら、アイツの弱点とかも知ってるんじゃないか？」
「……残念じゃが、梨乃に弱点らしい弱点はない」
「同じ妖怪同士だからって、アイツを庇うなよ。九尾の得意とする妖術や戦闘の癖、この際だ。俺が知らない情報ならなんでもいい」
語彙を強め、問い詰めた。だが代わって白江に応えたのは、余裕綽々の梨乃である。
「白江の言うとおりさ。アタシには弱点らしい弱点なんてないんだよ」
彼女は得意げに口の端を釣り上げる。
「妖怪にはそれぞれの一族によって体内を巡る妖気にも性質や波長に若干の差異があってだな。その差異と、生まれ持ってのセンスが『使える妖術』と『使えない妖術』を分けるんだ。白江なんて、その典型。雪女に巡る妖気は氷を生成することに特化している一方で、他がまるでダメ。ほかにも例を挙げるなら、そうだな」
「おい……その言い方だと、まるで自分はそうじゃないって言いたいみたいだな」
「だから、アタシはそう言いたいんだよ。アタシの一族、九尾の身体を流れる妖気は変幻自在。性質も波長も思うがままに変化するからこそ、不得意なんて存在しない。あとは練度を上げるだけで、どんな妖術も自由自在に操ることが出来るんだ」
それ故に。どんな状況にもあらゆる妖術で対応できる特別指定・高危険度妖怪『九尾（きゅうび）』には弱点が存在しない
彼女がすべての妖術を操るのなら、妖怪にとって共通の弱点である白聖鋼（はくせいこう）の弾丸でさえも、白江がやってみせたように氷の妖術で止めてしまえばいいだけの話だ。
「まぁ、実際に見せた方がわかりやすいか」

梨乃が九本の尻尾、すべてを前に突き出した。
「変化術（へんげじゅつ）・九々八十一式（くくはちじゅういちしき）――」
その突き出した尻尾の一本一本がそれぞれ、異なる武器へと変容していく。
一番・刀
二番・長槍
三番・大槌
四番・金棒
五番・砲筒。
六番・斧
七番・かぎ爪
八番・クナイ
九番・鎖
計九つ。ズラリと物騒な面々が彼女の前に揃えられた。
「ただ尻尾を武器に変化させたわけじゃない。アタシの武器の一本一本にはそれぞれ、異なる妖術によって、副次的な効果を付与してある。――ところでさ。どうしてアタシには利点の一つもないのに、アンタに自分の情報を明かしてやってると思う？」
「……なんでだよ？」
「解らせるためさ。お前ら人間がどうやってもアタシには勝てないって。せいぜい、ない頭を必死に回して考えるんだ。そのうえで己が無力さを自覚しろッ！」
梨乃の浮かべた薄い笑みに、冷淡な感情が宿る。九つの武器の中から、彼女は一際大きな存在感と重量を誇る大槌を手に取った。
「まずい⁉　お前さん、あのバカデカい金槌は、」
「馬鹿がッ！　最後の最後で油断しやがったな、九尾ッ！」
あれだけの大槌を振り切れば、梨乃にも大きな隙ができるはず。鋼一郎は動体視力でその挙動を見切り、両のブレードで衝撃をいなそうとした。そこに反撃のチャンスが生まれるはずだ。
「頼む、聞いてくれ！」
白江を無視して、操縦桿を握る両腕に渾身の力を込める。
「……お前もうまく利用されてるだけだってのに。……白江、アンタもそこから降りるなら今だからな。一応、三柱の玉を回収する以外にも代替案はあるんだよ」
「受け流しなんて考えるな！　お前さんの目があれば、あの大振りを避けることだって」
「うるせぇよ！　お前ら、揃いも揃ってッ！」
出力最大。踏板（キックペダル）はベタ踏み。
互いの間合いは一瞬で詰まり、ブレードと大槌が真正面から衝突する。――そして、ムラク

モの握った夜霧だけが呆気もなく折れられた。
まるでガラス細工を砕くように容易く。「隊員殺シ」の九尾は、鋼一郎の信念さえも叩き折る。

16

二対の刃を砕いても尚、迫る大槌の勢いは止まらない。
その直撃にぶん殴られたムラクモは薄っぺらなガレージの壁を突き破り、鋼一郎（こういちろう）たちを乗せたまま外へと投げ出された。
「がぁぁぁッ！！！」
両腕を痺れと激痛が同時に襲う。大槌を受けた衝撃はこれでも飽き足らず、機体内を伝播。ついには操縦桿を介して鋼一郎にまでたどり着いたのだ。
もう、まともに操縦桿を握る事はできなかった。摩耗した両足関節が踏ん張りを利かすよりも早く、コアブロックとの接合部から千切れ飛ぶ。
ここは湾岸地域に放棄された廃工場の一つ。
その薄壁を突き破り、ムラクモが投げ出された真下には深緑に汚れた海面が広がっていた。波は忙しなく押し寄せ。コントロールを失った機体はただ落ちることしかできない。
「しまっ――」
鋼一郎の視界がガクンと揺れる。
着水の衝撃で額を思いきり、モニター画面に打ち付けたのだ。割れたスクリーンの細かい破片は傷口に喰い込み、またも意識が混濁の闇へと落ちかける。
水没するムラクモのコクピットからはブクブクと気泡が漏れた。中破した機体では海上に這い上がれる術がないの今、ここは閉ざされた鉄の棺桶に他ならない。
クソッ！　こんなところで死ねるかよッ！
そう吠えようとしても、うまく呂律が回らない。
死ねない。死にたくない。
這いずり上がる理由はいくらでも思い浮かんだ。それなのに手足は脳震盪で痙攣するばかりで、思うように動かない。
意識だけが光から遠のき、深い闇の底へと落ちていく――その最中。鋼一郎の五感が感じとったのはゾワりとした寒気だ。
最後は、よりにもよって妖怪と心中だなんて。いよいよもって、笑えなかった。
「……お前さんの全て、十分に見せて貰ったぞ」
薄れゆく意識の中。白江（しろえ）がじっと、鋼一郎を見下ろしていた。
「悪いが、お前さんにはまだ死んでもらうわけにはいかないんじゃよ。百千桃（ももちもも）の再来――克堂（こくどう）

鋼一郎よ」

17

二〇二八年　七月二十八日　午後六時三十五分
東京都　柄沢市・祓刃基地

「これは一体どういうことでしょうか、仙道特級指揮官」

夕暮れ時。由依は基地中の掲示板に貼り出された手配書を引っぺがすと、それを全てまとめて仙道のデスクに突き付けた。

オフィスには仙道の一人だけしか残っていない。彼はパソコンからゆっくりと視線を外すと、由依の方を見やった。

彼女の目元には酷いクマが出来ていた。ここ数日間、ロクに眠れてもいないのだろう。

「君はたしか、メカニックの夏樹由依くんだな。どういうことも、何も書いているままじゃないのか？」

克堂鋼一郎容疑者。妖怪の隠匿・逃走援助の疑いアリ。――ぐしゃりと握りしめられた手配書には、彼女にとって看破できないような字面が並んでいた。

「克堂鋼一郎という隊員を知る人間ならば、彼がこんな真似をする人間でないことくらい分かるはずです！」

「私だって彼とは幾度と現場で顔を合わせているからな、そのくらいはわかっているさ。しかし、ここまで騒ぎが大きくなってしまった以上、私一人でどうこう出来る問題でもないんだ」

感情的に捲し立てる彼女に対し、仙道はあくまでも平淡な言葉で返した。

「それに加えて克堂隊員は今まさに行方をくらましている。監視カメラやドローンにも引っ掛からないことを鑑みるに彼は故意的にそれらを避けるように動いていると思えないか」

「つまり仙道指揮は、彼に後ろ暗い一面があり、だから逃走を続けている、と。そう言いたいんですか！」

「……信じたくはないがな」

愁眉を寄せ、引き絞るように口にした言葉も、これでは肯定しているのと同じだ。

「そうでしたか。それなら此方も聞き方を変えましょう」

由依は手にしたファイルからＡ４用紙を数枚をさらに突き出す。そこには見慣れぬ凱機の写真がプリントアウトされていた。不気味に揺れる単眼の赤光と、異様に薄い装甲が目を引く機

体であった。
凱機に深く精通した彼女でさえ、こんな機体は見たことがない。
「これは行方が分からなく直前に、彼から送られてきたデータを印刷したものです。この正体不明の凱機が彼の失踪に関わっているのでは？」
「監視カメラ等にそんな機体が映りこんだ記録は存在しない。そもそもこんな機体は運用さえしていない」
仙道は眉一つ動かさず、言い切った。だが、そのあまりに毅然とし過ぎた態度は逆に由依の猜疑心を掻き立てる。彼は何かを隠している。そう確信するのには十分すぎたのだ。
「私に聞きたいことはこれで以上か？」
「いいえ、まだです。仙道さん。貴方は彼が失踪する前日に彼と食堂に居合わせていたことを多くの隊員が目撃されたようですが、一体どのようなお話を」
銀鈴の様によく通る声と、細められた眼差し。それは彼女を推し量るには十分だったろう。
仙道は少々、夏樹由依というメカニックを見誤っていたらしい。
目の下にできたクマは精神的な疲弊ではなく、三日三晩寝ずに情報や証言を集めたゆえのものだ。機械いじりが得意なだけの少女と侮れば、晒した手先を噛まれかねない。
「どうやら君は私を疑っているようだな」
「はっきり言ってしまえばそうなりますね。貴方を調べて分かったのですが、やけにもう使われていない資料室への出入りが多いとも伺いました。貴方が何かを隠しているのは明確なんですよ」
短な沈黙を置いて。
「やはり君は克堂隊員のことが好きなんだな」
「……へっ？」
不意に投げかけられた言葉に、素っ頓狂な声が出た。
顔が熱くなるのがわかる。見透かされていたことに恥じらいを覚えながらも、由依はそれを強く否定する。
「ふっ……ふざけないでくださいッ！　私はただ彼の誤解を解きたいだけで、そんな私情なんて！」
「ふざけてなどいない。すこし取引をしようじゃないか、夏樹くん」
仙道がつい先ほどまで叩いていたパソコンの画面を彼女の方へと向ける。
そこにあるものが何かを由依はすぐさま理解した。複雑怪奇の図面。それが描き出すのは一つの設計図だ。
「これは凱機の……」
「違うな。これは凱機などではない」
今度は仙道が由依を強く否定した。
「『B・Uパイロット専用機ムラサメ』だ。君がこれを完成させてくれるというのなら、私は知っていること全てを明かそう」

差し向けられた手は蠱惑的なものに違いなかった。戻れない。
それがわかっていても尚、由依の選択に迷いはない。

18

これが俗にいう走馬灯という奴だろうか？
見覚えのあるコックピットの中。見覚えのある街中。そして、鋼一郎（こういちろう）の駆る機体の前には、見覚えのある凱機の背中がライトによって照らし出された。
第二世代モデルのアカツキ。通信能力を強化するための大型化されたツノ型アンテナと、通常は両肩に二基ずつしか備えないブースターユニットを、脚部にも二基ずつ増設したモデルだ。
――ならば当然。それを駆るのは彼女、百千桃（ももちもも）で間違えはないのだろう。
《総員退避ッッ！》
通信機越しに彼女の声が聞こえる。鋼一郎の知る限り、彼女がここまでの動揺を露にしたのは一度だけ。
妖怪の亡骸を突き破った巨大な二対の剛腕が、モニター画面へと移りこんだ。
《聞こえなかった？　総員撤退って言ったの！　分かったらすぐに動くッ！》
そうだ。これは忘れもしないあの夜の記憶。
桃のアカツキは迫る剛腕を握り占めた夜霧（よぎり）で逸らした。
彼女もまた鋼一郎のものと極めて近い症状のB・Uを患っている。その人並外れた動体視力と、経験によって研磨された実力があれば初撃をいなすことも、そう難しいことではない。
実際。集中を研ぎ澄ませた彼女の瞳には、あらゆる速さでさえ止まって見えたという。
小さな火花をチリチリと散らし、迫る剛腕を弾き飛ばす。だが軌道を逸らされた両腕はすぐに狙いを変えた。感覚器官らしいものをもたずとも、その狙いは精密だ。
無慈悲に振るわれた拳はその質量で、同伴していた二機のアカツキを圧し潰す。
黒煙と炎が上がる機体から最後に届いたのは、一瞬で途切れた断末魔。モニターからは訓練生二人を示す反応が消えた。
「……嘘だろ」
二人を圧し潰した腕はまるで埃でも払うかのように、掌同士を擦り合わせてみせた。
《鋼一郎訓練生。もう三度目は言わなくても分かるわね》
通信機越しに桃が静かに語り掛ける。口調にはわなわなと湧き上がる怒りが滲んでいた。
《私がコイツを抑えるから、君はすぐにこの場からはなれるんだ》
「……けっ、けど、桃教官が！　そうだ、お、俺も援護を！」
《いらない。今は君が足手まといなんだ》

彼女はその言葉で、鋼一郎を突き放す。一言「すまない」とだけ言い残し、濡羽色の髪をした彼女の顔が画面から消えた。ブツりと音を立て、彼女との通信が途切れる。

◇◇◇

「……さ、やろうか」

フッと息を吐き、飛び出した桃のアカツキは質量の塊であるその腕と幾度もぶつかる。

きっとこの腕は妖怪本体ではないのだろう。こうやってぶつかり合っても、生物らしさというものが感じられない。

遠隔で操っているのか？　それとも――

「本体から切り離した腕をあの鬼の身体に仕込んでいたんだろうな。なら、あの鬼は私たちをおびき出す生餌ってとこだったんだろうね」

アイツにうまく騙されたんだと、彼女は内心で苦笑する。

B・Uの齎す脅威的な動体視力の桃と、強固な外殻で覆われた謎の腕。

両者が両用に、相手に致命傷を与える術を持たずにいた。それでも蓄積したダメージとB・Uの負荷を背負う分、桃の方がジワジワと削られていく。

長期戦になれば、不利になるのは必然。ならば装甲を削られながらも、アカツキは短期決戦に打って出た。

計四基のブースターからなる推力を一点に絞り込み、突っ込む。外殻に刃が通らないのならいっそ勢いに乗せ、柄頭を叩きつける。

衝突音が鼓膜を噛む。ジンとした痛み。反動でマニピュレータが砕け、その手からブレードがこぼれた。渾身の打突でさえ、この外殻を傷つけることはできないのだろうか。

「まっ、想定通りなんだけどッ」

踏板（キックペダル）を蹴り込む彼女はその瞳に獰猛さを宿していた。黒い相貌はモニター画面の反射で、静かに輝く。

祓刃（はらいや）所属、百千桃・一級戦闘員。

一年間の貢献度、並びに妖怪討伐数では桁外れの数字を叩き出し、特別指定の高危険度妖怪さえ単機で駆逐する。そんな経歴を重ね続け、遂には最年少で一級の座に上り詰めた彼女を、多くの隊員は「奇才・百千桃」と畏怖するようになっていた。

B・U障害によって百千と同等の動体視力を持ち合わせる少年少女を集め、第二、第三の「奇才」を育てる。なんて馬鹿げたプロジェクトが本気で実施され、その教官に自身が抜擢されるほど、当時の祓刃内で彼女の強さは神格化されていたのだ。

隊員たちは口々に噂する。「次に特級になるのは百千桃」だとか。「最年少一級戦闘員の次は最年少特級戦闘員が生まれる」だとか。

それでも、多くの隊員は気づこうともしない。奇才が奇才たる由縁を。

桃は確かに天性の操縦センスとB・Uの両方を持ち合わせたイレギュラーだったのかもしれない。だが彼女を彼女たらしめるのは、機体を捨てることとさえもいとわず、無茶を無茶とも思わない大胆な性格だった。

「——つーかまえたッ！」

アカツキの全体重をかけて、その場に掴んだ腕を二本まとめて引きずり倒す。

現状で致命傷を与えられるような装備をアカツキは持ち合わせていない。そもそも機体のスペック自体が、単機でこの妖怪を駆除できる域に達していない。

ならばせめて、機体共々この腕どもを葬り去る。

怒髪天なんて、教え子を二人奪われた時点で突かれていた。

このまま体制で各部関節をロック。モニター画面に六桁からなる自爆コードを打ち込む。

六十秒——モニター画面に表示されたこのカウントが、パイロットが脱出するために与えられる猶予だ。十分な余裕があることを確認し、彼女は緊急脱出用のレバーを引き抜こうとした。

それでもレバーは動かない。

整備不良か……いや出撃前の点検は他の誰でもない桃自身が行っていたはず。それなのに何かがギアとギアの間に噛んでしまったように、脱出機構が作動しないのだ

密閉された鉄の箱の中。カウントだけが刻々と迫る。

「あっー……これはちょーっとマズいかも……」

彼女はそう力なく苦笑した。

◇◇◇

爆炎が全てを包み込んだ。轟々と燃え盛る炎を前に鋼一郎は文字通り、その様を目に焼き付けることしかできなかった。

単に凱機が大破することのよって炎上するのと、故意的にエンジンを逆回転させることで自爆を引き起こすのではその規模も違う。

全身がガクガクと震え、目の前の光景を現実として受け入れることが出来なかった。

命令を無視してでも、彼女の救援に入っていれば。

いや、違う！　今をそれを考えるのでなく、燃え盛る炎の中から彼女を救い出す方法を。

「あぁ………ああ！　ああ………！！」

鋼一郎は明らかに錯乱していた。情報が混濁し、正常な判断なんて当の昔に押し流されているのだろう。

或いは。錯乱したフリをして、「百千桃の死」を受け入れまいと足掻いていたのだろう。

正気が引きずり回され、削られていく。

「あああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

鋼一郎の言葉にならない咆哮は、炎の中へと溶け落ちた。

19

二〇二八年　七月三十一日　午後七時二十分
東京都　柄沢市・山中

ひやりと冷気を帯びた白髪が降り掛かる。
辺りは岩肌に囲まれ、明かりらしい明かりはない。ここは、どこかの洞窟と言ったところか。
寝かされた鋼一郎を、白江が覆い被さるように覗き込んでいた。
「ようやっと起きたか、お前さん」
「ここはお前の隠れ家か……？」
「まぁ、そんなところか。それよりも酷く魘されておったが、悪い夢でも見ていたのか？」
「……お前には関係ないだろ」
あれが夢ならば、どれだけ救われただろうか。
深い意識の迷濁の中、鋼一郎が見たのは過去の記憶。どっと押し寄せる後悔だけが今も尽きることのない、あの夜のことを思い出していた。
「むっ！　せっかく助けてやったと言うのに。ここまで邪険にすることもなかろう！」
彼女は氷を作る妖術に長けた雪女。水没したムラクモのコックピットハッチを氷で覆い密閉することも、逆に氷を作り出す勢いで閉ざされたハッチを押し上げ脱出することも、容易なはずだ。
あとは梨乃が辺りを立ち去るまでを水没したコックピットの中でやり過ごし、適当なタイミングを見て浮上すればいい。
ここまでならば簡単に推察ができた。それでも、鋼一郎を水底から引き挙げるメリットなんてなかったはずだ。
あそこで自分が溺死していれば、白江を追う祓刃隊員だっていなくなる。
「どうして、俺を助けた？　お前一人でどこへでも逃げちまえばいいだろ？」
「そうだったかもな。ただ、先に救われたのはワシの方じゃ。あの廃工場でお前さんはワシに応えてくれた」
「……あれはそういうのじゃなくて」
「ところで傷の方はどうじゃ？　お前さんにとっては屈辱かもしれんが、例の〝医療きっと〟とやらも今は海の底じゃからの。ワシの妖術で傷を治させてもらったぞ」
そう言われてはじめて、鋼一郎は自身の身体が軽くなっていることを自覚する。着ていた隊服は脱がされ、頭と腹には包帯をきつく結ばれていた。
「お前、氷を出す以外はできないんじゃ？」

「ただ氷を出す以外が下手なだけで、できないわけじゃない。それにワシは独学で医療をかじっておるんじゃ。おかげでお前さんの腹から銃弾も取り出せたぞ」
ホテルで食らってからずっと脇腹に残り続けた白聖鋼(はくせいこう)の銃弾。体が軽くなった一番の要因はその弾を抜いてもらったことが一番の要因だろう。
鋼一郎は自分に巻かれた包帯の一部が、細く帯状に切られた自らの隊服であることにも気づく。清潔な布を傷口に当て、その上からカーキ色の細長い布で固定がなされていた。
「この包帯は……俺の隊服か」
「血塗れなうえにボロボロじゃったからの。ワシのような妖怪じゃ包帯さえ満足に手に入らんし、勝手に使わせてもらったぞ」
鋼一郎はポツリとつぶやく。
「……ありがとう。だいぶ楽になった」
「妖怪相手にでも礼が言えるんじゃな」
「特別だ。……それにお前は他の妖怪たちと何か違う気がするんだ」
「そうか。ならワシもお前さんの感謝も素直に受け取ることにしよう」
白江の表情が柔らかなものに変わる。微かに頬を高揚させ、口元を緩めた表情は人間のものと変わらなかった。
「なんだよ、それ」
妖怪に対して抱いていた強い憎しみと、白江に抱く感情に若干のズレが生じていることを、鋼一郎自身が自覚していた。
ふと、包帯にされた隊服から徽章が消えていることに気付いた。
「なぁ……俺の徽章を知らないか？」
「徽章？　あぁ、椿の方か」
「そっちじゃない！　焼け落ちた方だッ！」
困惑する白江を前に、鋼一郎は大きく取り乱す。
「落ち着け！　コレのことじゃろう？　一応、こっちも預かっておったが……その焼けカスはお前さんにとって、それほどまでに大事なものなのか？」
「……大事に決まってんだろ……これは桃(もも)教官の形見なんだよ」
桃は私物らしい私物を持たないような人だった。凱機(がいき)の収納スペースに全部が収まる程度にしか嗜好品を持っていない。そして、自爆した凱機は跡形さえも残らなかった。
爆破跡から回収されたのも、辛うじて形を保っていたこの徽章と、今は鋼一郎のムラクモに装備されている夜霧(よぎり)の一本だけだった。
もっとも、夜霧を折られてしまった今。残された形見は彼女が一人の祓刃隊員であったこと

を示す、この鉄の塊だけになってしまったが。
「なぁ、お前さんが百千桃について話をしてくれたことは覚えているか」
彼女に静謐な声でそう切り出された。
「なんだよ、急に……」
「いいから。ワシは覚えているかと聞いているんじゃ」
「そりゃ覚えてるけど、それがどうしたんだよ」
白江はちょうどいい大きさの岩を鋼一郎の正面に腰かけた。彼女の真意はわからない。
『『誰かに護られるより、誰かを護れるようにならないか』――じゃったか？　今度は、あの時の話をもっと詳しく聞かせてくれないか？」

◇◇◇

当時の鋼一郎はとにかく荒れていた。
幼少期に両親を妖怪に奪われ、預けられた先の孤児院うまく周りに馴染めず。どこから噂が漏れたのか通っていた中学でも「親を妖怪に食われた可哀そうな奴」として腫れもの扱いをされていた。
B・Uさえあれば同年代の不良程度に負けはしない。憂さ晴らしのために喧嘩に明け暮れる日々が、鋼一郎にとっての日常だ。
その日も三年生十人余りを相手に大立ち回りを繰り広げたあと。連中に奪われた同級生の財布を奪い返し、人目に付きにくい校舎裏を立ち去ろうとした矢先。
何の前触れもなく、彼女は突風のように現れた。
「――噂通りの荒れっぷりだね、克堂鋼一郎くん」
濡羽色の髪と、訓練生の制服に身を包んだ当時の百千桃だ。
後になって、彼女は訓練生ながらに特例として、隊員と同等の職務や第一世代モデル凱機のテストパイロットを務めたことを聞いた。
だが、それを知るよしもない鋼一郎には「他校の生徒が噂の不良を見に来たんだろう」くらいにしか考えることが出来なかった。
この手のタイプは絡まれれば面倒だと、鬱陶しげに手を払ってあしらう。
「なんだよ、アンタ？　この辺りじゃ見ない制服だが」
「おやおや、随分な口の利き方だね。これでも私の方が歳は上なんだけどなぁ」
桃は鋼一郎へと歩み寄ってくる。喧嘩の直後で過敏になっている鋼一郎の視覚はその挙動もスローモーションで捉えていた。
彼女の動きはひどく緩慢なものに見える。だからこそ、自分が彼女に投げられたことを理解するのに数秒を要した。
手首を掴まれ、次の瞬間には完璧な背負い投げが決まっていた。視界が反転し、背中に鈍い

痛みが走る。
「……は？」
「んー。ざっくり言っちゃえば、私が君の上位互換だから。私の目はすべてが止まって見えるし、身体だって君より速く動くんだ」
いや……そう説明されたって意味が解らない。
「ちょーっと、ごめんね」
「うっっぐ！？」
困惑する鋼一郎の腹へと、彼女は腰を下ろす。
「悪いけど、君のことは勝手に調べさせてもらったよ。幼少期にB・Uを発症。異常な動体視力を獲得したんだったよね」
「ッ……意味わかんねぇよ。……つーか、退けよ！」
鋼一郎の抗議にも聞く耳を持たず。その場で足を組み交わした彼女は言葉を続けた。
「ねぇ、鋼一郎くん。いきなりで悪いんだけど、私と一緒に祓刃になってみる気はない？　私はそこの訓練生なんだ」
「……祓刃……それって、たしか妖怪対策局の」
「そっ！　君の才能を生かさないんじゃもったいないよ。君はきっと強くなる。君なら誰かに護られるより、誰かを護れるようになれるはずさ」
その言葉は深いところへと刻み込まれた。
彼女はもう一度、同じ言葉を繰り返す。
「誰かに護られるより、誰かを護れようになれ。そうなれば君はもう何も失わないはずだから」

◇◇◇

白江の真意を図りかねながらも、桃との出会いを語る表情は無意識に柔らかいものへと解れていた。だが、それも途中で渋いものへと変わってしまう。鋼一郎は遂には口を閉ざし、押し黙ってしまった。
「どうしたのじゃ？」
「いや……俺はいま、何をやってるんだろうなって思ってな」
総身から力が抜けていくのを感じる。本当に自分はいま何をやっているのか？
桃に誘われ、訓練校に入った。第二、第三の「奇才」を育成する「セカンド・百千プロジェクト」に抜擢され、教官になった彼女の元でひたすらに強くなろうとした。
誰かに護られるより、誰かを護れようになる。
他の誰でもない、鋼一郎自身がそうなりたいと願ったから。もうこれ以上、大好きな誰かを失いたくはなかったから。
だが、百千桃は死んだのだ――
自分はその現場に居合わせながら、何もできないまま立ち尽くすことしかできなかった。

仇を討とうともした。妖怪を全て縊り殺そうと彼女と同じ一級戦闘員にまで上り詰めた。
それなのに一時の感情に流され妖怪を助けた挙句、今はその妖怪に傷の手当を受けてしまっているという在り様だ。
「由依(ゆい)の奴には心配かけてばっかで、その癖に誰も護れちゃいない。……妖怪を全部ぶっ殺して、桃教官の仇を討とうとしてたはずなのに、今はその妖怪に助けられてるなんてな」
結局のところ、不良相手に憂さ晴らしをしていたあの頃と何も変わっていない。大切な人を失った喪失感と、弱い自分への苛立ちを妖怪にぶつけていただけに過ぎないのだ。
そこに大義なんてなかったことに今更になって気づいてしまった。
「もう、いっそ笑ってくれよ」
鋼一郎から、ひどく乾ききった自虐的な笑みが漏れる。
「笑わない。ワシは笑わないとも……お前さんがあのホテルで一つ目の凱機に立ち向かったときも。撃たれたワシを庇おうとしたときも。ワシが正体が妖怪だと分かっていながら、梨乃から助けてくれたときだってそうだ。――我が身も顧みず誰かを護ろうとするお前さんを、誰が笑えるだろうか？」
「ははっ……まさか妖怪に慰められるなんてな」
鋼一郎は苦笑いを浮かべた。そう。白江と鋼一郎の間にはどうしたって、妖怪と人間という絶対的な境界線が存在するのだ。
「のう」
痛烈な声を押し殺すよう、また白江に切り出された。彼女は唇をきつく結び、鋼一郎に頭を下げる。
「ワシはお前さんを巻き込んで、増してお前さんが抱く千百桃への思いを利用するような言葉で騙してきた。本当にすまないと思っている」
「もう構わない。助けてもらったんだ。お前が俺を貶めようとしてるわけじゃないってことも、なんとなく分かったからな」
だが、その真意を聞かなければ納得は出来ない。
「なぁ……雪女。お前は何を企んでるんだ？」
「そうだな……それを語らねば筋も通らない。けれど、それを語る前に少し昔話に付き合ってはくれぬか？」

20

「これは単なる昔話。三柱(みはしら)と呼ばれた愚かな妖怪たちの末路と、ある妖怪の半生についての話じゃ」

そう前置きをした上で、今度は白江(しろえ)が語り始めた。

「むかし、むかし。それは三桁では足りぬほどずっと昔。ワシら妖怪は、人の世と交わることなく闇夜の中で生きてきたのじゃ」

◇◇◇

妖怪たちは決して多くを望まない。時折人前に姿を表すことはあっても、静かに暮らせればそれで良いと思っていた者がほとんどだった。

妖怪の世を収めるのは、「三柱」と称される三人。それぞれが優れた才を持った三柱たちの庇護の元、妖怪たちは平穏な日々を過ごしてきたという。

だが、あるとき。その妖怪は現れた。

若い男の姿をしながらも、全身には真っ黒な霧を纏った妖怪だ。

出自は不明。彼はどこから来たのか、何の妖怪だったかさえ分からない。それでも、一つだけ判ることがあるとするのなら、彼は類を見ない切れ者だったということだ――なにせ、妖術の基礎を築いたのは彼なのだから。

妖怪たちの身体を巡回する妖気。当時は無意識下でこれを操り、奇妙な力を使うものも少なからずはいたが、せいぜいがその程度に過ぎなかった。

だが、彼は違うのだ。

術式を発案し、その通りに妖気の性質や波長を変化させたなら術が発動できるという仕組みを提唱。次に自らの妖気を意識的に操る訓練法を妖怪たちの間で広めた。

ここまで、彼が現れてから約半月。そこで三柱の妖怪たちでさえ息を呑むような神童っぷりを披露した。

妖術を上手く用いれば、食料に困ることもない。多少の傷を負ったとしても妖術によって治癒が施せる。妖術を操れるだけの賢さを持つ妖怪たちのなかで、その術が普及するのも必然であった。

その間も、彼は自らの発明である妖術の研究を続けた。「身体能力向上の妖術」や「物の形質を変化させる妖術」など。より利便性に長けた術の術式を模索したという。

――ただ、ある頃から彼の研究はおかしな方向に舵を切り始めた。

自らの脳の中身を弄るような妖術。

殺した同族から妖気を奪い取るような妖術。

いかなる外傷でさえも死に至らない不滅の妖術。

そのどれもが正常な思考をした者の発想とは思えない。最後に至っては妖怪の領分をゆうに超え、神の領域にさえ片足を突っ込んでいた。

次第に妖怪たちは彼を恐れるようになっていた。
これ以上、妖術の研究を許せば、彼はもう誰にも手が付けられなくなる――選択を迫られた三柱たちは、百体の妖怪を引き連れその寝首を掻いたのだ。

◇◇◇

「ということになったわけじゃが。……何が三柱じゃ！　その局面で最も愚かな決断をしよってからに！」
白江の口調には露骨に苛立ちが混ざっていた。それは三柱と呼ばれた妖怪たちを責め立てるようなものであった。
ここまでの話を黙して聞いていた鋼一郎も口を挟む。
「いや。たしかに他にやり方はあっただろうが……寧ろ、三柱とかいう連中のそれは英断だったんじゃないか」
「英断なものか。その夜襲で生き残った数は、三柱と賛同した妖怪たちの半分に満たなかった。それに言ったろ……ヤツはいかなる外傷でも死なない不滅の妖術を持っていると。三柱はこれだけの犠牲を払いながらも、結局はヤツを殺すことはできなかった。手足をもぎ取り……そうだな、お前さんらの言葉でいうところの〝こみゅにてぃ〟から追放するだけで精一杯じゃった。ところでお前さん。妖怪が人を襲うようになったのはいつか覚えているか？」
白江が唐突に話を切り替えることは、もう慣れた。なぜこのタイミングで話題を切り替えたのかを探りつつ、訓練校時代に習った妖怪の歴史についてを思い出す。
「たしか、平安時代のころだったか？　当時は祓夜や凱機もないから陰陽道なんかで妖怪を撃退してたって習ったが、」
「そう。その妖怪が追放されたのも、ちょうどその頃のことじゃ」
彼女はその細い指先を弾いて見せた。
「ヤツは自らを追放した妖怪という種族そのものに強い怨嗟を抱いたはずだ。もがれた手足を再生したヤツが、復讐を目論むのもまた必然なことであったろう。しかし、馬鹿正直に挑んだところで敵わないのは学習済みだ。たった一人ですべての妖怪に復讐を成し遂げるというのも現実的ではないだろう。――そこでだ」
背筋にうすら寒いもの感じた。そわそわと落ち着かないこの感覚の正体が何なのか。
答えならば、とっくに出ているだろう。
その妖怪は白江たちと同様に、人にそっくりな姿をしているのだから。
「ヤツは人間を利用することにした。言葉巧みにその時代の権力者に取り入り、妖怪こそが諸悪の根源であると吹聴した。ヤツが妖怪たちに妖術をもたらしたように、人間たちには陰陽術や呪術、果ては対妖怪の武器制作法まで。思いつく限りの方法を教え込み、人間たちを妖怪殺しの駒へと変えた」
ヤツは当時蔓延した疫病や飢饉まで、その全てが妖怪のせいであると嘯いた。

怒り狂った人間は、静かに暮らしていた妖怪たちを闇夜から引きずり出しては殺し。同族を殺された妖怪たちも次第に人間へ強い敵を抱くようになる。そこから先は殺し殺され。ただの泥仕合であった。

「人間にも妖怪にも互いに数え切れないほどの犠牲が出た。嗤えることのできた輩なんて、ことを裏から仕込んだヤツくらいのものじゃったろうな。……さて、昔話はここまでじゃ」

鋼一郎は自らの口角が引きつっていることを自覚した。

ここまでは単なる昔話。愚かな三柱と、ある妖怪の半生についてという前置きをしたもので語られた内容だ。

白江はここで話に一区切りをつける。そして、ここからが「単なる現在進行形の話」である。

「もう一度言うことになるが、奴には不滅の妖術がある。ヤツは千年近くがたった今でも妖怪に対し強い恨みを抱きながら、人の世に溶け込んでいたらどうするだろうか」

ヤツが人間に教え込んだ陰陽術や呪術の類は体得できる人間が極めて少ない上に、その練度にもムラがあったという。

人間の誰もが妖怪を殺せるわけではない。だからこそ、妖怪たちも今日まで根絶やしにされることはなかったのだろうと彼女は言い切った。

「しかし、その前提もここ二十年余りで崩れつつある。今まで、陰陽師どもをかわし続けた歴戦の猛者たちが次々と殺されるようになったのじゃ。街中に仕組まれた監視の目に、羽虫のような〝どろーん〟とやら。極めつけは対妖怪用のヒト型装甲兵器・凱機は誰にだって妖怪を殺せる力をヤツはお前さんたちに与えたのじゃ」

白江は「ここまで言えば、もう十分だろう」とその眦を細めた。

祓刃の設立や監視カメラの配備に常に貢献し続け、凱機製造の最高責任者でもある人物。あの男が口元に薄い笑みを浮かべた姿が、鋼一郎の頭にも浮かぶ。

『――あとはやっぱり間近で見たいじゃないですか。凱機が妖怪を駆除するとこなんて』

何気なしに放った一言。それがあの男の本性だとするならば。

「気づいたようじゃの。裏切り者の名は奈切総一じゃよ」

21

奈切コーポレーションのトップが妖怪で、自分たちは利用されているだけに過ぎなかった。それどころか、自分たちが抱き続けていた妖怪に対する敵意と憎悪さえ仕込まれたものだったという。

「……嘘だろ」

「これが作り話ならどれほどよかったか。そうでなければ、ワシも自分の生涯の千年近くを奈切を討つことに費やしたりはしていないさ」
鋼一郎(こういちろう)は目の前の白江(しろえ)にここまで騙されてきたのだ。何度揶揄われたかも分からない。
だが彼女は嘘を吐くとき決まって、人を小バカにしたような態度をとる。
そんな彼女が唇をきつく結び、真剣そのものな態度でこちらを見据えていた。
「ワシの望みはたった一つ」
雪女・幸村(ゆきむら)白江――彼女の悲願は奈切を討ち、人間と妖怪の憎しみの連鎖を止めることだ。
「ヤツを打つことさえできれば、そして全ての真実を白日のもとに晒しだすことができれば、ワシらだって殺し合わずに済むはず。お前さんを巻き込んだのだって、そのためさ」
冷気を帯びた手が鋼一郎へと添えられた。顔を近づけ、彼女は鋼一郎の瞳をのぞき込む。
「これはワシの私見じゃが、妖術の開祖である奈切に妖術で競り合ったとしても敗北は目に見えておる。ヤツに勝るにはヤツの持たぬ人間の力。脳の際限を外した〝びーゆー〟こそ最もヤツに届く可能性を秘めているのだ。かつて、『奇才』と呼ばれた少女の刃が奈切を討ちかけたときのように」
「奇才……それって、まさか！」
「そう。彼女の強さなら、あと一歩で奈切に届いたかもしれぬ。『百千桃(ももちもも)の再来』と言われたお前さんを巻き込んだのはそのためじゃ」
全身が総毛立っていることがはっきりと判った。眉間を人差し指と親指で挟み込み、一度頭の中を整理する。
「……仮にここまでの話を信じるにしても、いくつか質問をさせてくれ」
事の起こりから順々に整理をつけようと、一つ目の質問を投げかける。
「それじゃあ、お前が持ち掛けた嘘の護衛依頼の件からだ」
「うむ……まず、あの時点で敵が現れることは完全に予想外だったと断っておこう。こう言ってしまうのはどうかと思うが、ワシと仙道が嘘の要件を持ち掛けたのはお前さんが本当に戦力足り得るかをワシ自身の目で見定めるためだった」
白江本来の計画ならば、鋼一郎が気を緩めたタイミングで正体を現し交戦へ。その才覚が十分だと判断した時点で仙道を仲介に挟んでもらいつつネタバラシをする予定だったらしい。
「ワシにはこの街中にどれだけ奈切の目や耳があるかがわからない。最大限の注意を払っていたが、どこからか漏れてしまったのだろうな。……ところでお前さんはワシらを撃ったあの男を覚えているか？」
「ホテルマンに扮していた男か。アイツも利用されている祓刃(はらいや)の人間だったんだな」
「あの男は役割を果たすと同時に機械的に自殺した。奈切は妖術で人を操ることだってできる。

人一人を簡単に傀儡にできることを覚えていてほしい」
「胸糞の悪い話だ。けど。奈切が人を自由に操れるなら、どうして無人機なんてものを作る必要があったんだ？」
「ヤツはすべての妖怪を恨んでいるだけで、人間には微塵の興味もなければ、信用もしていない。単に都合がいいから利用していただけであって、もっと便利な駒があるのなら、そっちを使うはずだろう」
白江の推察は妙に腑に落ちた。無人機だからこそ、装甲を極端に薄くし機動性に振り切れる。もしも学習したデータをＡＩ同士に共有させることができるのならば、すべての敵が学習し戦う度に強くなっていく。人間を使うよりも遥かに優れているのが、あの百鬼という無人機だ。
「ここまでは整理できた。二つ目の質問だが、それじゃあ結局あの九尾は何なんだよ？　顔見知りらしかったが、妖怪にとっての敵が奈切なら、どうしてお前らは敵対してたんだ？」
「うっ……アイツとの蟠りついては長くなるとしか……」
ここまでの白江は此方の問いかけに対し、しっかりと答えを返していた。ただ事が梨乃（りの）になった途端。露骨に口籠ったのだ。
「わかった、なら今は言及しない。……次が最後の質問なんだが、」
そう言い終わるが早いか、唐突にも白江の身体が前に倒れた。
フラりと。全身から力が抜けた彼女は、鋼一郎にもたれるようにして倒れ込む。
「お、おい！　どうした！？」
「……うぅ……いや、ちょっと眩暈がしただけじゃよ」
彼女はなんとか笑顔を作ろうとしたが、その作り笑いにはどうしたって無理がある。もたれ掛かった体は、前に彼女を担いだ時よりもずっと軽くなっていた。
あのホテルでの襲撃から今まで、思えば気の休まる瞬間なんて一度もなかった。それどころか彼女は三日間も鎖で縛られ、ここしばらくは不得意な妖術と鋼一郎の治療に専念していた。
鋼一郎は彼女だって消耗していることに。その癖にいつものような態度で振舞おうとしていたことに今頃気付かされる。
「お前、どれくらい休んでないんだ？」
「一週間と、ちょっとか……はは、上手く黙っておくつもりが悟られてしまったようじゃの」
白江は強がって笑って見せる。
「馬鹿野郎。今度は俺が看てやる！　だから、お前も少し休め！」
「ふふっ……良いのか？　妖怪などの世話を焼いて。お前さんにとってワシは駆除対象。ぶっ殺すべき敵なんだろう」
憎しみのままに鋼一郎が吐いた言葉を、彼女は今一度、突き付けた。
言い返す言葉が出ないのは、その本音が少しずつ変わっているからだろう。
「お前さんが妖怪を憎むのは当然さ。事実として、お前さんは二度も大切な人を妖怪に奪われたのだ。ただな、ワシら妖怪だって好き好んで人を喰うわけじゃなかったということは覚えて

いてくれ」
奈切総一の仕込んだ迫害により、妖怪たちは住処を追われた。追い出された先で充分な食料を得られるとも限らない。残された選択肢は略奪しかなかったのだ。
「人間から食料を奪う、あるいは人間そのものを喰う……そうでもしなければ、生きていけなかった。長いのは所詮寿命だけ。けれどワシら妖怪だって死にたくない。増して殺されるなんて」
彼女は小さく震えている。鋼一郎の包帯塗れの身体をぎゅっと掴んで、声を漏らした。
「ワシはもうこんなこと、終わりにしたい……人間と妖怪が憎み合うせいで、お前さんのような者が大切な者を失うのも。いわれもない迫害で仲間が傷つくのも。ワシは全部……全部嫌なんじゃ」
どこまでも暗く沈んだ瞳と、わずかに滲んだ哀しみの色。彼女がこれまで、なぜそんな顔をしてきたか。今ならば、はっきりと判る。
毅然に振舞い続けた彼女の本音にようやく初めて、触れられた。
「そうか……お前はずっと一人で。ずっと一人で仲間（妖怪）と俺たち（人間）のために戦ってくれたんだな」
鋼一郎はその小さな体を強く抱きしめた。
「もうお前ひとりで戦わせたりしない。俺も戦う。お前の嫌なことは全部、俺が終わらせてやる」
「……鋼一郎」
彼女は渾身の力で鋼一郎を弾き飛ばす。
「ばっ、馬鹿者ッ！　急に抱きしめるなッ！　ワ、ワシは雪女で、妖怪で……。えーい！　こ、この〝ろりこん〟変態！　下郎な小児愛好家めッ！」
白江は顔を真っ赤に腕をぶんぶんと振り回す。かなりテンパったご様子だ。
泣きじゃくる子供を相手にどうすればいいか迷った末に……とは口が裂けても言えなかった。それを言ってしまえば、白江はもっとキレると察したのだ。
「いってぇ……本気で突き飛ばす奴があるかよッ！」
「……す、すまぬ。やりすぎた……ところで、鋼一郎よ。お前さんの最後の質問とやら。結局ワシに何を聞こうとしたのじゃ？」
「あぁ、あれか……」
――どうしてお前はそこまでして、奈切と戦おうとするのか？　その答えを聞く必要はもうないだろう。
「いや、なんでもねぇよ。白江」
随分久々にその名前で呼ばれた彼女はめいいっぱいにはにかんだ。

22

二〇二八年　七月三十一日　午後八時二十四分
東京都　柄沢市・奈切コーポレーション社長室

『いってぇ……本気で突き飛ばす奴があるかよ！』
『……す、すまぬ。やりすぎた……ところで、鋼一郎よ。お前さんの最後の質問とやら。結局ワシに何を聞こうとしたのじゃ？』

奈切は耳の奥に刺していたイヤホンを外す。
「いやぁ、随分と妖怪と人間なんかが仲良くなっちゃって……」
すべて筒抜けだというのに、本当におめでたい連中だ。笑いを堪えるのも精一杯だった。
「これは決戦の日も近かったりするのかな？」
そう零しながら奈切は手元のＰＣへと視線を落とした。画面に映るのは奈切コーポレーションの保有するファクトリーの映像だ。
ベルトコンベアーを流れるのは凱機の内部フレーム。延々と続く生産ラインから次々と流れ出る未完成のフレームは、地の底から現れ、行進する骸の騎士団のようであった。
書類上このフレームたちはすべてムラクモとして完成され、祓刃へと配備されることのなっている。しかし、その実態は半数以上がコックピットの代わりにＡＩユニットが組み込まれ百鬼として完成される手筈になっていた。
ＡＩ達を司る中央サーバーには既にホテルで鋼一郎とやり合ったデータのほかに、この一年祓刃で稼働していたムラクモたちの戦闘データが潤沢に蓄積されていた。
完成した百鬼たちは組み上げられた瞬間から、その全てが二級から一級隊員相当の戦力を持ち合わせるだろう。
製造ラインは順調。数を揃えるのも容易であった。それでも奈切は、ふと言葉を漏らす。
「それにしても、この二人って……いやぁ、ホント。忘れ形見ほど恐ろしいものもないね」

23

二〇二八年　七月三十一日　午後八時二十四分
東京都　柄沢市・山中

怪我も治って早々に、白江が「見せたいもの」があると鋼一郎を連れ出したのがことの発端であった。鬱蒼と木々の生い茂る山中を、彼女は先導する。
「ほれ、綱一郎！　さっさと上ってこんかい！　それでも祓刃隊員か？」

木の根の凹凸も構うことないと言わんばかりに突き進む白江に、人間の脚力では追随するのが精一杯だ。肩を大きく上下させながら、鋼一郎は額に浮かぶ汗を拭う。
「はぁ、はぁ……というか、俺たちは一体どこを目指してるんだよ？　そろそろ目的地くらい教えてくれてもいいんじゃないか？」
「着いてからのお楽しみだと言っておるだろう。それに頑張ったなら、またワシの体をぎゅっーつ！　としてもいいぞ！」
ニヤニヤとして白江が足を止めて振り返る。数日の休養を取れたおかげで彼女もすっかり回復したらしい。少々、元気になりすぎな気もするが……
「前にそれで突き飛ばされたよな？」
「あれは心構えが出きってなかったというか……けど今のワシならいつでも〝うぇるかむ〟じゃ。ほら、ワシの愛され〝ぼでぃー〟を好きにさせてやるわい！」
「……どこが愛されボディーだよ、子供体型」
淡々と答える綱一郎に彼女は頬を膨らませる。息を切らしている綱一郎の元まで下ると、その脛を思い切り蹴ってやった。
「痛っ!?　……は？　なんで俺は蹴られたんだよ！」
「答えてやるものか。乙女心もわかるぬ馬鹿者め！」
立て続けに二度、蹴られた。彼女のローキックはどうにも、おふざけの威力を超えている。
そのせいか、鋼一郎はその場で黙りこくってしまった。
「あ、あれ……もしかしてワシ、強く蹴りすぎた？」
「……あっ、いや。……そうじゃなくてだな」
こうやってふざけ合っていても……いや、こうやって白江とふざけ合う時間を悪くないと感じているからこそ、頭には尚更不安がよぎってしまう。

妖怪と人間を対立させた元凶。スポンサーとして祓刃（はらいや）を牛耳る妖怪・奈切総一（なきりそういち）。――果たして今の自分たちに彼を討つことはできるのか？
「なぁ、白江。少しいいか？　奈切にはどんな傷を負おうとも死なない不滅の妖術があるんだよな？　よく考えなくても、そんなやつを倒すなんて本当にできるのかよ」
「ハッキリ言って不可能じゃな。だから、こっちも切り札を使わせてもらう」
白江はおもむろに自身の懐をまさぐり、それを取り出す。
彼女の掌にあったのは、なんの変哲もない小さなガラスの玉であった。
「じゃーん！　これがあの三柱の玉であるぞ！」
「三柱の玉……それって、あの廃工場で九尾も言ってたやつか！」
「そうじゃよ。梨乃（りの）のヤツが探しっておったのも、奈切の刺客がワシを殺そうとしたのも、すべてはこれを奪うためじゃ」
けれど鋼一郎の目には、そのガラス玉が特別なものにも見えなかった。強いていうのなら、

透き通るように奇麗なことくらいか。
「えっーと……これで野郎の頭をぶん殴るとか」
「ふふ、確かにそれも痛そうじゃが、違うぞ。これはガラス玉の形をした檻。かつて三柱と称された者たちの成れの果て、或いは連中の存在した証じゃよ」
曰く、いかなる手段をもってしても不滅である奈切を殺せないと悟った三柱たちは、次に奈切を幽閉する手段を模索したそうだ。
束縛にまつわる妖術に加え三柱それぞれが体内に循環する妖気エネルギーの全て注ぎ込むことで制作されたのが、このガラス玉である。
「使用条件は対象がある程度の傷を負っていること。――この玉の中では絶えず、分解と再構築が繰り返されるんじゃ。だから、この中に瀕死のヤツを入れてやれば殺すこともできなくなるが、代わりにヤツも壊れた体を再生する以外の余裕がなくなり、永遠に外に出れなくなるという仕組みじゃ」
「容赦のない代物だな……けど、ちょっと待て。なんでそんな凄そうなものお前が持ってるんだ？」
その質問に白江の目が右へ左へと泳いだ。
「あぁ、それはな……いやぁ、なんというかだな……」
口籠り、何やら眼を逸らした。そしてボソりと
「……盗んだものじゃ。」
「は？」
「じゃーからっ！　ワシが梨乃の奴から盗んだと言っておるだろうがっ！」
三柱の玉は奈切を討つうえで絶対必須の切り札だ。しかも、その製法を聞く限り、代わりが作れるようなものにも思えない。
それを盗まれたとなれば烈火の如く怒り狂うはずだ。梨乃がどうして苛烈に白江を責め立てたのか、あの洞窟でどうしても白江が質問に答えなかったのにも妙な合点がいった。
「なにが『梨乃との蟠りついては長くなるとしか……』だよっ⁉　ただ単にお前が盗んだって言いにくかっただけだろ！」
「うっぐっ……確かにそれもそうじゃが、それ以上に理由があるのじゃ！」
「じゃあ、その理由ってのは何なんだよ？」
「……この玉を持っていたのが梨乃ならば、アイツは間違いなく死んでいただろうから」
一時の沈黙を置いて、白江は苦々しくそう答えた。
「梨乃はワシの親友じゃったが、アイツは人間と力を合わせることを良しとしなかったんじゃ。もしもアイツが今も玉を保有していたのなら、妖怪たちを率いて奈切に挑んだんだろう。しかし、そんなことをしたって三柱たちの二の舞になるだけ……」
一度梨乃と本気で殺し合った鋼一郎だからこそ、その事実には戦慄を覚えてしまう。
彼女は本気を出してすらいなかったのだろう。整備不良と凱機と怪我のハンディキャップを抜きにしたって、あの「隊員殺シ」は自分を圧倒したのだ。

「あの九尾は俺が殺してきた妖怪たちとは一線を画すほど強かった。アイツの真骨頂は妖術で出した九本の武器なんだろうが、修羅場をくぐってきた経験則と、相手を研究して対策を徹底する周到さもあった。アイツが扇動する一団ならそれなりにいい勝負になると思うんだが」
「勝率でいえば九対一。一の方が梨乃じゃ。それも希望的な観測を込みして」
「そこまではっきり言い切れるのかよ……」

一方で白江は「百千桃（ももちもも）ならば」とも言い切った。

桃にB・Uが齎した世界は、鋼一郎の見ることできる世界の完全上位互換だ。行き過ぎた動体視力により世界が静止したように見える彼女ならば、あとは敵に有効な装備を揃えるだけで、敵を一方的に塵殺することが出来る。

しかし、それを逆説的に言ってしまうのなら「その領域に至ってようやく勝算が見えてくる」という意味でもあった。鋼一郎の瞳が映し出すスローモーションの世界が通用するとも思えない。

「白江……俺たちは勝てるのか？」
「もう奈切の正体を知る妖怪だって少ない。真実を知る仲間たちは『高危険度妖怪』に指定され、優先的に駆除が進められたからの。それこそ生き残りはごく僅かじゃ。ならば、ワシらが勝つしかないじゃろう？」

白江の放つ冷気は依然として、ひんやりとしたものだ。それでも彼女の瞳にはジンとした熱を帯びる。

「勝たねばならぬのだ。もう誰かが悲しまずともすむように」

その眼差しを見れば、もう十分だ。

「……ふんッ！」

鋼一郎は自らの顔を真正面からぶん殴った。

「なっ……何をやっているのじゃ!?」

思い切りぶん殴ったせいで、鼻血が止まらなくなってしまった。錆臭い味がするのは口内を切ってしまった証拠であろう。それでも、鋼一郎は精一杯に強がった笑みを作ってみせる。

「悪い白江、弱音を吐いちまった」

彼女と戦うと決めたのだ。くだらない迷いなら、ここに置いていけ。

「まったくお前さんという奴は……」

嘆息交じりでも白江も微笑を浮かべていた。そして彼女はおもむろに指をピンと立てる。

「それにワシらの勝算は三柱の玉だけじゃない！　もう一つ、お前さんにしか乗りこなせない切り札が用意してある！」

24

「俺にしか乗りこなせない切り札……だと？」

「ふふ、着いてからのお楽しみじゃ。それに目的地まではもうすぐじゃよ」
白江の指し示す先。そこには岩肌に隠されるように鉄扉があった。
そして、鉄扉の前には一人の男が二人の到着を待ちわびている。
「君たちなら、必ず辿り着くと信じていたよ」
「……仙道指揮」
「ここは祓刃じゃないんだ。ただの仙道で構わないさ。それよりも克堂くん。まずは君を騙していたことについて謝罪をさせてくれ。」
仙道はまず鋼一郎に深く頭を下げた。そして顔を上げた彼は、その手を差し出す。
「同時に私は、君に感謝しきれないんだ。幸村くんと共に戦うことを選んでくれて、ありがとう」
彼もまた白江から真実を明かされ、祓刃で孤独に暗躍し続けた男だ。
鋼一郎差し出された手を強く握り返す。
「俺の方こそ。仙道指揮……じゃなくて、仙道さんがいてくれて心強いです！」
「ははっ。あと数年若ければ、私も役に立てそうなんだがな」
仙道はそう苦笑を交じりで答えたが、その手には幾つもの小さな傷があった。凱機の操縦桿を握りしめた特有の傷だ。口では役に立てないと笑いながらも、当時の勘を取り戻そうとしたのだろう。
「奈切との決戦は出し惜しみなしじゃ。仙道。お前さんにだって前線に出てもらうぞ。そのための凱機も、」
「ムラクモ三十機。盗み出す算段も、決戦時のプランもすでに用意はできている」
「さすが、仙道。仕事の速さはピカイチじゃ」
白江がパチン！　と指を鳴らす。
「ならムラクモを一機、俺に貸してください。必ず戦果を挙げてみせますッ！」
「残念だが、それはできない相談だな。盗み出したムラクモのパイロットは既に選定してあるんだ。私が祓刃の中から信用に足る人物を選び、協力者になってくれた皆にね」
「なっ……それじゃあ俺は何に乗ったらいいんです!?」
「じゃーから、何度も言わすな！　もう一つの切り札。それがこの扉の向こうにあるのじゃよ！」
二人は、ソレを見た鋼一郎が驚愕することを確信していた。
だからこそ、その鉄扉をめいいっぱいの力で押し開ける。
「あまりの完成度に腰を抜かすなよ？」
扉の向こうに広がるのは金属質の壁に包まれた空間だ。ガントリークレーンや溶接機を備えたそこは、近代的な工場区画といって差し支えない。

これだけの設備が整っていることだけでも唖然とするには充分だが、鋼一郎の視線はただ一点に集約される。
「なっ……！？」
区画の最奥に、それは静かに鎮座する。
コックピットとエンジン部を備えたコアブロックに接合されたのは、より緻密に人体を模したであろうしなやかな四肢。鋭利かつ、堅牢な装甲がそれを覆い込む姿は、数多の歴戦を潜り抜けたであろう武者将軍を思わせる。
平板状の加速装置（ブースターユニット）を両肩と両腰に計四枚を備え、頭部のツノ状アンテナもそれ自体が刃物のように大型化されていた。
これが彼女の言っていた、もう一つの切り札なのか。それはまるで名匠が鍛えたであろう刃のように。エメラルド色のツインアイは鋭いまま、強靭さと危うさを秘めていた。
「な、なんだよ……この凱機は……」
「凱機ではないさ。B・U〝ぱいろっと〟専用凱妖機（がいようき）ムラサメじゃ！」
隣に並ぶ白江が捕捉した。
「凱……妖機だと？」
「そう。人間と妖怪、その両方を守るためにある、お前さんの新たな刃じゃよ」
ムラサメの周りにはオレンジ色のツナギを着たメカニックらしき数人と、白江の仲間らしき妖怪たちの姿があった。彼らは入ってきた鋼一郎たちに目もくれず、ムラサメの整備に没頭している。
「もしかして、この機体って妖怪と人間が一緒に作ったのか？」
「そうじゃよ。ワシとお前さんが分かり合えたのと同じじゃ。それに妖怪たちの中にだって工芸に長けた連中は多い。決戦に備え千年近くも鍛冶に向き合い続けた連中のあしらった装甲じゃ。その固さ、侮るでないぞ」
「メカニック各員も私が勧誘した信用できる人間たちだ。ムラサメのパーツ自体は工業製品用と偽り、集めたものを組み上げてあるが、関節だけは君の無茶にも耐えられるよう特注品のものを用意した。操縦には若干の違和感を覚えるだろうが、すぐに慣れるはずだ」
その実態は既存の凱機にある程度のアレンジを加えた非正規の「デッドコピー」と称するのが最も適切であろう。しかし鋼一郎の搭乗を前提に完成されたムラサメの性能はコピー元であるムラクモをも上回るはずだ。
すべては奈切の首元に刃を届かせるため。その為に密造されたムラサメは伊達ではない。
「よいか、鋼一郎。奈切を攻めるのは一週間後じゃ。それまでに仙道や他の人間の協力者たちも各々で準備を整えてくれる。それに加え全国からは志を同じにする妖怪たちも、この柄沢市に集結する予定じゃ」
真実を知り、奈切と戦うことを選んだ祓刃隊員が五十名。白江と古い縁があり全国から集う

特別指定高危険度妖怪が十名。並びにその傘下に属する妖怪が三十名。――計九十名の人妖乱れる連合軍の大反乱だ。
「当然奈切も、祓刃や例の無人機を使って反撃に出るだろう。総力戦になれば数で不利なのも明白。しかし私が狙うは大将首だけだ」
「集った皆が三柱の玉を持つワシと、ムラサメを駆るお前さんのために梅雨払いを請け負ってくれる。これはお前さんがヤツを瀕死に追いつめ、ワシがこの玉の中にヤツを閉じ込めるためだけの作戦じゃ。じゃから――――」
　このムラサメを残された一週間で完璧に乗りこなせと言うことか。
「上等だぜ。俺はあの人に凱機の乗り方のイロハを叩き込まれたんだ。どんな機体だって乗りこなしてやるよ！」
「言わずもがなだったな。じゃが、その前に」
　白江が鋼一郎の腹を軽く殴った。
「まずはその恰好を何とかしろ。ここになら着替えもある。いつまでも包帯姿でうろつくな」
「うっぐッ……それもそうだな」
「それから、傷が治ったと言えど疲労は取れていないはずだ。今日一日はゆっくり休んだとしても問題ないだろう」
「……なんつーか、色々と気を遣わせたみたいだな。色々ありがとよ」
「うむ！　ワシは気遣いの出来る乙女じゃからの！」
　ない胸を張る白江の姿に鋼一郎の表情も緩む。
　それと同時にムラサメのエンジンハッチが開いた。中でエンジン回りを弄っていたのだろう。機体から降りてきたその少女と視線がかちあった。
「「あっ……」」
　鋼一郎を一瞥した彼女の瞳は、銀フレームの眼鏡の下でキッと細められた。久方ぶりの再開となる由依（ゆい）はモンキーレンチを片手に鋼一郎に詰め寄ってくる。
「やっと来たんですね克堂くん。散々私を心配させて。それにたくさん怪我もしたみたいじゃないですか」
　淡々とした口調の裏には、言い知れぬ怒りが込められていた。空気が一気にピリつき、この場に居合わせた全員がその変化を察した。
「克堂くん。私は裏で他にも用意せねばならないから」
「ワ、ワシもいい加減着替えねばの。……思えば何日も同じ服なんて乙女としてありえんことじゃから」
「あっ……コラ！　逃げんじゃねぇ！」
　二人はしれっーと構えて、この場からフェードアウトした。
「え、えっーと……俺も着替えてこようかな……」
「逃がしませんから」

思わず、「ひっ」と声が漏れた。捕まれば、その手のモンキーレンチでぶん殴られるだろう。
「悪かった！　俺が悪かったから！」
なおも由依は歩幅を緩めることなく距離を詰める。最後の方は駆け出して――
「ばかぁ！」
鋼一郎に強く抱き着いた。
「ゆ、由依……お前……」
戸惑う鋼一郎をよそに彼女はポロポロと涙をこぼす。
「ばかぁ！　ばかぁ！　もう会えないと思ったじゃん！」
丁寧な言葉ときつく結んだ表情しか見せなかった彼女が、顔をグズグズにして泣き崩れた。

25

「えっと、その……落ち着きましたでしょうか、由依（ゆい）さん？」
「はい。それから変にさんを付けないでください」
「あっ、はい」
数分近く鋼一郎（こういちろう）の胸板に顔をうずめ泣きじゃくった由依も、ようやくいつもの調子を取り戻した。ツナギの裾で目元を拭い、その隣へと小さく腰掛ける。
「さっきのアレは私であって、私ではない何かです。ですから忘れるように」
「お、おう……けど泣くほどのことじゃないだろ。ほら、俺はこうして元気に生きてるんだから！」
あっけらかんと笑う鋼一郎をキツく睨む。「そういう問題ではない」と言葉にせずとも目が強く訴えていた。
「……すいません」
「わかればいいんです。それでどうして、こんなに怪我をしたのですか？」
「えっと、そうだな……まずは脇腹を撃たれて、」
鋼一郎はここまでの一部始終をすべて明かした。途中までは黙して聞いていた由依だが、後半になるにつれてエスカレートしていく内容に我慢できなかったのだろう。
「頭がおかしんじゃないですか⁉　撃たれた後に十七階から飛び降りて、ロクな手当てもしないまま凱機（がいき）を操縦。しかも、そのまま病院にも行かず逃亡生活をしたうえ、九尾とも交戦しただなんて……なんで、そんな無茶をして生きてるんですかっ！」
「はは……やっぱり怒られるよな」
「笑い事じゃありませんから。それだけの期間、B・Uで脳と瞳も酷使し続けたってことでもあるんですよ！　失明や更なる障害誘発のリスクについては前にも忠告しましたよねッ！」

その指摘はひどく適切なものだ。
誰にも明かさずにいたがここ数日、瞳の周りが熱を持って痛み、出血することも珍しくなくなっていた。
以前された忠告が頭の中に蘇る。本来、脳の制限とは自身の身体を守るためにあるものだ。それを無視したB・Uの乱用がなんのリスクも伴わないなんてことはありえないのだ。
この動体視力は酷使できて、あと三回。いや、短期間に二回も使えば瞳が潰れる。最悪の場合は脳が焼き切れたっておかしくはない。
由依の勘が異様に鋭いことだって、自分が一番よく分かっているつもりだ。訓練校時代、どれだけ喧嘩をしたことを上手く隠したって、最後には彼女にバレてしまった。恐らくは、瞳の状態がバレてしまうのも時間の問題であろう。
「なぁ、それより」
だからこそ、鋼一郎はワザと話題を逸らそうとする。
「お前こそ、どうしてこんなとこに居るんだよ？　仙道さんに誘われたからって、自分からリスクを負う必要はなかったろ？」
「そんなの……そんなの君が心配だったからに決まっているでしょう」
由依はそう言って、すぐに顔を逸らした。何故かその顔は耳の先まで真っ赤になっている。
「私、訓練校で会ったばかりの頃は克堂くんのことすごく嫌いだったんですよ」
「ちょっと待て。なんか、いきなり、傷つくこと言われたんだが!?」
「いいから聞いてください。だってそうでしょう？　皆が憧れていた奇才・百千桃（ももちもも）が連れてきた少年が見るからに傷だらけのヤンキーなんですよ。怖いですし、真面目にやっていた私からしたら君のような輩が評価されるのも面白くなかったんです」
あまりに唐突のカミングアウトに鋼一郎は困惑する。確かに訓練校に入った当初は自分が奇異の目で見られていた自覚はあるが、まさか一番仲の良かった由依にまでそう思われていたとは、
「だけど……君を見ていると、すぐに間違っているのは私の方だって気付かされました」
由依はずっと、陰ながら鋼一郎の姿を見ていた。
放課後、一人グラウンドを走り続ける姿を。
複雑な凱機の操縦をいち早く覚えようとマニュアルを読み込み、シミュレーターに篭る姿を。
初めは心配だったから、目を離せずにいた。しかし、気づくと鋼一郎を目で追うようになってしまい、次第にその感情も紅く色づいて……
「私に凱機の操縦適性がないと分かった時。ショックで訓練校を去ろうとも思いました。けど、どうしても心配だったんですよ。君は訓練校でも無茶ばかりで、いつも桃教官を困らせてましたからね。それに私は君の頑張る姿が好きだったから――――だから少しでも君を支えられる、私もメカニックの道を選びました」
それは今だって同じだ。仙道に真実を明かされあと、彼から改めて共に戦う覚悟があるかを

問われた。それでも彼女の中には迷う理由なんて一つたりともない。
「何故、私がここにいるか？　そんなことは愚問です。君用の凱機を調整できるのも私くらいのものですし、なにより君を一人にしてはいけないことも今回で証明されました。ですから。役に立てなかったとしても、せめて君と一緒に戦わせてください」
　由依の瞳にはまたじんわりと涙が滲んでいた。ツナギの袖をきゅっと掴んで、懇願する。
「お願いですから。もう私を一人ぼっちにさせないでください、克堂くん」
「ゆ、由依……なんか、お前らしくないぞ」
「誤魔化さないで。早く答えてください」
　心臓やけにうるさかった。一度深く息を吸い、ざわつく心を落ち着かせる。
　こんなことを言うのはガラでもないし、増して由依に面と向かって言うのは妙な気恥しさもある。それでも決意は固めた。
「わかった。お前を一人なんかにさせたりしないさ。だって、俺たちは『親友』だもんな！」
「……は？」
　由依の表情が露骨に曇った。腹の底から嘆息を吐きだして、モンキーレンチを構える。
「ちょ……ちょっと待て！　俺なんか間違えたか……！？」
「大間違えです。けど、まぁ、筋トレと桃教官のことしか頭にないダメ男に期待した私もバカでしたね」
「とりあえず、手にしたソレを下ろせよ！　今殴られたら、絶対に死ぬから！　傷が開いて、そのまま死ぬから！」
「なら、いっそ死ねばいいんですよ。それに君は私が心配している最中、なにやら可愛らしい雪女さんとねんごろになっていたそうじゃないですか」
　鋼一郎の鼻先をレンチが掠めた。
「ば、馬鹿！　俺とアイツはそういう関係じゃなくてだな！」
「言い訳は無用ですッ！」
　まずい。このままでは今度こそ本気で殺されるッ！
　反射的に頭を守り、防御姿勢をとった鋼一郎。だが、その頭にレンチが振り下ろされることはなかった。恐る恐る目を開けたなら、由依は何かを差し出していた。
「えっと……これは……？」
「……ムラサメの起動キーですよ。……君にはまだまだ言いたいことがありますが、ひとま目先の問題を片付けてからにしましょう。無茶をするなというのが無理なら、せめて怪我をしないで、生きて帰ってくると約束してください」
「それくらいの約束なら、」
「本当ですね？　両目がつぶれたなんてのも、ナシですからね」
　やはり誤魔化すのには無理があったのか。由依は鋼一郎の瞳のことも見抜いて、それでも、あえて気づかぬふりをしてくれたのだろう。
「訓練校からの付き合いなんですよ」と彼女は冗談めかしく表情を緩めた。

受け取ったのは、小さなエンジンキーのはず。それなのにキーは異様に重く感じられた。
このキーには由依の願いと、ムラサメを組み上げたエンジニアや妖怪たち。自分をここまで導くきっかけとなった仙道や、一人孤独に戦い続けた白江。この場に居合わせた全員の覚悟が乗せられているのだろう。
受け取ったキーを強く握りしめる。
「あぁ、約束するよ。俺は必ず、帰ってくるよ」

◇◇◇

以下の二つのニュースが届いたのは、その約束から一日もしないことだった。
仙道和樹・夏樹由依・並びにその他数十名の祓刃隊員が一斉指名手配。
これから合流する予定だった妖怪たちが、一つ目の凱機の襲撃に会い全滅。

26

二〇二八年　八月四日　午後十時
東京都　柄沢市・北沢組本部

ムラサメを積載したトレーラーは古風な作りの日本家屋の前に駐車する。
訓練校のカリキュラムの一環で免許こそ取得していたが、実際に公道を走るのは久々だった。事故などを起こそうものなら、指名手配の自分は一発でアウトだ。そう考えると、ハンドルを握る手も妙に強張る。
「……ここはどうだ？」
ここは指定暴力団・北沢組の本拠地だった邸宅だ。スモーク張りの車窓を数センチだけ開けて鋼一郎は、白江へと問いかける。
来るべき決戦の日までひたすらに姿を隠し続けた彼女に対し、梨乃は拠点を転々とする。彼女と彼女の生活圏傘下に属する妖怪たちは一定期間で拠点を捨て、新たな拠点に移ることで追手を避わしてきたのだ。
「微細だが、血の匂いがするの。乾きようからして、ざっと数週前と言ったところか」
「じゃあ、ここがそうなんだな」
ここは今、梨乃のコロニーへと打って変わっていた。きっと中の人間を皆殺しにし、この邸宅を奪い取ったのだろう。四方は塀に囲まれ、監視の目も届かない。加えて暴力団の調査は警

察の職務だ。
「祓刃(はらいや)はサツと仲が悪いからな……隠れ場所までよく考えてやがるよ。ほんと」
「梨乃は頭がとにかく頭が切れる。けれど、そういう輩は思考にある程度の〝せおりー〟があるのじゃ」
梨乃はコロニーとする場所を選ぶのに幾つか見つかりにくい条件を選ぶそうだ。そして、彼女の親友だった白江なら、ある程度その条件を知っている。あとはその条件に合致する施設を仙道(せんどう)が絞り込むことで、彼女のコロニー候補を割り出すことが出来たのだ。
プロテクターを忍ばせた迷彩服に身を包み、二人はトレーラーを降りる。その手にはムラサメの軌道キーと、遠隔操縦の端末も握りしめてだ。
「分かっておるな、鋼一郎。ワシらは今から犬飼(いぬかい)梨乃と交渉をするのじゃ」
「あぁ。三柱の縁者・九尾とその傘下の妖怪総勢三百人。全員、俺たちの仲間になってもらうぜ」

◇◇◇

白江が梨乃に共闘を持ち掛ける決心を固めたのは、ムラサメの整備基地で起こった殴り合いがきっかけだった――――

仙道が集めていた協力者のほとんどが妖怪対策法違反として捕縛され、一週間後に集合する予定だった妖怪たちも連絡が途絶える。そんな絶望的なニュースが二つ同時に舞い込んだのだ。あまりにドンピシャすぎるタイミングかつ、白江たちの内情を知らなければ起こらなかったはずの事態だには、誰もが皆、内通者の存在を疑ってしまう。
互いが疑心暗鬼になり、遂には不満が爆発する。一昨日にはメカニックの一人と妖怪の一人が口論の末、殴り合いの大喧嘩にまで発展した。
その場は仙道と白江が辛うじて収めたものの、やはり人間と妖怪の関係には危うい脆さがあることを痛感させられた。
鋼一郎や仙道、それに由依(ゆい)や白江たちは整備基地に居合わせていたために運良く追跡の手を免れたが、それでも人妖入り乱れる総勢九十名の連合軍は決戦を前にして、すでに崩壊を始めていたのだ。

◇◇◇

三柱の玉の持ち主であった梨乃は、かつて三柱と呼ばれていた妖怪たちの一柱、九尾の正当な血縁者にあたる妖怪だ。それに加え、多くの祓刃隊員を屠ってきた実績は彼女の名に大きな箔を付けた。総勢三百名の傘下という規模を見れば、彼女の影響力を伺い知ることも容易であろう。

今夜、梨乃のコロニーを訪れることはごく一部の人員しか知りえない。ここで彼女を説得し、彼女らを戦力に加えることが瓦解しかけた連合軍を立て直す、唯一の策なのだ。

「……待った」

分厚い門を叩こうとした鋼一郎を白江が呼び止める。

「やはり、これは先に明かしておくべきだと思っての……梨乃がお前さんら人間に異様な敵意を向け、頑なに団結することを良しとしなかった理由じゃ」

梨乃にはかつて妖怪の恋人がいたという。一本の角を持つ精悍な鬼の青年だったそうだ。

その恋人を祓刃の全身となる奈切直属の陰陽師一団に殺された。それもかなり惨たらしい方法でだ。

「生きたまま皮を剥され、挙句に首を晒しものにされたのじゃ。怒り狂った梨乃はその陰陽師どもを一族ごと根絶やしにしたさ。それでも彼女の焦がれた者は帰ってこん。ヤツの傘下にいる妖怪たちだってそうじゃよ。縁者や恋人、あるいは師とするものを惨たらしく殺されたのだ。そう簡単に分別が付くわけもない」

鋼一郎も妖怪に両親と恩師を殺された人間だ。だから、彼女らの憤りが痛いほどよくわかる。

「……そうか」

「正直、理屈ではないのじゃよ。ワシの様に割り切ってものを考える方が少数派じゃ」

返した白江の言葉にも哀愁のようなものこびりつく。それでも二人は立ち止まるわけにはいかなかった。

数回ノックすれば、丸坊主の男が現れた。いかにもその筋の人間といった風貌だが、白江たちと同じ、人間に近い姿の妖怪であろう。

「久方ぶりじゃの、見上げ入道」

「おぉ、これは幸村のお嬢！　ということは、遂に犬飼の姐さんに玉を返してくれる気になったんですね！」

大入道の態度は想いの他、歓迎的なものだった。それはまるで、数年ぶりに帰郷した親戚の娘を出迎えるように。だが、その朗らかな表情も隣の鋼一郎を見た途端、一気に強張る。

「お嬢……俺の見間違いだったら申し訳ありませんが、お隣の方は人間じゃないでしょうか？」

「指名手配中の元祓刃隊員、克堂鋼一郎。ワシの仲間じゃ」

「そうでしたか。それじゃあ、お嬢は姐さんに詫びを入れに来たわけじゃないんですね？」

「三柱の玉の相続権は梨乃とワシの両方にあるはずじゃ。詫びもクソもないじゃろう。それに

ワシが考えを改めないことは、アイツが一番わかっておるはずじゃ」
鋼一郎の角度からは、白江の手の中に鋭利な氷片を忍ばせているのが見えた。
交渉と言いながらも、多少は強引にならねば圧し通れないことを彼女は弁えていた。
「梨乃を出してはくれぬか？　ワシは彼女に用がある」
「なりませんね。……お隣の人間をぶっ殺す許可を頂けるなら、話は別ですが」
差し向けられた鋭い殺気に鋼一郎もまた拳を構える。睨み合う三者の間に緊迫した空気が流れた。
だが、その空気も彼女の一言でかき消される。
「――――止めろッ！　お前ら！」
荒々しく蹴り破られた玄関の向こうには、灯りのない廊下が続いていた。その闇の中、金色をした彼女の双眸と尻尾はよく目立つ。
「なぁ、白江。アンタはそう簡単に死ぬようなタマじゃないとは思ってけど、まさかノコノコ訪ねてくるなんてね」
羽織っているのは男物の着物は、恐らくこの邸宅の持ち主のものだったのだろう。不敵な笑みを浮かべ、両腕を組み交わした犬飼梨乃がそこに立っていた。
「せっかくなんだ、あがって行けよ。話なら中のほうが良いだろうしさ」

27

梨乃（りの）に招き通されたのは地下へと続く階段だった。
暴力団のアジトには証拠を隠すための部屋や、身柄を避わすための脱出通路があるというのはよく聞く話だが、まさか本当にそんなものがあるとは思わなかった。
しかも、不自然に設置された書類棚の裏とは。ベタ過ぎるにも程があるんじゃないだろうか。
「さぁ、どうぞ。客間はこっちだ」
「嘘こけ、客間ならさっき見えたぞ。まぁ、入ってはやるが、後ろから押したりするのはナシじゃからな」
「アタシがそんなつまらない真似をしないことくらい、アンタが一番よく分かってるんじゃないの？　それに人間の方。アンタ、あの克堂鋼一郎（こくどうこういちろう）でしょ。初めて会ったときは気づかなかったけど、街で手配書を見つけたときはピンと来たんだ」
梨乃が視線をキロりとこちらに向けた。夜間ほど妖怪たちは活発になる。その例に漏れず、彼女の瞳の金色が不気味な輝きを帯びている。
「アンタ、一級なんだってね。それも、そんなに若いのに一級になるなんて――――アタシらの仲間をここ数年でどれだけ殺してきたのか？」
彼女は唇が触れ合いそうな距離まで顔を近づけた。そして鋼一郎の耳元で小さく囁く。

「なら、溺死や転落死なんてヌルい死に方で許されるわけもないよな？」
ありったけの憎悪と怒りを乗せた言の葉。向けられたそれに全身が総毛立つ一方で、だんだんと鋼一郎にも彼女という妖怪の全体像が掴めてきた。
ここまで露骨に向ける敵意は、裏を返してしまえば同族や仲間を思うが故のもの。それをはっきりと言葉にして行動できる彼女は詰まるところ、どうしようもなく「優しい」のだろう。
思い返してみれば、三柱の玉を盗んだ白江（しろえ）にさえ何度も忠告を繰り返していた。
それに彼女がただ狂っただけの復讐鬼なら、白江も決戦前に残された希少な時間を使ってまで接触しないはず。
彼女とは交渉ができると、鋼一郎もそれを確信した。
「確かに、俺はたくさんの妖怪を殺してきた。もしかしたら、お前たちの仲間や友人だって殺したかもしれない。だから、全部にケリがついたなら償う方法を探すつもりだ」
「その反応……なるほどね。白江から全部聞いたんだ。けど、それにしてはちょっと都合がよすぎない？　アンタは自分がやってきたことを償えるの？　増してアンタ自身は妖怪を許せるの？」
本当はいるんでしょ？　どうしても許せない妖怪の一人や二人？
そう問いかける彼女の質問に対し、鋼一郎の頭にちらつく妖怪たちがいるのも事実だった。もしも桃教官を殺した妖怪を見つけられたなら、許せるかどうかはわからない。
吐いた言葉がいかに軽薄だったかを思い知る。ただ、それでも――
「確かに都合にいい言い分だった。ただ、それでも俺は戦う。護りたいと思える奴らがいて、そいつらが俺を必要とする限り。俺は戦い続けてやる」
「ふん。その気概がどこまで持つか、楽しみだよ」

◇◇◇

階段には照明の類こそあれど、妖怪たちは夜目が効くために明かりはない。鋼一郎にとっては前をゆく白江の背だけが頼りだった。
「やけに深いな」
もう階段を五十段近くは降りたんじゃないだろうか。それなのに、まるで底が見えない。
隠し部屋にしろ、脱出路にしろここまで深く掘る必要はないはずだ。
「少なくとも、この下でお茶が出てきて話し合いなんてことはなさそうだな」
「アタシらは仲良くお茶をする関係でもないだろ？　ただ、これ以上ないほど、分かりやすくはあると思うけど」
やがて階段の果てへと辿り着く。
その向こうに見えるのは目が眩むほどにギラついた照明と、すり鉢状に切り抜かれた空間であった。すり鉢の周りには座席が設けられ、彼女の傘下に属する妖怪たちがぐるりとあたりを

取り囲む。
「これは、まさか……!?」
それはまるで、古代ローマのコロッセウムを思わせるような空間だった。
天井からは四方に向けて四枚のモニターが吊るされ、中央には巨大なリングが設置されている。
「ここの元住人が残したもんさ。シノギだか何だかは知らないけどさ、連中は違法で入手した凱機で拉致した妖怪を殺すショーを運営してやがったんだよ。――まぁ、連中の何人かにはアタシのトレーニングに付き合ってもらったけどさ。プロレス？　ボクシング？　アタシってさ、そういうの結構好きだからさ。荒っぽく同じことをやらさて貰ったよ」
梨乃は犬歯を剥き出しに、狂暴な笑みを向ける。それでも笑顔で噛み潰せなかった怒りが、そこには滲みだしていた。
「……」
ここからでも床に赤黒い血だまりの跡があるのが見えた。その血だまりが妖怪のものなのか、はたまた人間のものかを伺い知ることはできない。
そして、向こう側には鋼一郎たちの乗ってきたトレーラーが運び込まれている。もともと邸宅の裏手には、違法で入手した凱機を搬入するための大型エレベーターか何かが備えられていたのだろう。
「なぁ、白江。話があるなんて言っておきながら、アレを持ってきてるってことは少なからず力づくってのを想定してたんだろ？」
「ワシが考えを改めないように、お前さんも安い言葉を聞くわけがないと思ったからの。あくまで最終手段。使いたくはなかったが……」
「そんな気遣い無用だね。そもそも奈切とかいうバケモノを生み出したのは、アタシらの親世代の不始末なんだ。B・Uだか凱機だか知らないが、人間と組まずとも妖怪の問題はな、妖怪だけでケリをつけるべきなんだよッ！」
それが梨乃の考えであるというのなら、ここに用意されたリングの役割もこれ以上ないほどわかりやすい。
「どうせ話し合いをしたって、アタシらは平行線なんだ。――ならいっそ、ここで決着をつけよう」

28

《行けるか、鋼一郎？》
凱妖機を操るには専用のヘッドセットで顔の半分以上が覆い隠される。そのために白江の声

は耳に仕込んだイヤホから再生される。
「当然だ。そっちも任せたぜ」
シミュレーター機能を用いて、操縦の癖なら十分につかめた。
鋼一郎は機体のシートに全体重を預ける。二対の操縦桿を握りしめ、踏板（キックペダル）を強く蹴り出す。
「電圧ヨシ。油圧ヨシ。アヤカシドライブエンジン回転数・正常。関節機構ロック解除。OS（オペレーティングシステム）プログラム並びにB・Uアシスト起動。万事オールグリーン――アクティベート・スタンバイッ！」
ムラサメはその上体をゆっくりと起こした。鋼一郎の搭乗を前提に調整された機体バランスと強化関節は、ごく自然に人間的な挙動を再現するだろう。トレーラーの荷台に格納された大太刀型ブレード夜霧（よぎり）・改とそれを収める鞘を腰部に備え、リングへと上がる。
「見慣れない凱機（がいき）ね」
「凱機じゃねぇよ、こいつは凱妖機だ」
「ふぅん、大層な名前だこと。それがコケ脅しじゃないってことを祈ってるから」
反対側のリングには梨乃（りの）が上がった。大きく肩を回し、全身をほぐす。
もともとは逃げ回る妖怪を凱機で追い立てるためのステージだ。十メートル前後のムラサメが武器を振るうのに十分な広さはある。観客席の妖怪から飛び交うのは罵声に怒号。上品な声を探すほうが難しい。
「一応聞いておくが、今からでも俺たちと話し合うつもりはないのか？」
「何度も同じことを言せるなよ。それにシンプルでいいだろ？　お前が勝てば話を聞いてやる。アタシが勝てば、白江には三柱の玉を、お前には命を差し出してもらう」
「いや……あきらかに俺だけ条件がフェアじゃないだろ」
「ここは私の仕切る生活圏（コロニー）だぜ。それとも、お前ひとりでここにいる総勢三二六人と殺し合ってみるか？」
譲歩があるだけありがたいってことか。額を伝うのは嫌な汗だ。
敵意を剥き出しに梨乃が構える。尻尾の二本を突き出し、彼女は吠えた。
「紅蓮操術（ぐれんそうじゅつ）・幕（まく）ッ！」
「――抜刀ッ！」
ムラサメも降り掛かる焔を大太刀で振り払う。有り余る馬力で抜き放たれた白聖鋼（はくせいこう）の刃が照

明器に照らされ蒼白の輝きを乱反射させた。
だが、梨乃もその小さな体をムラサメの股下へと滑り込ませる。以前と同様に派手な炎は目隠しに過ぎない。
彼女が得意とするのは不可視からの一撃必殺。凱機のカメラが持つ視野と構造的な脆さを知り尽くし、幾度となく積み重ねた戦闘経験が彼女の強さを成立させていた。
体内に循環する妖気エネルギーを惜しげもなく使い、拳の硬化と脚力強化の妖術を併用。そのままに拳を突き上げる。
「機体を変えようが、カメラの死角に大差はないッ！」
しかし、梨乃のアッパーカットは空を振り切った。
ムラサメが器用なバックステップと加速装置（ブースターユニット）の逆噴射で後方に飛び退いたのだ。着地の衝撃を吸振機（ダンパー）が噛み殺し、機体は難なく姿勢を保ってみせる。
「見えてんだよ」
「……は？　……そんなわけないでしょッ！」
大太刀を構えるムラサメの死角へ向けて、梨乃の健脚はさらに地面を強く蹴りつける。足場の方に亀裂が走るほどの踏み込みで、彼女はさらに加速する。
今度こそ飛び込めた！　梨乃はそれを確信すると同時に、ふと、自分を捉える鋭い視線を感じた。
「だから、見えてんだよッ！」
ムラサメが腰部から空っぽになったブレードの鞘を引き抜く。
夜霧改とその鞘を両手にしたスタイルは鋼一郎の得意とする二刀流そのものだ。新たに積載されたエンジンから機体へ供給される馬力も、この二本を振り回すのに十分すぎる。
「吹っ飛べッ！」
横薙ぎに振るった鞘が、弾丸のように迫る梨乃を弾き返した。

◇◇◇

なぜ祓刃（はらいや）では妖怪が活性化する夜間に多くの殲滅作戦を実施してきたか？　――それは夜間に活性化するのが妖怪だけではないからだ。
現在の時刻は午後十一時に差し掛かろうとしていた。妖怪である梨乃のスピードも動きのキレも、廃工場で交戦した際より数段上がっているのと同様に鋼一郎の動体視力も捉えられる範囲が広がっていた。
夜間――B・Uを患った人間もまた妖怪と同様に、その異常さを活性化させる。
日光や睡魔といった要素が脳に関与した結果というのが大まかな見解であるが、詳しいメカ

ニズムは未だ明確にされていない。それでもB・Uを発症した人間の脳は、午後八時から午前二時までの六時間、もう一段階そのリミッターが外され、異質な才能を加速させる。

百千桃(ももちもも)や克堂鋼一郎(こくどうこういちろう)といった戦闘において有益なB・U発症者が、ときに単独で数十の戦力にも匹敵することがも確認されている。故に祓刃では多くの殲滅作戦が夜間に実施されてきたのだ。

加えて、ムラサメは「B・U専用機」。

翡翠色に輝きを放つツインアイの光は、新たに仕組まれたA(オートフォーカス)F機能を補助するためのものだった。鋼一郎の異常な動体視力も、標的を瞳で捉えていなければ意味をなさない。そのためにムラサメの備える双眸は視野が拡張されるのは当然のこと、光による映像の補正やピントの自動調整など、従来の凱機に採用されたものを上回る性能で完成された。

さらにその映像はヘッドセットによって、カメラがとらえた情報はモニター画面を介さずとも鋼一郎の瞳にダイレクトで映写される。B・U専用凱妖機ムラサメとは、言うなれば鋼一郎の動体視力を極限まで高めるための機体だった。

閉ざされたコックピットの中。ふと、鋼一郎は言葉を零す。それは彼の中で一つの確信めいたものだった。

「これが、あの人の見てた世界なんだな……」

B・Uの際限がもう一段外れる時間帯。そして強化されたカメラアイと、専用のヘッドセットによるアシスト。

これらの要因が重なり、集中を積み重ねた鋼一郎の見える景色にも変化が生じさせていた。いつもの安っぽいスローモーションではない。加速した梨乃でさえ静止して見える。

全てが止まって見える今の世界は、複数の要因が重なり合い、擬似的に再現された「百千桃の世界」だった。

◇◇◇

「……やってくれんじゃん」

梨乃は垂れてきた鼻血を拭いとる。横殴りに彼女の顔を捉えた鞘は頬骨を砕くのにも十分な威力をしていた。口いっぱいに広がるのは錆臭い鉄の味である。

「回復術(かいふくじゅつ)・憩急(けいきゅう)」

妖術による治癒が行える彼女にとって、この程度のダメージはないに等しい。現にかるく折れ曲がった鼻と頬を撫でつければ、痛みは消え、砕けた骨もより強固に再生された。

だが、今の一撃が彼女の闘争心を焚きつけた。全身が熱を帯び、血脈が早まっているのが自分でもわかってしまう。

「分かった。アタシも本気でやってやるよ――――」

29

梨乃(りの)が手足を地べたに添えた。羽織っていた着物が落ちれば、彼女の淡い肌と雌豹のようにしなやかかつ無駄のない筋骨が露となる。

「さぁ、派手に行こうかッ！」

活性化することで冷気を抑え込むことが出来なくなる白江(しろえ)と同様に、この時間帯は持ち合わせた妖怪本来のポテンシャルを押し殺す方が難しい。

彼女の身体が弾けるように肥大化し、その全身を美麗な黄金色の体毛が包み込む。それに伴うよう、彼女の容姿も人型からかけ離れたものへと変貌を始めた。

哺乳目ネコ目イヌ科イヌ亜科に属する姿をしながらも、ムラサメにも劣らない巨大な体躯とゆらゆらと揺れる九本の尻尾を備えたその姿は、「妲己(だき)」あるいは「玉藻(たまも)の前」とも称される傾国の大妖怪・九尾の狐そのものだ。

「なっ……」

「おいおい、この程度で日和んなよ。アタシの本気はここからだぜ」

そう、彼女の真骨頂は一番から九番の妖術が付与された武器にあるのだ。

「変化術(へんげじゅつ)・九々八十一式(くくはちじゅういちしき)ッ！」

突き出した尻尾の一本一本がそれぞれ、異なる武器の形へと変容していく。

一番・刀
二番・長槍
三番・大槌
四番・金棒
五番・砲筒。
六番・斧
七番・かぎ爪
八番・クナイ
九番・鎖

計九つ。ズラリと物騒な面々が彼女の前に揃えられた。

「三番ッ！」

四足獣の姿を取ったがために、変化させた武器を両腕で構えることは出来ない。それでも彼女は武器の柄を咥えることで、器用に大槌を構えてみせた。

夜間。そして制限を外された九尾本来の姿。それらの要因が重なり、九つの武器のサイズも

九尾の巨体でさえ持て余すほどにスケールアップされている。
『鋼一郎、分かっておるの？　梨乃の三番・大槌に付与された効果は』
イヤホンから響いたのは、白江の声だ。
「崩壊の妖術。掠めただけでも接触箇所の分子構成を崩し、金属や装甲を極端に脆くする――だろ？」
今の世界が視えている鋼一郎（こういちろう）ならば、大槌の一撃を鞘で受け流し、その喉元に刃を突き付けるまでの動作をカウンターとして組み上げることも容易であった。
それでも鋼一郎は素早く操縦桿を胸元へと引き込み、踏板（キックペダル）を蹴った。計四基の加速装置（ブースターユニット）が一八〇度回転し、逆噴射。十分な距離を保ったうえで、大槌を避わす。
「――――ッ！」
振り下ろされるのは轟雷のような勢いと、暴力的な質量の塊。大槌が叩きつけられた足元には蜘蛛の巣状の細かな亀裂が走った。
「チッ……避けやがったか」
大槌は強固な装甲を持つ凱機を一撃で破壊するための武器。鈍重かつ隙も目立つ大槌に敢えて崩壊の妖術を仕込んだのだって、カウンターを狙えるだけの操縦技量を持ちあわせる一級以上の祓刃隊員を狩るためだ。
それを鋼一郎は十分警戒して回避した。その動きは以前の反省を踏まえたというよりも、大槌の効果を確信したものに思えた。
「あぁ、そっか。……そうだよなァ。お前と組んでるのは、あの裏切り者の白江だもんなァ！」
梨乃の操る九つの武器と、それらに付与された妖術について。白江がそれを鋼一郎に教えていたって、おかしなことは何一つない。
《超火力を誇る五番・砲筒はまず撃たれないだろう。アレを撃つのにここは狭すぎる。ヤツの妖気エネルギーが尽きるまで増殖する八番・クナイも装甲を貫くには威力が足りん。この二つが使われることは、まずありえないと思っていけ》
「あぁ。寧ろ、今の俺が警戒しなきゃならないのは一番と九番だろ？」
手のうちは全てバレている。情報量のアドバンテージが廃工場の時と完全に逆転されていた。
「全部バレている？　だったら、なんだって言うんだよ？　全部、無問題（もうまんたい）さ！」
梨乃が歯を鳴らし、吠えた。残り八つとなった武器から、彼女は迷うことなく刀の柄を噛む。
「一番ッ！」
一番・刀。そこに付与された妖術の効果は加速である。
その刃を一度振るえば、彼女の速さは二乗。もう一度振るえば、さらにもう二乗速くなる。
彼女が選んだのは刃を振るうだけで、爆発的に加速し続ける武器だ。
《一番だ！　来るぞ、鋼一郎ッ！》

「わかってるッ！」
乾いた唇を舌先で湿らせ、ムラサメも間合いへと踏みこんだ。ブレードの切っ先を強引に押し込み、下から救い上げるよう、彼女の刃を押し戻す。
刀身は互いに噛み合い、チリチリと火花を散らした。ムラサメの馬力に対し、梨乃の咬合力と首元の筋力はやや勝るか、否か。それでも加速の一番を振り切らせるわけにはいかなかった。
「へぇ……」
全てが止まった見える世界はあくまでも、そう見えるだけに過ぎない。極端にすべての動きが遅くなるからこそ、止まっていると錯覚するのだ。もちろん、それは正面を切った戦闘に置いて、圧倒的なアドバンテージを獲得できることに変わりはない。――――ただ、何事にも例外は存在する。
彼女が刃を振り続ければ、いつかは擬似的に再現された「百千桃（ももちもも）の世界」でも追いきれないほどに速くなる。
それだけの加速を許せば、ムラサメの性能をもってしても対処ができない。音速を超えてソニックムーブを纏えば、巻き込まれた機体は容赦なくグチャグチャにされるだろう。
梨乃にとって一番・刀は、鋼一郎のB・Uを打ち破る一発逆転の切り札だ。だからこそ、鋼一郎も彼女の加速を強引にでも止めなければならなかった。止めた刃にさらに鞘を叩きつけ、力技で彼女を抑え込む。
けれど、それさえも梨乃の目論見通りだったとしたら、どうだろうか？
「まぁ、止めるよね……だってあたしの武器は全部知られてるんだもん」
ならば当然、ブラフの一つや二つ、張り巡らさないわけがないのだ。
梨乃がほくそ笑み、切り札であるはずの刀を吐いて捨てた。不意に力を抜かれたせいで、ブレードと鞘に力を加えていたムラサメは前方へと大きくバランスを崩す。
「しまった……!?」
「ハッ！　随分間抜けなリアクションだね。白江と仲良くしすぎて、忘れちゃったかい？　アタシら妖怪ってのはね、皆、狡猾なんだよッ！」
残り七つ。梨乃が選び抜いたのは九番の鎖だ。金属の輪同士が掠れあい、ジャラジャラと耳ざわりな音を奏でる。
「コイツに付与された妖術だって、もうわかってるんだろ」
鎖に付与された効果は必中。標的をどこまでも追いまわす追尾型の武器だ。
這うように迫る鎖は獲物を絡めとる大蛇の様に、ムラサメの両足を縛り付けた。
鎖の必中効果は何かと接触した時点で終了してしまう。本来であれば、いかに必中であろうと鋼一郎の刃に阻まれて、終わるだけ。だからこそ梨乃は一番の切り札をブラフに拘束を図ったのだろう。
「白江の言ってた最強の祓刃隊員……たしか、百千桃だっけ？　その人と戦ってもこんな感じだったのかな？　人の領域から外れた動体視力はたしかに面倒だった。けど、体の方が動けな

いんじゃ、怖くないんだよッ！」
「ぐッ……！　こんな鎖くらい」
「解かせるわけもねぇよなァ！」
梨乃の牙は肩部のブースターユニットの一つを食い千切る。そして畳みかけるよう、硬化した頭突きでムラサメの巨体を弾き飛ばした。
「がぁぁっ！」
リングの縁に叩きつけられると同時に、正面からは重力による負荷が、背後からは衝突による振動が鋼一郎を挟み込んだ。
こみ上げてくる胃酸には血の味が混ざっている。奥歯をかみ合わせ、意識を保つも額からはヘッドセットが大きくズレた。
「さぁ、そろそろ終わりにしようかッ！」
梨乃が選ぶのは、二番・長槍。彼女の妖気エネルギー糧に伸び続ける「延長の妖術」が付与された長射程武器だ。
放たれた槍の先端は無防備なムラサメを容易に捉えるだろう。コックピットに食らいついた切っ先は、装甲の曲面によって力のベクトルを逸らされるも、ムラサメの胸部を守る鉄板を残さず剥ぎ取った。
「……ん？　力の入れ方をミスったか？」
凱機の装甲に多く用いられる白聖鋼（はくせいこう）よりも固い。手ごたえの差に違和感を覚えながらも、梨乃は長槍を構え直した。
「次は外さない」

◇◇◇

沈黙するムラサメは、胸部のフレームを晒したまま動かない。長槍の切っ先はコックピットを覆う装甲の一枚さえも穿っていた。
入った亀裂からは、コックピットの中を伺い知ることが出来るだろう。僅かな隙間の向こう――白い髪をした妖怪はほくそ笑む。
「のう、梨乃よ？　勝ちを確信するのはまだちょーっと早いんじゃないか？」

30

ムラサメの開発過程には、数多の問題が立ちはだかった。
前代未聞のB・U専用機として、カメラ周りの強化や専用ヘッドセットの開発はもちろんこと、もう二つ、どうしようもない問題に直面する。
一つは圧倒的な出力不足。既存のエンジンを組み込んでも、ムラサメの出力は開発陣の求め

るだけの数値に達することが出来なかった。
もう一つは圧倒的な白聖鋼不足だ。
妖怪にとって猛毒になり得る白聖鋼は否が応でも、使いたい素材だろう。しかし、その入手ルートの確立することが出来なかったのだ。
仙道(せんどう)が引き抜いたメカニックたちの中には、白聖鋼を加工するノウハウを持つ人間も当然含まれていたが、そもそもの物がなければ話は進まない。
そんな問題を解決したのは、意外にも白江(しろえ)の零した何気ない愚痴であった。
「むむ……いっそワシの有り余る妖気を出力に転用出来たらよいのじゃが」
その一言から、妖気エネルギーを出力へと転用できる新たなエンジン「アヤカシドライブ」の開発。そしてエンジンに合わせた内部フレームの設計が見直されることになった。
目には目を。歯には歯を。妖怪には妖怪を。――――目指したのは白聖鋼を持たずとも奈切を打てるだけの決戦能力だ。
そうして完成されたムラサメには、廃工場で回収された二対の折れた夜霧(よぎり)をつなぎ合わせリーチを広げた大太刀、夜霧・改以外に一切の白聖鋼が使用されていない。その代わり、人間と妖怪の「同乗」を前提に完成された前代未聞のモンスターマシーンであった。

◇◇◇

「のう、梨乃(りの)よ？　勝ちを確信するのはまだちょーっと早いんじゃないか？」
鋼一郎(こういちろう)の背後。そこにずっと乗り合わせていた白江は大胆不敵に笑みを浮かべる。
「なッ……なんで、お前がそんなとこに乗ってんだよッ!?」
「何を驚く？　このムラサメは凱妖機(人間妖怪)。鋼一郎とワシが共に戦うための力じゃぞ！」
ムラサメの双眸が光を取り戻す。鋼一郎もヘッドセットを付け直し、踏板(キックペダル)に体重を乗せた。
「なぁ、白江。ここまでネタバラシをしたんだ。例のアレを試してみてもいいよな？」
「当然！　これはワシら二人の初陣じゃ。勝たねば拍子抜けもいいところじゃぞ！」
突き出した両腕の装甲がスライドし、噴け出された排気口からは白江の冷気が漏れ出している。
「「氷河造術(ひょうがぞうじゅつ)」」

ムラサメのエンジンに白江が余分な妖気エネルギーを流した場合、機体は内部からの爆発を防ぐために余分なエネルギーを即座に排出する安全装置が設けられた。
この安全装置の冷気放出機能こそ、ムラサメに不足していた決戦能力を補う最後のピースなのだ。
「させねぇ！　二番ッ・長槍ッ！」
「「冷表壁ッ！」」
白江の冷気は空気中の水分を瞬時に凍結。ムラサメの全面を覆い隠すよう、氷のバリケードを形成し、迫る長槍を阻む。
「この馬鹿みたいに分厚い氷は白江の……ッ！」
白江の妖術には手数の多さや応用力はない。それでも内包する妖気エネルギーの総量と一芸に特化した術の練度は他の妖怪の追随を許さずにいた。
B・Uのポテンシャルを極限まで引き出し、妖術さえも操るのが、ピース同士の噛み合ったムラサメ本来の性能であった。
「「さぁ、反撃開始といこうじゃねぇか！」
ムラサメの剛腕は両足に巻き付いた鎖を引きちぎり、立ち上がる。夜霧・改と鞘を両腕に梨乃と対峙した。
「忘れんな……アンタがアタシの武器を知り尽くしてんなら、アタシだってアンタの氷遊びくらい全部知ってんだよッ！」
梨乃の尾からも武器が消える。代わりに武器の形を維持し続けていた妖気エネルギーの余力が尻尾の先端に集中した。
「「氷河造術・飛斬ッ！」」
「紅蓮操術・弾ッ！」
刃を振ることで発生する風圧に冷気を乗せて放つ斬撃、飛斬。
高密度に圧縮した業火を放出する、弾。
互いの妖術はほぼ互角だ。炎によって氷は蒸発。視界は吹き上がる高温のスチームによって覆い隠される。
一面が白に塗り潰された世界で、梨乃は火種を大きく広げていた。
「……紅蓮操術・幕」
広範囲を覆いつくす炎ならば、白江がどんな形の氷を作ろうと溶かすことが容易だった。
妖気エネルギーの残量と妖術としての練度を競うのなら、軍配は白江に挙げられるだろう。
しかし、相性でいえば有利なのは梨乃の方だ。
炎で氷を溶かしてもいい。崩壊で完成された氷の分子結合をグチャグチャにしたって良い。

小賢しい白江の性格なら自分が誰より知っている。
作り出す氷の種類とその性質もすべて知っている自分なら、彼女に勝てる。
「アタシを舐めるなよ」
揺るがない確信に梨乃の口元を緩める。
だが、彼女は気づいていなかった。自らが牽制のために広げた業火のカーテンが自分の視界を遮る目隠しになっていることに。
「――――俺たちを舐めてんのは、テメェのほうだろッ！」
鋼一郎が咆哮が空気を震わせる。
ムラサメの刃は横一文字に切り裂くだろう。凱妖機の装甲は赫灼の炎さえ通さない。焔の中を突っ切て、鋼一郎は彼女の喉元へと蒼白に輝く刃を滑り込ませた。

31

「なっ……！」
猛毒である白聖鋼（はくせいこう）の刃は喉元に迫る数ミリで静止した。張り詰めた空気に会場は静間へと変える。
「……どうして止めるんだ？　……アタシは隊員殺シの九尾だぞ？」
「お前こそ何度も同じことを言わせんなよ。俺たちはお前に仲間になってほしくて尋ねに来たんだ。それにお前は白江（しろえ）の友達なんだろ？」
梨乃（りの）の身体から一気に力が抜けた。妖気エネルギーを極端に使い過ぎたゆえに起こる貧血症状のようなものだ。全身は空気の抜けた風船のように小さくしぼみ、元の人間に酷似した姿へと戻ってしまった。
彼女はそのまま、大の字になって寝転がる。
「ぐっ……畜生……」
「なぁ。お前……梨乃って呼べばいいんだよな？」
視線を上にあげたなら、そこには鋼一郎（こういちろう）が立っていた。ムラサメから降りてきたのだろう。
彼は何故だか恥ずかし気に目を逸らし、自らの羽織っていた上着を放った。
「なんのつもりだよ？」
「……えーっと。……大きくなるときに、服全部脱いだろ……だから……」
言わんとすることがわかった。たまらず顔がカッと熱くなり、すぐに前を覆い隠す。
「べっ、べつに、恥ずかしくなんてないからなッ！」
「いや、無理があるだろ！」

乗り慣れていなかったコックピットに苦戦しつつ、白江も遅れて降りてきた。彼女は鋼一郎に駆け寄るなり、その脛を思いきり蹴り上げる。
「ふんっ！」
「痛ッてぇ！　えっ……待て……なんで、今蹴られたんだ⁉」
「分からぬか、変態めッ！　梨乃のおっぱいを凝視しよってからにッ！　やはり、大きいのがいいのかッ！　大きいのがッ！」
ちらりと自分の胸元と梨乃の胸元を見比べ、白江は鋼一郎を睨んだ。
頬をめいいっぱいに膨らませ、さらに二度、鋼一郎の脛を蹴りつける。
「痛いッ！　痛いッ！　というか、俺は凝視なんて！　だいたい、なんで裸を見られた梨乃よりお前の方がキレてんだよッ！」
「言い訳無用じゃ、このド助平の変態野郎め！　乙女心の分からん、大バカ者め！」
「なんだよ、乙女心って！　お前、とりあえず、それを理由にすれば、俺を蹴っていいと思ってんだろ！」
やいの、やいの、と言い合う二人を見て。梨乃の表情は何故か、自然と緩んだ。
「……あぁ、こりゃ、確かに勝てないかもな」
鋼一郎と白江は二人で戦っていたのだ。互いの力をひとつの機体に乗せ、梨乃に挑んできた。
それなのに自分は、頑なにどちらか一人しか見ようとしなかった。
「……認めたくねぇな」
「「ん……？　なんか言ったか？」」
言い合っていた二人がほとんど同時のタイミングで振り替える。本当に認めたくないものだ。
「アンタらは人間も妖怪も関係なしに力を合わせたろ？　けどアタシはそれを認めたくなくて、お前らの片方としか戦おうとしなかったんだ。……認めたくないから。……お前らが羨ましいと思っちまったから」
梨乃は自嘲気味に笑みをまぜて、そう呟いた。
瞳を閉ざせば、じわりと熱を帯びた。思い出すのは、もう随分と昔のことだ。
「……アタシにもさ、人間の恋人がいたんだよ」
その告白は、幼少より親しかった白江でさえ知らなかったことだった。当然、二人は驚く。
「ちょっ！　ちょっと待て！　ワシ、そんなこと聞いたことないんだがッ！」
「言ってないからな。どうせお前は茶化すだろうし。……それにアタシは三柱の娘なんだ。言えるわけもないだろ。あの頃も今と同じで陰陽師どもと妖怪がバチバチに殺し合ってんだから」
「陰陽師と殺し合っていた頃……ということは、お前さんの恋人はもしや！」
「そうだよ。そんなご時世だってのにアイツはアタシといてくれることを、アタシと戦ってくれることを選んでくれた。作り物の角をくっつけて、妖怪のフリまでしてな」
梨乃は鋼一郎の方へと視線をずらした。そして、懐かしものを見たように笑みを零す。
「どことなくアイツはお前に似てたよ。馬鹿で無茶で、それでもまっすぐなヤツだった。……まぁ、顔の方はアイツの方が断然イケてたけどよ」

「おい……最後の方はいらなかったろ」
「いいや、一番大事なことだね。アタシは面食いなのさ」
梨乃は鋼一郎から貰った上着を羽織り、ゆっくりと立ち上がった。
「……やっぱり、アタシは考え方を変えられない。アタシやここにいる皆から大切な人を奪った人間どもは大嫌いだ。許すことなんてできないだろうし、奈切（なきり）との因縁も妖怪だけでケリをつけるべきだとも思ってる。……だってそうだろ？　人間の中には、お前やアイツみたいなやつがいることをアタシは知っちまたんだから」
それが犬飼（いぬかい）梨乃の本心だった。大切な誰かを護りたい。誰かに傷ついてほしくない。曝け出された本心は二人が戦う理由と何も変わらなかった。
「……けど、そうだな。……こんなの認めるしかねぇよな」
彼女は大きく息を吸いこんだ。総勢三百人の妖怪を従える長として、この場に居合わせた全員に呼びかける。
「人間と一緒に戦うなんて、お前らはきっと納得できないことも分かってるッ！　アタシだって、お前らの気持ちはよくわかるんだ」
「ただ、お前らも見ただろ？　コイツらは本気でアタシら妖怪と人間の、その両方のために戦おうとしてやがるッ！」
「だから、頼むッ！　アタシと一緒にこいつらと、人間と一緒に戦ってはくれないかッ！」
梨乃の呼びかけに妖怪たちは困惑するだろう。互いに顔を見合わせ、意見を交わす。
しかし、一人の声が皮切だった。
「俺たちは姐さんの元に集まったんだッ！　姐さんがそう言うんなら、俺たちは姐さんと白江の嬢ちゃんに、それから、尺ではあるがそこの兄ちゃんについていくぜッ！」
声を上げたのは、玄関で二人を出迎えた坊主頭の見上げ入道だ。
一人の声が二人の声へ、二人が三人の声へと。熱に充てられたように、声は次第に大きさを増していく。
鋼一郎と白江の肩からも力が抜けるだろう。
「なんとか、決戦にも間に合いそうだな」
「そうじゃの。あとはムラサメの修理と、内通者の炙り出し。それを早急に済ませて、新たな策を練らねば」
梨乃自身や彼女の傘下には嘘を見破ることのできる妖術を持つものもいる。彼女たちが仲間になってくれたのなら、じきに内通者も判明するはずだ。反撃のために必要なピースは確実に揃い始めていた。
「よろしく頼むぜ、梨乃！」
鋼一郎が彼女へと手を伸ばした次の瞬間――――それは赤黒い光を放つ熱線だった。その一本が梨乃の左胸に穴を穿つ。

32

「は……？」

鋼一郎は目の前の光景を理解できずにいた。熱線が梨乃を貫き、彼女は血を吐きながらくるりと一回転。糸が切れた人形のように、その場へ倒れこむ。

鋼一郎だけではない。この場に居合わせた誰もが、この光景を理解できずに静止した。

いや。誰もがこの状況を理解できないというのは語弊かもしれない。

「紅蓮操術・弾ですか……炎を集約し撃ち出すっていう発想は悪くないんですけどね。彼女では圧力が足りな過ぎて、せっかくのエネルギーが分散されてましたから。実戦で使うなら、このくらいは圧縮して、貫通力を与えないと」

この状況を作り出した人物ならば。この場にいる誰もが気を緩める一瞬まで息をひそめ、ドンピシャのタイミングで梨乃を打ち抜いたならば人物ならば、この状況を誰よりも理解できているはずだ。

「幕にしたって、自ら視界を塞いでしまうのはナンセンスですよね。いや、それは氷河造術・冷表壁も同じですか。面の妖術はもっと工夫しなきゃって、千年前に教えたはずなんですけど。……まぁ、いいでしょう。くっく……うくくっ。なんにせよ、ようやく忌々しかった三柱どもの忘れ形見の一人を消せたんですからねぇ！」

はじめは押し殺すような笑いだった。しかし、その笑い声は次第に大きくなっていく。最後には一人、ゲラゲラと笑い声を隠そうともしなかった。

その声を鋼一郎は知っている。

「なんで……」

わざとらしいとさえ感じてしまうようなオーバーリアクションと、その裏に隠した本性を鋼一郎は知っていた。

「なんで……なんで、テメェがここに居やがるんだァ！」

妖怪たちがひしめく観客席の一角に男は平然と紛れ込んでいた。白いビジネススーツに真っ黒な影を霧のようにして全身に纏わせた妖怪としての姿を晒し出し、その口の端を歪なまでに釣り上げる。

「――――奈切総一ッ！」

「じゃーんっ……ラスボス見参ってやつですよ！」

奈切はこれ見よがしに両腕を広げて見せた。開いた掌には妖気エネルギーが迸る。

「質問は何故僕がここに居るかでいいんですね？　ただ、それを語る前にちょっと失礼させて貰いますよ」
造形術（ぞうけいじゅつ）・固金（かがね）。短くそう唱えれば、小さな金属片が現れ、それが銃の形を成す。梨乃が武器を形成するのには自らの尻尾という触媒を必要にしたのに対し、奈切はゼロからの構築だ。
自ら作りあげた銃を握りしめ、それをコンパクトな動きで構えてみせる。
「ネタバラシの最中に攻撃されちゃうと、説明を中断しないといけませんし。とりあえず、周りだけでも」
「待てッ！　よせッ！」
「それで聞いてもらえたことがありましたか？」
鋼一郎の静止を嘲るように。周囲を取り囲んでいた妖怪に向けて、発砲。スライドが跳ね上がり、十八発の中が空っぽになるまで立て続けに引き金を引き続けた。
奈切は真っ白だったスーツを赤黒く染め、瞳を細める。その表情にはネジくれた悪意が滲んでいた。
銃弾程度では死なないのが妖怪だ。それでも、凶弾に倒れた妖怪たちは一向には起き上がらない。苦しみ、痙攣を起こしたまま動かなくなる。
その症状は祓刃（はらいや）であれば、嫌というほど目にしてきただろう。
「まさか……その弾は」
「ご明察。純度百パーセントの白聖鋼（はくせいこう）ですよ！　そもそもですね、自然界に妖怪だけに効く猛毒の金属なんてありませんからね。あれも実は僕の妖術で作ったものなんですよ。致死性を高めるためにテトロドトキシンなんかを参考にしたりしましてね」
「だからこの場で白聖鋼を形成し、銃弾に仕込むのも簡単ってわけかよッ！」
「そういうことなのです！　あっ、さっき九尾を貫いた熱線にも当然、微粒子程度に小さくした白聖鋼を混ぜておきましたから。念には念を入れなきゃなりませんよね？」
警戒心を強める鋼一郎に対し、奈切は薄ら笑いを絶やさない。
自ら撃ち殺した妖怪の一体を足蹴に、リング上の二人を見下ろした。
「おっと、いけない。多弁なのは僕のダメなところですね。教えたがりが過ぎるあまり千年前も殺されかけたんですから。余計なことは置いておいて、君の質問に答えなければ。『どうして僕がここに居るか？』でしたよね」
そうだ。なぜ、奈切総一はここに居る？
変装でも変化でも、梨乃の生活圏（コロニー）内に紛れ込む手段は幾らでもあるだろう。それでも奈切は今日、この時間に鋼一郎たちがここに現れることを知らなかったはずだ。内通者には細心の注

意を払った。白江(しろえ)たちが内通者だったなんてことはありえないはず。
それなのに奈切は現れた。ここで鋼一郎と白江に対面しながらも、驚かなかったのは、こちらの動きがはじめからすべて筒抜けだったせいだ。
「うーん、そうですね。物事というのは往々にして様々な因果が絡み合ったゆえの結果に過ぎませんから、何処から話せば答えになるのやら、」
ふと、奈切は言葉を止めた。あることに気づいてしまった、奈切はまたクツクツと笑い声を押し殺す。
「それにしても、幸村(ゆきむら)白江に克堂(こくどう)鋼一郎ですか。五百年前に三柱の末裔であった大天狗の坊ちゃんが勝手に首を括って、九尾の犬飼(いぬかい)梨乃もここに倒れた。だから最後に立ちはだかるのは、やはり君らになっちゃうんですよね。三柱の一柱・幸村家末裔、幸村白江。そして、モモちゃんが最後に残した隠し刀、克堂鋼一郎。……ほんとっ！　忘れ形見ほど怖いものはないなァ！」
なんとなくではあるが、白江が三柱の縁者であることには察しがついていた。妖怪の事情に深く精通し、同じく三柱の縁者であった梨乃とも対等であった。だから、いまさら彼女が三柱の縁者であると明かされたって驚きは少ない。
鋼一郎が困惑したのはそこじゃない。
「モモちゃん……だと？　随分と桃(もも)教官を慣れ慣れしく呼ぶんだな」
「うっわ、露骨に怒っちゃいましたよ。けど、おかしなことなんてありませんからね――だって、百千桃(ももち)を育てたのも、百千桃を殺したのも、この僕なんですから！」

33

「僕だって、千年は生きてるんです。子供の一人や二人、いたっておかしくはないでしょう？」
百千桃(ももちもも)――本名、奈切(なきり)桃。
奇才と畏怖される少女の正体は、奈切総一(そういち)が実験的に創り出した存在であった。
「モモちゃんはすごいんですよ！　僕の『不滅の妖術』を不完全ながらも引き継いでくれた自慢の娘です！」
桃の肉体は人間と同様に成長し、朽ち果てる。しかし、彼女の肉体は外傷以外に滅びることを知らない。一度朽ち果てた肉体は彼女の人格と記憶を引き継いだまま逆行を始めるのだ。
「お婆さんになったら、次は赤ちゃんになって、またお婆さんになる。彼女はそうやってグル

グルと循環を繰り返しながら、よく親孝行をしてくれました。ある時は陰陽師として、またある時は祓刃(はらいや)隊員として。本当に父親想いのいい子だったなぁ。僕に降り掛かる火の粉は代わりに全部彼女が払ってくれたんですから」

奈切はそれを、いかにも美麗な思い出であるように語った。

対して、鋼一郎が覚えたのは底しれない嫌悪感だ。聞いていて、ここまで耳が腐ると感じたことがあっただろうか？　吐き気がこみ上げ、脳が情報の上書を拒否した。

だからこそ、鋼一郎はそれを強く否定する。

「嘘だッ！」

「嘘じゃない。モモちゃんは僕の可愛い娘さ。ほら、目元とか、鼻の形とか、ちょっと似てると思いませんか？」

「そんな戯言、誰が信じるかって言ってんだよッ！　だいたい、桃教官を殺したのはテメェじゃない。あの腕の妖怪だったろうがッ！」

それは鋼一郎が自分の記憶の中から見つけ出した、唯一の反論材料だった。しかし、奈切はそれさえも嘲けてみせる。

「あっ……そっか、君らはまだ知らないんでしたっけ？」

奈切が自分の両腕を交互に軽くなぞったのなら、そこから黒い金属質をした外殻が彼の腕を覆っていく。

鋭利さと堅牢さを併せ持つ外殻の腕。それは鋼一郎の記憶にあった、あの腕をそのまま奈切の腕に合うサイズへスケールダウンしたものだった

造形術によって構築されたそれは、大きさも遠隔操作も思いのままの手甲である。

「殺した理由も単純。モモちゃんが僕を裏切ったから。ちょうど君が彼女に拾われた頃でしたっけ？　あの頃から、僕は不信感を覚えるようになって試しに盗聴器を仕込んだんです。妖術だと気配で勘付かれるから、小さな備品に紛れ込ませてね」

「……黙れよッ」

鋼一郎が吠えた。

「そしたら見事にビンゴっ！　だから僕もすごーくショックだったんですよ。……けど僕だって、死にたくはないんでね。訓練生と一緒ならモモちゃんはまず君たちを守るでしょうし、外殻をアカツキの武装と出力で壊せない固さに設定しておけば、機体を自爆させてでも勝ちに来るのがモモちゃんです。だから、あとはタイミングを見計らって遠隔操作で機体をボカン！　こんな感じです！」

「黙れ……黙れよッ！　それじゃあ、まるで桃教官の命がずっとテメェの都合がいい様に弄ばれてたみたいじゃないかッ！」

鋼一郎が強く吠えた。

自分が脳と瞳を使い潰してまで追い続けた真実が、ここまで胸糞の悪くなるようなものだとは思ってもいなかった。

だからこそ、それを否定するため、歯を剥き出しに強く吠える。
「おかしいですね、君はずっと僕を探していたのでしょう。仇であるこの奈切総一を。だったら、もっと喜ぶべきじゃ……あっ、そうか！　分かりましたよ、君が怒っている理由が！　いやぁ、やはり多弁は僕の悪い癖です。君は僕が初めの質問に答えてくれないことに怒っていたんですね」
違う。そんなこと、今はどうだっていい。
妖怪である白江や、自分を殺そうとした梨乃と分かり合えたように、奈切ともどこかで分かり合えるのではないか？　鋼一郎はいつのまにか、そんな期待を抱いていた。
だが、淡い期待は一瞬として泡に消える。目の前に立つ絶対悪。奈切総一は紛れもない鋼一郎たちの敵だ。
「では、ネタバラシです！　僕がここに居る理由！　気になる内通者の正体とは！」
奈切の指先が鋼一郎の首元へと。そこに付けられた徽章へと向けられる。
形見として鋼一郎が絶対に手放そうとしなかった、あの溶け落ちた徽章だ。
「それなんですよ、僕がモモちゃんに仕込んでた盗聴器って。つまりはですね。数日前に、幸村の仲間を全部潰せたのも！　僕が今日ここで、君たちを全部まとめて一網打尽にできるのも！　全部はモモちゃんと、その形見を大事にしてくれた君のおかげなんですよ。内通者、克堂鋼一郎くん！」

34

「鋼一郎……大丈夫か」
呼吸を荒くする鋼一郎（こういちろう）に白江（しろえ）が問いかける。彼女の声には気遣いが混在していた。
「……大丈夫だ。……問題ない」
短く答えた言葉に嘘はなかった。現に鋼一郎の思考は澄み切っている。
感情が波立つものならば、激情で蒸散してしまった水面は揺れ動かない。怒髪天はとうの昔に突き抜け、地雷は強かに踏み抜かれた。
「いくぞ、白江ッ！　いま、ここでヤツを倒して全部終わらせてやるッ！」
手の中で端末を弾けば、遠隔操作でムラサメが鋼一郎たちの前に伏せる。
目立った損傷は食い千切られた肩の加速装置（ブースターユニット）と、胸部を保護する装甲だけだ。機体は万全に動く。加えてここには梨乃（りの）の仲間たちも居合わせているのだ。武装も数も有利はこちらにある。
「やっぱり君は蛮勇ですね。僕はこれでも君のことを買ってたんですよ？　優秀な祓刃（はらいや）隊員として妖怪殲滅のキーパーソンになってくれると」

「あぁ、そりゃどうもッ！」
エンジン回転数・正常。カメラにも不調無し。
「最大出力で行くぞッ！」
「任されたッ！　加減はせぬからなッ！」
白江が妖気供給用のコードを握りしめれば、機体のエンジンが心臓の様に大きく跳ねた。メーターに表示される数値からはトルクが数段上がっていることが伺える。
機体は立ち上がり、そのブレードに冷気を纏わせた。
「「造氷術（ぞうひょうじゅつ）・砕牙（さいが）ッ！」」
それは刃の先端に触れた標的を即座に零下二〇〇度まで冷却、防御を破壊し刃を通す突き技の奥義だ。
一筋の銀線が、濃淡な黒を穿ってみせた。
「あっ、そっか。幸村（ゆきむら）一族は雪女。なら、単に固いだけの外殻じゃ、砕かれるますよね」
加速する尖刃は、剥き出しになった奈切（なきり）の前腕を掠めた。鮮血は舞い散るも、切り口は浅い。
それでも確実に白聖鋼（はくせいこう）の猛毒は送り込めたはず。
「獲った！」
「いや、浅すぎる！　白聖鋼も奴本人が作ったものならば、効きも悪いはずだ！」
白江の指摘は的を得ていた。奈切には白聖鋼の毒性による血圧低下やチアノーゼの病状が視られない。
それを指し引いても、十メートル前後のムラサメに対し、奈切の身長は一八〇弱。巨体故のアドバンテージに加え、B・Uの動体視力だってある。
「危ないですねぇ。いくら僕が不滅でも当たったら、痛いんですからねッ！」
それなのにムラサメの刃は奈切を掠めさえできなかった。
単なる術頼りではない。卓越した足さばきと適確な体重移動。奈切本人の持ち合わせる格闘センスがすこぶる高いのだ。静止した世界で敵の予備動作からある程度の動きを予見する鋼一郎にとって、回避の挙動をコンパクトにまとめた奈切は最悪な相性であった。
鋼一郎たちの猛攻に梨乃の仲間たちも続くだろう。全方位から攻める妖怪たちを避わすのは、まさに針の穴に糸を通すような所業だった。
しかし、それをやってのけるからこそ、千年間誰もが奈切を討つことが出来なかったのだ。
「目線と殺気が素直すぎるんですよ！」
造形術（ぞうけいじゅつ）・固金（かがね）。
「来るぞ、鋼一郎ッ！」

今度は奈切の右腕と脇腹を外殻が覆うだろう。そのまま挟み込むようにムラサメの振るう刃を抑え込んだ。
「さっきの突きが僕の外殻を砕けたのは、あくまでも冷気の一点集中ゆえ。刃に冷気を纏わせることはできても、中途半端な冷気では僕の外殻は砕けない。――――多分こういうことですよね？」
「ッ……！」
使える妖術の幅が広いだけでなく、本人の洞察力や観察力が高い。これは梨乃と奈切に共通する点であろう。
しかし、幅広く妖術を使うだけの梨乃と、その妖術を作った奈切では根本的な理解度が違う。
「それにしても、よく考えましたね。妖気エネルギーを凱機（がいき）の動力に転用するとは」
固定された刃を引き抜こうと、操縦桿に力を籠める。それでも外殻同士の隙間に噛まれてしまった刀身はピクリとも動かない。それどころか軋むような音とともに刀身にヒビが走った。
「だったらッ！」
鞘で殴りつけようと剛腕を振るうも、奈切は軽く顎を引くだけで避けてみせる。
「B・Uと妖術の使用もできるとは、まさしく人間と妖怪の集大成。凱妖機（がいようき）というネーミングも悪くないですね。僕も初見なら。増してパイロットがモモちゃんなら、危なかったかもなぁ！」
「けど」と、その顔に幽鬼のような浅い笑みを浮かべた。
ヘッドセットの向こうにその表情を見た鋼一郎はたしかな寒気を覚えた。
「崩壊術（ほうかいじゅつ）・沈（ちん）」
奈切が足元に触れた途端、そこが流砂上に崩れた。
ムラサメの弱点は足元を取られること。これだけでムラサメはB・Uによるアドバンテージを喪失する。
「犬飼梨乃（いぬかいりの）との勝負を最後まで見ていた甲斐がありましたよ。鎖というのは非効率ですが、そこから得られるものも多い。いやぁ、ほんと中断させずに見届けてよかったですよ」
ムラサメは動けない。動こうと足掻けば、足掻くほどに機体は地の底へと沈み込んでいく。
「クッソ！　白江、足元を凍らせて何とかできないかッ！」
「やっておる！　けれど、排気口にまで砂が入ってしまったようじゃ……これでは満足に冷気が放出できぬ！」
奈切は、襲い来る梨乃の傘下たちを屠りながら、一歩、また一歩と近づくだろう。
いくら奈切と言えど、白聖鋼の毒性は無視できない。だからこそ、毒が全身に回る前に、自らの腕をそのまま引きちぎる。
失った腕を元に戻すのは妖術でも困難だろう。しかし、奈切が宿すのは完璧な不滅の妖術だ。

決して滅びることを知らない肉体は即座に筋繊維の一本までを、精密に再現し直した。
「それが不滅か……再生までの時間はざっと数秒ってところかよッ！」
鋼一郎も冷静に情報を分析する。
「あれ、ここまで見せても戦意が折れないんですか？　普通、諦めません？」
「諦めるわけがねぇだろッ！　俺たちがここで倒れたら何も変わらねぇッ！　白江や梨乃が戦い続けた意味がなくなっちまうんだッ！」
鋼一郎は目を凝らす。何かあるはずなのだ。何か逆転の手段が――――
「ありませんね、そんなご都合主義」
奈切の手がムラサメの装甲に触れた。熱も氷も、森羅万象を操る五指がムラサメを捉えた。
「はい、ゲームオーバーです。けど、まぁ、最後まで頑張ったんですし、最後に面白いものを見せて終わりにしましょうか」

35

「――転移術・盤」
その妖術の発動条件は標的に触れること。奈切だけに操れる高度な妖術は空間さえ超越する。
ぐにゃりと歪む空間に乗り物酔いのような吐き気と不快感を覚えるだろう。
閉ざした瞳を開いた二人の眼下。そこには一面の柄沢市が広がっていた。

二〇二八年　八月五日　午前零時
東京都　柄沢市・上空

「なっ……なんじゃこりゃぁぁ！！」
「奈切めッ！　こんなこともできたのかッ！？」
高度数百メートルから宙ぶらりんに。上空へと放り出されたムラサメは万有引力に逆らい固定される。これもすべては奈切の妖術が成す御業だ。
上空からは柄沢市の全てが伺えた。祓刃の基地も。ホテル・グランドからさわも。逃げ込んだ廃工場や、梨乃が隠れ家に使っていた北沢組の邸宅さえも。
遮蔽物のない上空からは、ムラサメの高性能なツインアイを全てを見渡すことも容易であった。

「衛星写真みたいで、迫力も十分でしょう？」
振り返れば、そこには奈切が立っていた。
さも、空中に立つことが当然でもあるように、口の端を歪めてだ。
「なんのつもりだッ！」
「言ったでしょう？　最後まで頑張ったで賞です。右手に見える、君たちの隠れ家をご覧ください」
そこにカメラのフォーカスした二人は息を呑んだ。
「僕は今夜、君たちを一網打尽にするんだ。仙道和樹（せんどうかずき）や夏樹由依（なつきゆい）も、生かしては返しませんよ」
列をなすのは無人機・百鬼（ひゃっき）を乗せたトレーラーだ。各トレーラーに二機ずつ。五十台のトレーラーが山中に隠されたガレージを目指す。
「あのときの一つ目野郎……それがなんて数だよ」
百鬼と交戦した鋼一郎（こういちろう）だからこそ分かる。たった一機の百鬼ですら、ホテルに甚大な被害を与えた。それが何の抵抗の術を持たない由依たちのもとで暴れたのなら？　結末は想像するまでもなく悲惨なものだった。
「文字通りの百鬼夜行です。ね？　面白かったでしょう？　今日ですべての妖怪たちは駆逐されるんです。君たち人間の望むハッピーエンドですよ！」
「なにが……なにがハッピーエンドだッ！　そんなことさせるわけがねぇだろうがッ！」
すぐに由依たちに逃げるよう伝えなければッ！　しかし、ムラサメに備わった通信範囲では鋼一郎の声は届けることができない。
そもそもムラサメが宙づりにされているのは、奈切があの光景を見せつけるためだったのだ。
「――それでは、一足に先にさようなら」
妖術は解かれ、ムラサメの身体は自由になるだろう。
そして、今度は待ちに待ち侘びた重力たちがムラサメのコントロールを奪う。
「かっ……ッ！」
高度から落下に伴い身体を襲うのは、多大なGと酸欠症状だ。機体は空中分解を起こし、脆い装甲部がはらはらと崩れる。利き方向である右腕が接合部から引きちぎれ、爆散した。
今のムラサメはくしゃくしゃにされた紙細工より脆い。
「……畜生ッ！　……畜生ッ！！　上がれッ！　上がれよッ！」
踏板（キックペダル）を踏み込んだところで、ムラサメの推力は自重を浮かせられるようには設計されていない。残された三基の加速装置（ブースターユニット）は黒煙を漏らす。
「――――のう鋼一郎よ……高所からの落下。お前さんがやった、無茶を思い出すな」

白江がぼやくように口を開いた。
確かに状況こそ、ホテルで飛び降りたときに似ている。しかし、それは生還の算段があった上に、飛んだ距離も今の比ではない。
だが、そんなことは白江自身が一番わかっているはず。だから、彼女は不敵に笑って見せる。
「お前さんに習ってワシも今から無茶をしようと思う。今から十分！　ワシは使い物にならんッ！」
白江がきつく妖気供給用のケーブルを握りしめた。
「待て、白江ッ！　お前、何するつもりだよッ！？」
「操縦桿を離すなッ！　一か八かという奴じゃよ……上手くいったなら、ワシが意識を取り戻すまで、場をつないでくれッ！」
文字通りのありったけをムラサメへと注がれる。エンジンが焼き切れるリスクは七割弱。それでも、賭ける価値があった。
「――――氷河造術・奥義・千年氷楼閣ッ！」
体内に循環する妖気エネルギーを最後の一滴まで絞り出したのだろう。ムラサメの全身から冷気が溢れた。
現在の湿度は五十パーセント。十分に多湿でもあった。
「条件は揃っておるんじゃ……頼む、桃よ。ワシに力を貸してくれ」
溢れた冷気は空気中の水分を絡めとり。彼女の妖気が作り上げたのは、天に向かって伸びる数百メートルの氷の柱だ。その柱が落ち行くムラサメを受け止めるだろう。

36

氷河造術・奥義・千年氷楼閣はあくまでも白江が、地面に叩きつけられていたであろうムラサメを受け止めるために築いた氷塊に過ぎない。故に用途を果たした氷塊は脆く、ゆっくりと溶け落ちていくだろう。
着地時に多少の衝撃はあれど、吸振機の伸縮で十分に対応できる。
「白江。悪いな、無茶をさせて……」
機体の出力は明らかに低下する。
そして後部座席に座る白江はぐったりと項垂れて動かなくなった。この一瞬であまりにも多くの妖気エネルギーを彼女の体から消耗させてしまったせいだ。
「クッソ……！」
鋼一郎のなかに苛立ちにも似た歯痒さが募る。だが奇しくも、この一手は戦況の空気を変え

る要因になり得た。
白江の出力は奈切(なきり)の想定さえも超えていたのだ。
「マジですか……なんですか、今の馬鹿でかい氷は？」
奈切が軽やかに着地する。しかし、その表情から薄ら笑いは消えている。あからさまに警戒心を強めたのだ。
千年氷楼閣とは、その名が示す通り白江が千年にわたり秘めてきた最後の切り札だった。
奈切にとって、もっとも警戒しなければならないのは、間違いなく自らを幽閉することのできる三柱の玉だ。その使用条件は標的がある程度の負傷を追っていること。奈切は不滅であって、無欠ではない。一度深手を負ってしまえば、再生が完了するまで数秒間は三柱の玉の発動条件下に捕らわれてしまうリスクが付きまとう。
よって次点に奈切は自分に大きな損傷を与えることのできる大技と、それに繋がる拘束技を異様なまでに警戒するのだ。
氷河造術の奥義はその後者に該当した。白江の体内を循環する妖気エネルギーの相性が、奈切の開発した妖術の一つである氷河造術とあまりに噛み合ってしまったがために、想定以上の威力を叩き出したのであろう。
リスクも膨れ上がるが、その用途を落下からの生存策でなく、攻撃とし放っていたのなら奈切に大きなダメージを与えることだってできたはずだ。
「恐らくは今のは妖気エネルギーを全部使っちゃう、下手したら命さえ削るような大技なんでしょうね。驚いちゃいましたけど、連発もできないはず。インターバルは二十……いや、十分程度でしょうか？」
奈切はそれを簡単に見透かした。
「アタリなんですね？　それなら――――」
これ以上、鋼一郎たちを生かす理由を奈切は持ち合わせていない。その全身に外殻を纏わせ、武装する。
単なる外殻が全身を保護するだけじゃない。幾重にも外殻同士が折り重なり、より堅牢な鎧として奈切を庇護するのだ。そうして作り上げられるは十メートル前後の巨大なシルエット。
目には目を。歯には歯を。妖怪には妖怪を。
ムラサメが奈切と渡り合うのに白聖鋼(はくせいこう)ではなく妖術を選んだように、奈切もまたムラサメを壊すためにムラサメの姿を模す。
「過剰造形術(ぞうけいじゅつ)・骸妖鬼(がいようき)・ソラナキ式」
重ねられた外殻の一枚一枚には生物らしく不揃いさがあるというのに、機械的に揃えられた左右のバランスは均一であった。その背に太陽を模したリング状を備えた様は禍々しくあると同時に神々しくもあるだろう。

様々な要素を張り合わせたその歪な姿こそ奈切の短期決戦形態であった。
「僕はこの十分間であなた方を殺します」
さながらツギハギのモンタージュのような外殻で全身を覆い、奈切は宣誓する。
殺す――珍しくもない脅し文句だ。だが、何の悪ふざけもなく奈切が向けるそれでは感じる圧がまるで違っていた。
作り上げたソラナキ式のなかで奈切はまっすぐに標的を見据える。そして瞬きの間で互いの距離を席巻した。
「ちょっと慣らしがいるんですよね、コレッ！」
意図的ではなく、ほとんど本能と恐怖から回避を強いられた。思考の余地もなく自らの警笛に従って飛び退くも、横一文字に振るわれた手刀は容易に肩部の加速装置を切り裂いて見せた。
「四割といったところでしょうか」
ソラナキ式の凶刃はさらにムラサメを掠めた。過去にこれほどまで十分という時間を長く感じたことがあっただろうか。奈切は本気だ。本気で屠殺しようと、あの姿を選んだのであろう。
対してムラサメは利き腕を失っている。それどころか白江が気絶しているために、機体内に僅かに残された妖気エネルギーでしかこの鋼の身体を動かすことができない。
「クソッ！」
加えて、落下したのは大通りのド真ん中だった。幸いにも人通りはない。しかし、遮蔽物の一つもないこの路上では時間を稼ぐこともできない。
最悪だという点だけが類似したこの状況。それは鋼一郎の中で、嫌でも二年前のあの夜を想起させた。
はっきり言って、奈切を相手に十分間を稼ぐのは絶望的だ。
「……条件も相手も、何もかもが最悪だな」
無意識のうちに苦笑が漏れていた。
だが、それが鋼一郎にとって操縦桿を手放す理由になるだろうか？　増して、白江との約束を違える理由になるだろうか？
「――誰かに護られるより、俺は誰かを護るようになりたいんだ」
一つ。たった一つだけ、この状況を覆せるだけのプランが鋼一郎にはあった。
そのために鋼一郎はヘッドセットを取り外し、自ら閉じた右目に指を添える。
「……悪い、由依（ゆい）。……お前との約束守れそうがねぇや」
きっと、それを圧し潰す感覚はいつまでも指先に残り続けるのだろう。

37

「うん。だいぶ馴染んできましたね」
ソラナキ式にただ一つの欠点があるのなら、短期決戦形態でもありながら慣らし作業を要す

るスロースターターであるという矛盾だ。しかし、その矛盾に目をつむれるだけの攻撃性があるからこそ、奈切(なきり)はこの形態を選んだのだろう。

改まって先刃を切ったのもソラナキ式を纏う奈切だった。

満身創痍のムラサメを前に、足を止める理由はない。その背に背負う輪は妖気エネルギーを圧縮して推力に変換する加速装置の意義を兼ねていた。

造形術で手刀の先にさらなる刃を追加形成。それを微細に振動させることで切断力を上げて、ムラサメへと迫るだろう。

「……右の袈裟斬りに見せ掛けた、膝蹴り」

鋼一郎(こういちろう)が呟く。

大きく奈切振りかぶる――そう思われた。だが、刃をムラサメを斬り付ける寸前に消失する。その代わりに刃を形成していた分の妖気エネルギーが膝から新たなる刃を形成した。

妖気エネルギーによって形成されたソラナキ式は奈切の思うがままに形を変える。その特性と変則的な初撃を見定めるのは、慣らし作業時の手刀を主としたスタイルの印象も合いまって困難を極める。

現に刃の軌道はムラサメのコックピットを正確に捉えている。ノーモーションで形成される刃の不意打ちは対応が不可能な攻撃だった。

それなのに。

「なっ――ッ!?」

鋭く伸びた刃は剥がれ掛けの装甲を擦過し、火花を散らす。

ムラサメが小さく膝を降り、最小限の動きで刃の軌道をコックピットから外したのだ。

「そこだッ！」

残された装甲の一枚を犠牲にソラナキ式の懐へと飛び込んだ。左のマニピュレーターをキツく結び、ノーガードの腹部へ裏拳を叩き込むッ！

それは最早、無茶の一言で済まされるような狂気ではなかった。しかし、それは狂気であると同時に同時にこの絶望的な状況を覆す唯一の可能性だ。

B・Uを酷使し続けた果てに危惧されるのは失明や、脳へのダメージ――そして、脳の制限を外し過ぎたために起こる新たな症状の併発だ。

「段蹴りに見せかけた、アッパーカット」

またも鋼一郎は奈切の攻撃を避けてみせる。

鋼一郎の右目。それは自らの手によって圧し潰されていた。

鋼一郎の右半分を塗りつぶしたのは、赤黒い血と堪えがたい激痛だ。それでも体勢を崩したソラナキ式へとさらなるカウンターをねじ込む。

効き目である右が壊れれば、その分の負荷が残された左目に集中するだろう。その負荷をかけた果てに新たな症状を併発させることこそが、この状況を覆せる唯一無二の可能性だった。

狂気と言われても仕方がない。
本来それは思い付けたとしても実行できない手段のはずだ。負荷で両目が壊れてしまうリスクを考慮した場合、天秤が釣り合っているとはとても言い切れない。
だが鋼一郎はそれを手繰り寄せていた。右目を捨て、その先に見えた一縷の可能性を掴み取ったのだ。
「超並列演算処理能力」――――右目の代わりに鋼一郎が手にしたのは、瞳から得られた情報と脳に蓄積された情報をもとに標的の行動を予測できる症状であった。予測するパターンはひとつにとどまらず、一秒間に数百から数千の可能性を同時にシミュレートし、最適解を選び出す。
その力を有体に言ってしまうなら、『未来予知』と呼ぶのが、最もふさわしいのだろう。
「なぜです⁉　ソラナキ式に対応するなど、ただ人間では不可能なはず」
「なら俺がただの人間じゃなかったってことだなァ！」
ムラサメの拳がソラナキ式の顎を抉った。
「……ぐっ！　調子に乗らないでくれませんかねぇッ！」
避けられる可能性があるのなら、ソラナキ式は小さく背を丸めた。両腕を鋭利に加工。地面へ突き刺すことで固定し、下段から上段に向け大きく蹴り上げる。
装甲と内部フレームからなる凱機（がいき）からは繰り出せないであろう柔軟さと変則性に加え、奈切の格闘センスがなくては繰り出せない動き。これも本来ならば不可避の一撃だったであろう。
「あと九分……」
だが、三度目の正直もすらも鋼一郎は避けてみせた。ゆらり、ムラサメの双眸が揺れる。
「……ッ！　ならば、崩壊術・」
「おい奈切。足が止まってんぞ」
ムラサメの肘がソラナキ式にひびを走らせた。
妖術を中断させると同時に、伸ばした左で正拳突きを打ち込む。加速装置（ブースターユニット）を吹かし、地面から足を離すことで全重量を攻撃の威力へと乗せた。
残り八分。攻撃は最大の防御という言葉通り、鋼一郎は十分間をひたすらに攻撃に徹することで、時間を稼ごうとした。
鋼一郎と奈切の実力も、ムラサメとソラナキ式の出力差も、未来予知を手に入れて、ようやっと対等なのだ。
平行線上に広がる思考の中で鋼一郎は幾度となく殺されていた。後手に回れば手数に圧倒され、未来予知のB・Uがバレれば対策を立てられる。
だから鋼一郎は攻撃に徹するしかなかった。
奈切に思考の余地を与えるな。拳を振るうために脳を使え。
「ぐっ……！」
負荷からなる激痛は脳を大きく締め上げるだろう。

右目からの出血と鼻血で顔をグチャグチャにしながらも、歯をきつく噛合わせる。
「あと七分だ……七分なんだ」
だが、先に限界が来たのはムラサメの方だった。残っていた左が反動で砕けたのだ。
オイル塗れの指先はあらぬ方向に曲がり、フレームから崩壊するだろう。
「しまっ――――」
超硬度を誇るソラナキ式を何度も殴りつける行為は専用のアタッチメントもなしに岩盤を殴りつけるのと同義だった。
自らと標的の装甲を見誤ったが故の損傷。これを補うためにさらなる演算が求められた。
「ッ……まだだっッ！」
思考を修正。再演算を開始しようとした。しかし、その隙を奈切が見逃すわけもない。
「転移術・駒ッ！」
触れた五指がムラサメの右膝から下を消し飛ばすだろう。すぐ背後に引きちぎられた右足が転送された。あと六分。両腕と片足を失ったムラサメに残された可能性を模索する。
「白江の分の脱出装置はちゃんと動いてくれるな……それならッ！」
自分の座る前方座席には、歪んだフレームが噛み合いロックが掛かっていた。無理に作動させようとすれば、機体が大きく軋む。
寧ろ好都合だと、鋼一郎は嗤ってみせる。奈切への勝利条件は、三柱の玉とそれ持つ白江の生存だ。
彼女を生存させ、尚且つ三柱の玉の条件を満たす方法ならば、幾千の思考から既に見つけ出していた。
「行くぞッ、奈切ッ――――！」
残り五分。鋼一郎はムラサメを一気に加速させる。白江の残してくれた妖気エネルギーと、最後に残された片足。それだけあれば充分だ。
鋼一郎は機体の自爆装置に指をかけていた。どうしたって、あと五分もすれば脳の方が蒸し焼きになる。
B・Uとは脳の安全装置が外れた状態。本来は高性能のコンピューターを用いるような数の分析と予測、最適解の選択までを一つの脳で行うのだ。機械がオーバーヒートを起こすように、いつ沸騰した血液が血管を破いたとしてもおかしくはない。
「ッッ……がぁぁァ！」
キリキリとした痛みが脳を締め付けるだろう。
ムラサメがソラナキ式へ抱き着いた。ソラナキ式の装甲の鋭利さを利用し、敢えて刃を突き刺すことで機体の固定を試みる。
「……頭がイカれていますよ、君」
奈切は鋼一郎を跳ね退けるだろう。それでも這いずりながらでも、機体を必死に起こす。
今はただ思考を回せ。
奈切の外殻を逆回転させたエンジンの誘爆によって消し飛ばせることは、三年前に証明済み

だ。それをゼロ距離で爆発を喰えば、さすがの奈切もタダでは済まないはず。
残り四分。奈切をあと四分で拘束し、自爆に巻き込むためだけに思考を回せ。
「……白江。あとは任せたぜ」
一つでも多くのパターンでも多くの思考を処理するために、鋼一郎の意識というものはほとんど途切れかけていた。

◇◇◇

それはかつて憧れた恩師の背中だった。
脳に残された僅かなキャパシティを利用し、幾千の演算の傍らの無意識で濡羽色をした長髪を見た。――――恩師、百千桃（ももちもも）の背中だ。
「こっち側に来るのが、随分と速いんじゃないかな？」
「……はは、ちょっと無茶が過ぎて」
「それは、ちょーっといけないね」
思考の果てに見る彼女は所詮、自らの記憶に蓄積された彼女の容姿と声を想起しただけの幻に過ぎなかった。それでも今の鋼一郎にとって、目の前の幻は紛れもない百千桃なのだ。
だからこそ、答えを求めた。自らがずっと胸に秘めていたものを曝け出す。
「俺は貴方が言ってくれたように、誰かを護れるようになりましたかね？」
「さぁ？　どうだろうね」
思考の中の彼女はゆっくりと振り返る。その顔に浮かべた笑みは、記憶にあった彼女のものと何も変わらない。
「それを確かめるのは、他の誰でもない君自身だろう？」
次の瞬間、鋼一郎はその頭を強く掴まれた。凄まじい力が鋼一郎の意識を引き戻す。

38

一面の氷がソラナキ式とムラサメの間に割り込んだ。凍てつく冷気は、脈打ち続けたエンジンさえも止めて見せる。
『『誰かを護れるようになりましたかね？』だと――――それを確かめるのは他の誰でもないお前さん自身じゃろうがッ！』
誰かがその怒号と共に鋼一郎（こういちろう）の頭をひっつかむ。振り返ると、白江（しろえ）が瞳いっぱいに涙を溜めてジッとこちらを睨んでいた。
常に笑みを絶やさず、強くあり続けようとした彼女が涙を流して、こちらを睨みつける。その鼻からは血もダラダラと垂れていた。

「……白江、それ」
「何じゃ、この程度が気になるのか？　ようやっと妖気が回復した矢先にどっかのアホ一郎が死にかけておたんじゃぞ。不得意な妖術の治癒でお前さんの脳を強引に直したせいで、また気絶するところじゃったわ！」
白江は「それよりも」と鋼一郎の血まみれになった顔を強く拭う。自らが潰した右目を見て、すべてを察したのだろう。
「……ワシがお前さんに無茶をさせてしまったのじゃな……すまぬの」
「まて、違うんだ！　それにお前に無茶をさせてしまったのは俺の方で、」
「ふっ。ならお互い様みたいじゃの。重症なのはお前さんの方じゃがな」
白江は涙を拭い、哀愁を滲ませながらもいつものように微笑んで見せた。

「――あのぉ、誰か忘れちゃいませんかね？」

氷によって築かれたバリケードはいとも容易く融解する。恐らく、紅蓮操術の熱だけをソラナキ式に纏わせたのだろう。その外殻は赫灼に染め上げられていた。
多少のダメージこそあれど、ソラナキ式は妖気エネルギーの形成物だ。加えて不滅の妖術をもってすれば破損部の修復も容易い。――――奈切総一（なきりそういち）は未だ健在である。
「十分経っちゃったみたいですね……それに鋼一郎くんの動きが変わったのは、B・Uの症状が変化した言ったところでしょうか？　……未来予知。あるいは、それに限りなく近い何かでしょうね」
奈切が静かに構えを取った。
「早急に決着を付けなければ」
「千年氷楼閣（せんねんひょうろうかく）」と「超並列演算処理能力」の両方を警戒し、笑みを絶やした奈切に隙はない。
「ッ……！」
「頭に血を登らせるでない」
再び操縦桿をキツく握りしめた鋼一郎の手に、白江がそっと指先を添えた。彼女の冷ややかな体温が鋼一郎を優しく抱きとめるだろう。
「のう鋼一郎よ……一人で握る刃で守れるものなどたかが知れておるのだ」
彼女は鋼一郎の上から操縦桿を強く握りしめる。
「じゃが、〝ワシら〟ならどうじゃろうか？」
白江の氷は大破したムラサメの欠損個所を補った。凱妖機は氷に支えられ、もう一度だけ立ち上がる。
「……そうだな。俺たちならやれる。なんだってやれるはずだッ！」
二人は妖気エネルギーを残された左に集約させる。

「「来いよ、奈切総一」」
渾身のカウンターキック狙い。
「フっ……」
妖気エネルギーの凪ぎ方を見れば、奈切にはその魂胆を容易に見破ることが出来た。
「馬鹿の浅い考えなんですよッ！　そんな安い挑発にどうやったら、乗れるのか？　逆にご教授願いたいッ！」
奈切が両腕を前に突き出した。その先端で妖気エネルギーを極限まで圧縮する。梨乃の胸を貫いた、あの熱線を放つつもりだ。
「安い挑発か……少なくとも、アタシは乗るねッ！　変化術・九々八十一式。五番・砲筒ッ！」
宙に向けて放たれたのは、超火力の妖力砲だ。
轟音と閃光が奈切から五感のうち二つを奪い去るだろう。大技を空撃ちにしなければ作れなかった隙には、九番の鎖が容赦なく伸ばされる。
「……なっ、なぜ、貴方がッ！」
九番・鎖に付与された『妖術』は必中。そして奈切が強く警戒していた拘束系の武器でもあった。
「貴方は胸を白聖鋼で貫いたはずッ⁉」
奈切の背後に立つのは、九つの武器を携えた犬飼梨乃であった。
「あぁ……それか？　それなら単にアタシも勤勉なだけって話だよ。凱機をバラして対策を練ってきたんだ。白聖鋼の対策だって考えてるに決まってるだろ？」
彼女は貫かれた自らの胸元を強く握りしめていた。その指先は雷電操術による微弱な電圧を帯びる。
白聖鋼の毒性はテトロドトキシンを参考に奈切が作り上げたもの。テトロドトキシンに有効な解毒手段が存在しないように、その毒性を寄り殺戮に特化させた白聖鋼の解毒も不可能であった。
ならばいっそ体内からの毒物排除と治癒を諦め、麻痺した呼吸中枢と再生した心臓を電圧によって無理やり動かしてしまえば良いだけのこと。
「なぁ白江、それに鋼一郎！　アンタらの『たち』ってのにアタシも混ぜてくれよッ！」
梨乃は以前に三柱の玉がなくともや代替案があると言っていた。それが彼女の奥義にある。
「変化術・九々八十一式・終式零番」
展開された九つの武器を一つに集約し、そこへ自らの妖気エネルギーを加算することのでき

る零番。しかし梨乃は今日に至るまで、肝心な武器のカタチを決めかねていた。――――だが、いまならば一切の迷いもなくそのカタチを選ぶことが出来るだろう。
「受け取れッ！　二人ともッ！」
それはムラサメに合わせ形成された二刀一対の大太刀だった。
円月刀のようにしなやかな曲線美と怪しさを描くのは妖怪と白江を象徴する一振り。
出刃包丁のように荒々しく危うさと頑強さを秘めた人間と鋼一郎を象徴する一振り。
「あぁ、しかと受け取ったとも……行くぞ、鋼一郎ッ！」
「さぁ、奈切ッ！　これが正真正銘ッ、俺たち三人の……いやッ！　お前と戦った皆の最後の一撃だッ！」
白江の妖気エネルギーを蓄積した左で強く踏み込む。踏板（キックペダル）はベタ踏みに。その刃にすべてを乗せた。
「「二振りッ――――抜刀ッ！」」
振り切った二対の大太刀は奈切を覆うソラナキ式ごと横一文字に切り裂くだろう。
そして返す刃が奈切を十文字に叩き切る。

39

口の中に溢れたのは数千年ぶりの鉄錆の味だった。全身が気だるくて仕方がない。
「どうやら……ここまでのようですね……」
ソラナキ式も二刀一対の大太刀も、その両方を形作るのは途方もない妖気エネルギーだ。そんなものを激突させれば、大爆発が起きることも知れていた。
そして、自らが対峙したのは、造氷術で爆発を遮ることのできる白江（しろえ）と、未来を見ることのできる鋼一郎（こういちろう）の二人。仲良く爆発に巻き込まれたなんてことは期待するだけ無駄だろう。
ほら、噂をすれば。爆発に巻き込まれた自分を探しに、アンバランスな背丈をした二人が現れる。
「見つけたぞ、奈切（なきり）……随分と似合わねぇところに飛ばされたんだな」
奈切の終着点は裏路地のゴミ貯めであった。
「そうですかね。僕には随分ふさわしい結末だと思いますが……」
不滅の妖術には一つ決定的な矛盾点がある。
単純な治癒の妖術と異なり、不滅の妖術は常時発動し続けるものだった。故にどれほどの致命傷を覆うとも即座に傷が再生される。これこそが奈切を千年間、あらゆる外因から、生き永らえらせた一番の要因であった。

だが不滅の妖術も、妖術である以上は体内を循環する妖気エネルギーを糧とする。限りある妖気エネルギーでの常時発動など、本来は不可能であった。
そもそも、奈切の身体には白江ほど大層な妖気エネルギーがあるわけでもなければ、梨乃のように変幻自在なわけでもない。妖怪としては、中の下がいいところだ。
「不尽の妖術……僕の妖気エネルギーが一定量を下回らない限り、体内に好きな波長の妖気エネルギーを供給できる特別な妖術でした。……ただ、その一定量を下回わちゃったようですね」
奈切の身体は腹から下がほとんど消し炭と化していた。
傷口から臓腑と妖気エネルギーがこぼれた彼の身体には、並みの回復術を使う余力すらも残されていなかった。
「……お二人とも、せっかくです。……お二人にもお伺いしたいのですが、お二人は何が妖怪と人間を分かつ境界線だと思いますか？」
自嘲気味に笑みを零した奈切は力なく鋼一郎たちへ問いかけた。
「そんなこと、考えたこともなかったな」
「ワシもそうじゃ。妖気エネルギーや外見、分け目は幾らでも見つけられるはずじゃ」
「……そうでしたか。……けれど果たして、本当にそうでしょうか？」
「それならお前はどう思うんだよ？」
鋼一郎の投げかける疑問は至極当然のものだったろう。
「……僕ですか。……僕はね、B・Uこそ人間と妖怪を分かつ境界線だと思うんですよ」
B・Uを発症した結果、身体に異常をきたすケースは数多く報告されてきた。身体機能における制限が外れたために、それに付随する形で筋骨が肥大化したケースは数多く報告されてきた。
現に鋼一郎だって瞳周りの筋肉と神経が常人よりも発達している。それを容姿から伺い知ることはできないが、頭蓋の形も少々歪になっているらしい。
「僕らのような人間に酷似した妖怪が一番わかりやすいんじゃないですかね？　異質な力を持ったゆえに変化した肉体がそれを生かすために最適化されたんです」
奈切は白江と鋼一郎を交互に指さすだろう。
「……幸村（ゆきむら）の娘さん。貴方は氷を操ることに特化したB・Uの発症者です。……鋼一郎くん。君は幾つもの未来を見通し、そこから最適解を選ぶ出せる妖怪なんですよ」
奈切の主張には幾つかの穴がある。
そもそもB・Uとは幼少期に受けた強いストレスから発症するものであり、多大なリスクを抱き合わせる上に、遺伝もしない。
一方、雪女の子供は雪女であり、九尾の子は九尾であるように、その特異性は遺伝するのだ。
それでも奈切は人間と妖怪のルーツは同じところにあると信じていた。
「僕はね、純血の妖怪ではないんです……ロマンチックな禁断の恋。その果てに産み落とされた僕は混ざりもののバケモノでしかないようですね」

人間と妖怪。それらがまったく異なる種だというならば、その両者の間に生まれた自分はいったい何なのだ？
人間でもなければ、妖怪でもない自分は本当のバケモノに成り下がるしかなかった。
「ただ居場所が欲しかったんです……ねぇ、鋼一郎君。僕はどこで間違えたんだと思います？」
「……それは、」
生まれたバケモノは穢れとされた。両親は目の前で惨殺され、自らは命からがらに妖怪の世界へと逃げ込んだ。
「きっと脳の形も君たちとは何かが違うんでしょうね。けど僕はそのおかげで賢くなれたんです……だから三柱さんたちのために頑張って色々なことを研究したんですよ。もう追い出されないように……必要だと思ってもらえるように……」
奈切の身体がほろほろと崩れ始めた。
造形術や転移術のような身の丈に合わない術を、不滅と不尽の妖術で誤魔化しながら使っていたのだ。その両方が解かれた今、その分の反動が奈切を蝕んでいく。
「幸村の娘さん……僕は皆さんのためにどう頑張ればよかったんですか？」
千年の時を戦ってきた悪の権化の独白はひどく弱々しいものだった。その顔に張り付けた笑みも、オーバーなリアクションも外付けに過ぎない。
「馬鹿者め……それじゃあ頑張らなければならぬのはワシらの方じゃないか。ワシらはお前さんに居場所を作ってやれなかったのじゃから……」
「そうでしたか……けど、僕はこれでも幸せ者かもしれませんね。最後に全部を吐き出せた。ようやっとスッキリすることが出来たんです。ですから、さっさと幕引きにしましょう」
討たれるべき悪に美談はいらない。バケモノは早々に討たれ闇に葬られるべきなのだ。
だからこそ、奈切は残された妖気エネルギーを絞り出し、ナイフを形作る。
白聖鋼（はくせいこう）製のひどく頼りないナイフだが、心臓に達するだけの刃渡りは十分すぎるほどあった。
「僕の作った百鬼たちは、僕の心臓の鼓動が消えた時点で連動し、機能が停止するようになっています。ですから、さぁ……」
ナイフを受け取ったのは白江だった。
「……のう、鋼一郎。……お前さんの目には未来が映っているのだろう？　ならばお前さんはこれからワシのする選択を許すことが出来るか？」
「今は無理だな。……ただ、俺がお前なら同じ答えを選んでいたとも思うぜ」
白江はナイフを投げ捨て、懐から三柱の玉を取り出した。
「……なぜです？　……今なら僕を殺せるんですよ……それに君たちは僕を殺したいほど憎んでいて……」
三柱の玉は不滅の奈切を閉じ込めるための小さな檻だ。中で絶え間なく対象の破壊と再生が行われる。しかし、その効果は裏を返してしまえば対象を何時までも生きながらせる生命装置にもなりえた。

「奈切よ……確かにワシらはお前さんを殺したいほどに憎いし、赦せない。ただワシらを許せないのはお前さんも同じであろう。なら、互いが許し合えるその日まで――お前さんの居場所をワシらが作ってやれるその日まで、少し休んだらどうだ？」
「はは……そんな日が来るのなら」
もしも本当にそんな日が来るのなら。それは奈切にとっての救いであった。

40

二〇二八年　九月二十日　午後一時二十分
東京　柄沢市・榑沢霊園へと続く道中

九月も後半に差し掛かろうというのに、まだ外は異様に蒸し暑い。異常気象のせいなのか。じりじりと照り付ける炎天下を恨めしそうに睨みながら、克堂鋼一郎は額に浮かんだ汗を手の甲で拭った。
報告のため、二か月という短なスパンでも百千桃の墓前に足を運ぶことは鋼一郎にとってはさして珍しいことでもなかった。ただ、誰かと二人でというのは初めてのことだ。
「暑っ……つか、お前は大丈夫なのかよ」
「大丈夫なわけがあるか……こんなのワシの身体がいつ溶け落ちてもおかしくはないぞ」
右目に黒い眼帯を当て、車椅子に腰かけるのは私服姿の鋼一郎だ。そして、後ろでは日傘を指した白江が同じように手の甲で汗を拭った。
奈切と決着から一か月。鋼一郎が入院している間に随分といろんなことがあったらしい。
まずは妖怪に纏わる真実の公表。奈切が消えた今、真実を隠すものはいない。それによって社会は大きな論争に発展するも、「妖怪と共存を目指す会」の設立や政府の迅速な対応、新法案の準備など、ことは辛うじて前向きに進もうとしていた。
その他にも祓刃の解体が決定したことや、奈切コーポレーションが倒産に追い込まれたこと。押収されたムラクモと百鬼の台数がデータ上の数字と会わなかったこと。大規模なデモが起こったこと。数え出してはキリがないのだが、そのほとんどを鋼一郎が知ったのは全て退院後のことだった。
そんなニュースを鋼一郎が聞いてしまったら入院中など関係なくベットから抜け出すだろう

と、由依(ゆい)が情報規制をかけていたのだ。おかげで病室にテレビやラジオの類はなし。おまけにスマホまで取り上げられるものだから、退屈な時間を筋トレで潰し、医師と看護師に本気で怒られた。

「のう、鋼一郎……あっ、いや、」

白江が途中まで言いかけて、押し黙る。口をへの字に曲げ、悩んでいるようだ。

「どうした？　いまさら隠し事かよ？」

「そういうわけじゃないのだが……お前さんはすでに未来が見えているのだろう？　ならば、わざわざ言う必要があるのかと思って、」

何だ、そんなことか。確かに超並列演算処理能力をもってすれば、彼女の次の言葉を予測するのも容易なことであろう。ただ、あれは脳への負担が大きすぎる諸刃の剣だ。現に白江による妖術の強引な治癒がなければ、確実に脳が焼き切れてただろう。

「安心しろよ、今は薬でB・Uの症状を抑制してる。だから未来も見えねーよ」

というか、それが世間一般なのだ。B・Uの特異性を生かせる仕事だって限られている。だから抑制剤を用いて脳への負荷を軽減するのが、無難な選択だった。

「歩けなくなったのも抑制剤の副作用だが、ある程度もすれば薬の量を減らしてもいいって説明された。まぁ、そのうち松葉杖でもついて歩けるようになるだろ」

「随分と適当じゃな。……もしや、また無茶をする気じゃあるまいな」

「そこまで俺もバカじゃねーよ。悲観しても仕方がないって話だ。それより、お前は何を言いかけたんだ？」

「おっと、そうじゃった」

白江の言いかけたのは、鋼一郎の身の回りについてだ。

「仙道(せんどう)はどうなったのじゃ？」

「あの人なら、指名手配が解かれたあとも働き詰めだって聞いたな。全部の責任を取ってくれるとは言ってたけど、あの人はマジで全部の後始末をやろうとしてくれるんだ」

ここ数日、記者会見で仙道を見ない日はなくなった。あの決戦の夜だって奈切の送り込んだ百鬼の襲撃を察知し、皆を逃がしてくれた。あの人が有能なのに間違えはないが、今は有能がゆえにいらぬ心配をしてしまう。

「というか、梨乃(りの)の方はどうなったんだよ？　胸を撃たれてたんだよな」

「あぁ、アイツなら」

梨乃はすっかりと回復したらしい。白聖鋼(はくせいこう)の毒に犯されて尚、電撃で強引に心臓を動かしたのは彼女くらいだとか。

妖怪たちの間ではずっと姿を隠していた白江よりも、活動を続けていた彼女の方を慕う声の

方が多いらしい。白江自身も柄ではないと割り切っているし、今は梨乃が妖怪代表として生き残った妖怪のまとめ役や、人間たちとの対談を務めているらしい。
「梨乃が多くの人間の命を奪ったことに間違えはない。ただ、人間と妖怪にために尽力するアイツの姿は、恐ろしい妖怪に思えないというのがもっぱらな評価のようじゃ」
「そういえば、たまに仙道さんとも仕事してるんだっけ？」
「そうらしいの。ところで、彼女とはどうなったのか？　ほら、特にお前さんと仲の良かったあのメカニックじゃ」
鋼一郎が露骨に顔をしかめた。どうにもバツが悪そうに目を逸らす。
「由依とは絶賛、喧嘩中……というか口を聞いて貰えてない」
やはり「怪我をしない」という約束を破ったのが不味かったのだろう。傷だらけな上に右目まで潰れた鋼一郎を見て、彼女は約半日泣き続けた。
そのあと、泣き疲れた彼女は寝てしまい、目を覚ましたらいつものお説教が始まったというわけだ。
「いい加減、謝らないと思ってるんだけどな……いまいちタイミングが掴めないんだよ」
「それは彼女も同じじゃと思うぞ。というか、それ。悪いのはどう聞いても約束を違えたお前さんだからな！」
「うっぐ……！　けど、仕方ねぇだろ、あれは！」
「言い訳無用ッ！　乙女とした約束を死んでも守るのが男というものじゃ。約束を守れぬ男など、死んだ方がマシじゃというもの！」
そうこう言い合っているうちに、彼女の墓前まで辿り着いた。こんな喧しい二人での墓参りも初めてだ。ただ、賑やかなことが好だった彼女のならば、笑って許してくれるだろう。
「実はの、ワシが千年氷楼閣（せんねんひょうろうかく）を使ったせいで気を失っているとき、彼女の……桃の声がしたのじゃ」
線香を上げようと鋼一郎がライターを弄っていると、白江は少し改まって口を開いた。
「お前さんを助けてやってくれとな。お陰でワシは飛び起きてしまったわ」
「それって……」
思い返せば白江と知り合ったのも、墓参りの時だった。そして、白江は桃と顔見知りであると言っていた。
改めて考えなくとも妙なことだ。
「なぁ……白江。お前は百千桃について、いや奈切桃について、どれだけのことを知っていたんだ？」
「そうじゃの。それも話しておかねばならなかったな」

◇◇◇

それは遡ること千年前――

白江は陰陽師の一団に追い詰められ、命からがら森の中へと逃げ込んだ。しかし、それは彼女の仕掛けた罠である。木陰に身を隠し、氷の妖術で一人、また一人と追手を葬っていったのだ。

だが、一人の陰陽師だけが白江の動きを見切っていた。その筋の人間だと言うに刃物の扱いに長け、二振りの短刀から繰り出された連撃に白江は一気に距離を詰められてしまった。

「やぁ、君が三柱・雪女の娘さんだね」

気がつけば白絵の視界は百八十度回転していた。投げられたと自覚するにも数秒を要しただろう。

その無防備な背中に腰掛けた彼女こそ、当時の百千桃であった。

◇◇◇

「それじゃあ……お前もあの人にボコられたのか……」

「あぁ……じゃから、お前さんの話を聞いていて、彼女も変わっておらんのだと呆れてしまったわい」

本当に彼女は千年間変わっていない。

奈切を討つために必要な仲間を集めていたところもそうだ。

「追い詰められたときは、死期を悟ったさ……けれど彼女は陰陽師の癖にワシに取引を持ち掛けた。ここで死ぬか、ワシに奈切を討つための協力者になるか、とな」

後者を選んだ白江に対し、彼女は「時が来るまで生き延びろ」とだけ言い残し去って行った。

「正直わけが分からんかった。イカれてるとさえ思ったし、二度と会うこともないと思っていたんじゃがのう」

それから五百年後。

彼女はまた人間に追い詰められていた白江の前に現れ、その命を救って見せた。陰陽師の頃と何も変わらぬ姿で現れた彼女に白江は驚かされたという。

『『あと数百年もすれば、技術も進みもっと強い武器が手に入る。戦闘経験を重ねれば私ももっと強くなれる。君のように強い協力者を集めることもできる。だから、まだ待っていてくれ。時が来たら、共に奈切を討つんだ』と誘われた。そしたら、また何処かへ消えてしまったよ」

次第に白江は彼女に興味を持つようになっていった。

奈切の持つ不滅の妖術を不完全な形で引き継ぎ、何度も彼女が生まれ変わっていたこと。そして、彼女が影で奈切を討つために暗躍していたこと。それらを知るのにも、そう時間は掛からなかった。

「というか、探ってる途中に彼女に捕まって、ことのあらましを聞かされた。今日までこのことをお前さんに黙っておったのは、決戦前にいらぬ動揺を与えぬためじゃ」

「所詮ワシは百千桃の計画を引き継いだに過ぎない」と白江は自嘲気味に笑ってみせる。

『彼女は父を止めたい。その為なら手段は選んでいられない』と言っておった。その特異な定め故に当時は奇病とされたB・Uを患って尚も彼女の心はブレなかった。幾度となく生まれ変わりは、いつ発狂してもおかしくはないというのにだ。
千年間もの時で、自らはひたすらに強さを磨き、その一方で有力な妖怪たちに声を掛けては共に戦ってくれる仲間を集め続けた。ワシ以外の妖怪のほとんどは奈切に殺されてしまったが、それでも千年間、ずっと彼女は来るべき決戦の時まで手筈を整えてきたのじゃ」
そして、最後に桃に会うことになったのが今から二年前。また彼女の方から白江の前に現れたのだ。
祓刃隊員として多くの妖怪に恐れられる一方で彼女の計画は大詰めに入ろうとしていた。奈切に対抗できる力を秘めたカラクリ人形の「凱機（がいき）」。そして自分と同じようなB・Uを患うこととなった教え子たち。

――あと五年もすれば、ようやっと決着を付けられる。だから、最後にもうちょーっと待っててね。

――それから、こんな私の妄言に付き合ってくれてありがとう、白江。君が生きていてくれたから、私も今日まで一人じゃないって頑張れたんだよ。

「……ワシは確かに百千桃という人間を千年前から知っていた。けれど、過ごした時間はほんの僅かじゃったから。じゃからワシは彼女がどんな人物なのかを知らぬのじゃ。ずっと……ずっと千年もの間、互いを信じ合った仲間だというのにな」
白江の言葉にはどこか寂しさが滲んでいた。
桃の末路は知っての通り。決戦を前に、その動きが大きくなった彼女は奈切に勘付かれ、消されてしまった。
「……ッ」
もっと彼女と一緒にいたかった。もっと彼女のことを知りたかった。そう思うのは白江も同じなのだ。
「最後にもう一つ。彼女はより厳密に言えば奈切の娘ではない」
「えっ……」
「捨て子だったそうじゃよ。それを何かの偶然で拾った奈切が、自らの不滅の術を付与した。じゃから桃は不完全な形で特異な体質を引き継いだのじゃ。奈切も奈切なりの情があったのだろうし、そう思うからこそ桃だって一度も父を憎いとは言わなかった。誤りを正したい。その凶行を止めたい。と、ただそれだけを願っていたのじゃ」
「それじゃあ、桃教官は」
「命を弄ばれていたわけではない。報われなかったわけではないのじゃよ」

それがせめてもの救いになるだろうか。ただ、胸に広がるのは複雑な、言葉にし難いような感情だ。

鋼一郎にとって桃は自らを喧嘩に明け暮れる日々から救い出してくれた恩師であり、彼女が恩師だったからこそ今の自分があることに変わりはない。けれども自分は彼女の背負うものを何も知らなかったのだという虚しさが心のどこかにはあった。

「俺は……」

「そんな顔をするでない！　桃もお前がそんな顔をすることは望んでない。それにワシらは彼女の悲願を成し遂げたんだ！　もっと誇ったていいくらいじゃぞ！」

「分かってはいるけどよ……やっぱそう上手くは整理もつけられねぇよ……」

奈切との決着はつけられた。桃にとっての千年もの悲願が果たされたなら、彼女は次に何を望むのだろうか？

「桃教官、俺は……いや、」

墓石は何も語らない。そこまで言いかけて首を振った。答えを彼女に求めるようでは、きっとまた叱られてしまうだろう。

「鋼一郎。それでお前さんはこれから、どうするわけだ？　祓刃は解体されたようじゃが、行く当てはあるのか？」

鋼一郎は押し黙って考える。近しい親族もいなければ、一般の高校にも通ったこともない自分に働き口があるのだろうか？

片目のハンデだってある。強いていうのなら、今からでも大学に入って猛勉強をする選択が無難であろうが……ただ、やるべきことならば一つハッキリとしたものがある。

人間と妖怪――その関係は真実が明かされたところで、自分と白江のようなものになるとは限らない。人間の中には全てを知って尚、憎しみを拭えないものがいる。そして妖怪達もそれは同じだ。

現に今だって仙道と梨乃の両方が騒ぎを抑えてこそいるが、「妖怪追放運動」や「反人間思想」といった聞きたくもない単語を度々ニュースを耳にする。

「俺は人間と妖怪、その両方を護りたい。きっとあの人もそれを望んでくれると思うから」

「そうか、ならば一つ提案なのじゃが――」

彼女はニヤリとほくそ笑む。

「ワシはこれから祓刃の後任となる、人間と妖怪の両者の間に起こるトラブルを取り持つ組織を作ろうと思うのじゃが、人手が足りてなくてのう……うーむ、なんとも困ったものじゃのう？」